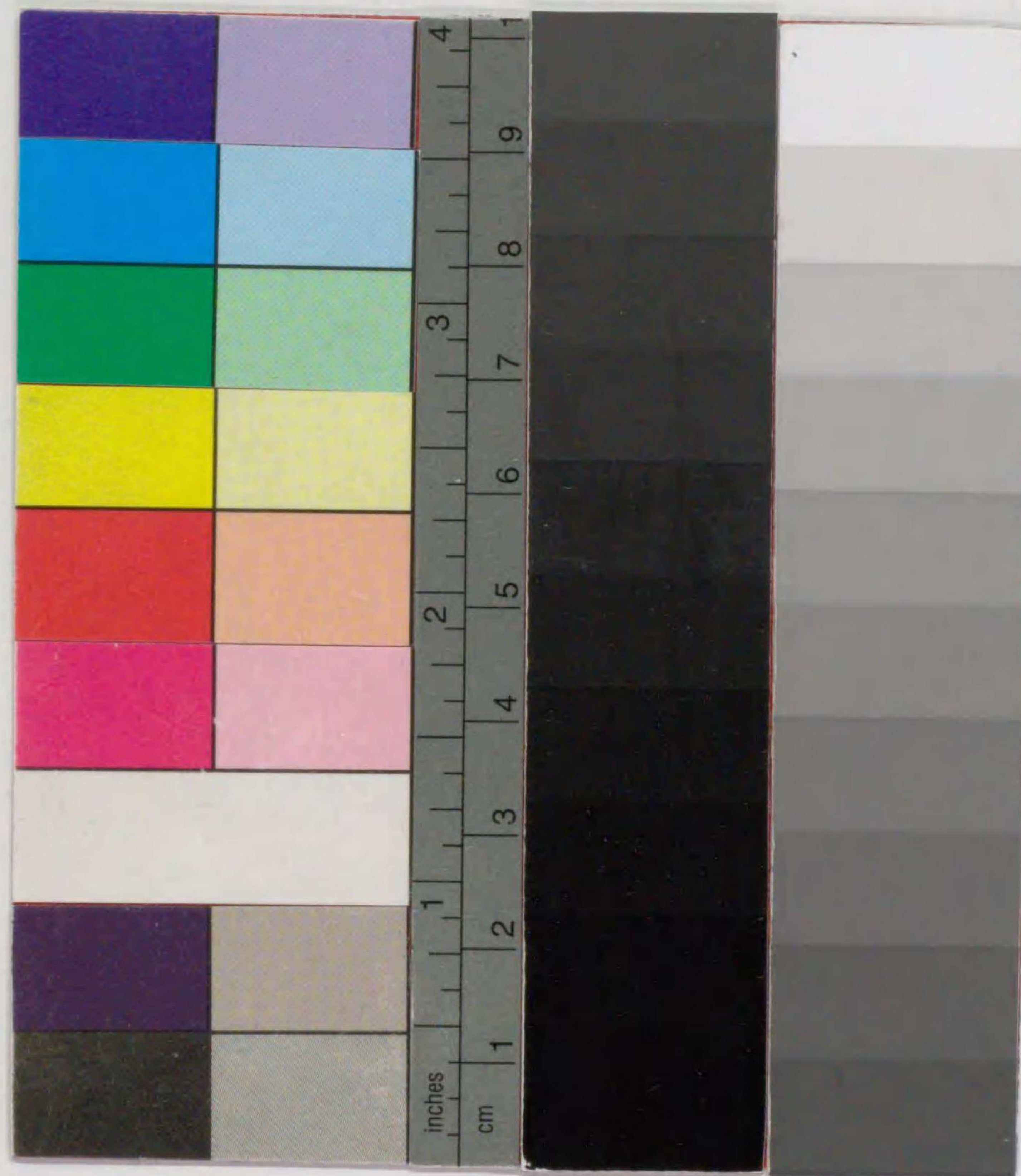


578-330



1200501520833



24. 10. 26

138

George Willis Botsford;
A History of The Ancient World.
Tr. by K. Takebayashi.



西洋
古代史概説

九州帝國大
學司書官
竹林熊彦譯
大
學教授
ボツフ
オード著

東京
改造社



故
文學博士
坂口昂先生の靈に獻ぐ

578-330

序

本書を公刊する時、その一部を文學博士坂口昂先生の座右に獻け、親しくその批判を聞くを楽しみとせり。今や幽明の境を異にして而もこの書を獻くべきは先生の靈前に外ならず。

回顧すれば明治四十四年、先生海外留學より歸朝して西洋古代史を京都帝國大學に講ぜらるゝや、予も亦その筈に列するの光榮に浴せり。予の古代史に對する興味は、これを前にしては同じく濱田耕作先生の考古學概論と、これを後にしてはオックスフォード大學のセイス老教授の講演と相俟つてこの時に喚起せられたりと言ひ得べし。されば予はその業を終はるに先ち古代史に關する論文一篇を草し、先生と原勝郎先生内田銀藏先生との試問に應ぜり。今や三先生すべて亡し、その溫容を仰ぐ能はず、その馨咳に接するを得ず、嗟。

その後暫く身邊の事情により古代史の領域を離れたるが、同志社大學豫科に教鞭を取るに及び主として古代及び中世を擔任し、爾來數年間は予に取つて最も快適得意の時代にして又た先生より最も提掣を受けしこと大なりき。次いで予は教壇を去り先生の推舉により九州帝國大學法文學部の創設せらるゝと共に、この地に來りて掌書の事務に携はること、なれり。當時の落莫たる生活に對す

る唯一の慰藉たり刺戟たりしものは本書の譯述にありき。この間先生は遠く書を飛ばして親しく獎勵を與へられしこと一再に止まらざりき。而も草稿の成りし時には先生既に簀を易へ給へり。曩に先生の約せられしことも空しくなれり。されど、もともとこれ一己の慰安の爲めに着手せし業餘の行樂のみ、敢て世に問ふべくもあらず。今これを改訂して剗削に附するを得るは全く改造社員濱本浩君の好意と慇懃とに由る。今より二十年前同君と予とは學寮を共にし、一棟の下に起臥寢食せしことあり、その縁故を以て予のために斡旋せられたるは眞に感謝の至りに堪へず。

原著者デヨウヂ・ウキリス・ボツフオード博士は、一八六二年五月九日アイオワ州ウエスト・ユニオンに生れ、ネブラスカ大學に入りてその業を終へ、コーネル大學院に於て『ドクトル』の學位を得一八八六年よりカラマヅー大學の希臘語教授となり、ベタニー大學に轉じ、更にハーバート大學に希臘ローマ史を講じたりしが、一九〇二年コロムビア大學に聘せられて古代史の講師となり、助教を経て教授に進み一九一七年の歿時に及ぶ。その間屢々伊太利に遊び、また米國言語學會及び米國史學協會に席を列ね『季刊政治學評論』の編輯に與れり。一八九三年『アテネ憲政發達史』『The Development of Athenian Constitution』を公にせしを始め、歿後一九二二年に出でし『希臘史』『Hellenic History』に至るまで若干の著述と、研究論文とは學界を裨益せしところ尠しとせず。性、社交を好まず研究室にあつて隱遁者の如く孜々研究に耽るを樂しみとせり。十二月十三日(一九二七年) 例

により自宅より研究室に入りしが急に病を發し、醫師の來るを待たず溘然として逝く。有爲の學識を藏し將來に活動を期待せられつゝ、世を去りしは、尙ほ坂口先生が病臥旬日に満たず、深く學界と同僚と門下の哀惜のうちに歸幽せられしに比すべき歟。

斯くの如くして本書は恩師の直接間接の指導と、友人の親切と原著者の卓越せる學識とにより世に出づるを得るに至れるなり。されど原著者がその序文に於て述ぶるが如く、三十年に亙る根本史料の研究、解釋との結果に成りし著述を、不敏予の如きものがこれを邦文に移すが如きは一種の冒瀆として著者と恩師とに對し内心忸怩たらざるを得ざるものあり。遮莫、中等諸學校の教授參考用として、將た高等專門學校の學生參考用として稍詳細なる邦文著述の世に行はるゝもの極めて稀なるの秋、本書は西洋古代史の範圍に於て小補なしとせざることを確信す。若し夫れ往年予が教室に出入せし青年男女の學徒にして偶然本書を手にし、ありし日の學窓を回想することあらんか、譯者に取つては望外の幸福を感ずること一層深かるべし。

譯文は忠實且つ平明に努めたるも、彼我文脈の相違と譯者不文の致すところ、所期の萬一をも爲し得ざりしは深く遺憾とす。尙ほ原書には多くの地圖及び繪畫の類を收録せられあるも、此等はすべて割愛せざるを得ず。讀者は宜しく信賴すべき歴史地圖、例へば Shepherd: Historical Atlas 或は Putzger: Historische Schulatlas 等坊間廣く行はるゝもの、若くは Droysen: Historischer Hand-

Atlas 等に就き参照せらるべく、繪畫については美術作品集を繙くの勞を取らるべし、世間その類書に乏しからず。更に原書各章の末尾にある『問題集』『筆記要項』、巻尾の参考書目も省略するの已むなきは偏へに諒恕を請はざるを得ず。

草稿の改訂に當り、縦横塗沫の難文字を淨寫するの勞に當られし友人文學士重久篤太郎君、同櫻井益雄君、雌黃滿幅の再校を援助せられし同僚文學士鈴木重貞君、出版については前記改造社の濱本君、並びに比嘉春潮君、村上敦君の好意に對し最後に、然し最小ならざる—— Last, but not least —— 感謝をいし、に記すは譯者の最も光榮とするところ也。

昭和五年六月中旬初校を了りし日、梅雨に濡る、庭前の綠を眺めつ、

譯者 竹林 熊 彦

西洋古代史概説

目次

第一篇 東方諸國民

第一章 緒言 古代史の範圍	一
第二章 埃及	七
第一款 土地及び人民——政治史	七
第二款 埃及の文明	一六
第三章 チギリス・ユウフラテス平野	二二
第四章 シリア——フェニキア人及び希伯來人	三六
第一款 フェニキア人	三六
✓ 第二款 希伯來人	四三

目次

第五章 メヂア・波斯帝國……………五〇

第一款 印度歐羅巴種族・イラン族・メヂア帝國……………五〇

第二款 波斯帝國……………五三

第三款 東洋文明撮要……………五九

第二篇 ヘラス……………六三

第六章 國土と民族……………六三

第七章 クリート・ミケーネ文明……………七三

第一款 遺跡・住民……………七三

第二款 クリート文明……………七四

第三款 ヘレネスの移住……………七六

第四款 ミケーネ文明……………七六

第八章 植民の第一期・叙事詩(ホーマー)時代……………八三

第一款 植民の第一期・ヘレネス種族……………八三

第二款 叙事詩(ホーマー)時代……………八五

第九章 宗教・神話……………八八

第一〇章 都市國家と其の發達……………一〇四

第一章 植民地發展の第二期……………一二二

第二章 スパルタの勃興とペロポネサス同盟……………一二三

第三章 アテネの王政より民主政へ……………一三四

第一款 王政……………一三四

第二款 貴族政治・富人政治……………一三六

第三款 ソロンの改革……………一四五

第四款 僭主政治……………一五一

第五款 民主政治……………一五五

第四章 知的覺醒……………一六二

第五章 リヂア人及び波斯人の亞細亞希臘征服……………一六六

第六章 波斯及びカルダゴ戦争……………一八七

第一款 第一回及び第二回の遠征……………二八七

第二款 準備の期間……………二九一

第三款 第三回遠征……………二九四

第四款 カルタゴ戦争……………三〇三

第一七章 デロス同盟とアテネ帝國……………三〇八

第一八章 ペリクレス時代……………三二七

第一款 ペリクレスの帝國主義……………三二七

第二款 ペリクレスの民主政治……………三三三

第三款 社會及び教育……………三三六

第四款 智的生活・アテネの天才……………三五三

第一九章 ペロポネサス戦争……………三四七

第二〇章 シシリ―遠征……………三五五

第一款 シシリ―遠征……………三五五

第二款 戦争の末期……………三六三

第三款 文化の進歩・新學問……………三七一

第二一章 シシリ―の僭主と解放者……………三七六

第二二章 スパルタの覇權……………二八三

第二三章 テーベの覇業……………二九八

第二四章 マセドンの勃興……………三〇四

第二五章 アレキサンダー帝國の基礎……………三二六

第二六章 希臘精神の成熟……………三三四

第二七章 ヘレニスタック時代……………三三三

第一款 政治的事件……………三三三

第二款 ヘレニスタック文化……………三四五

第三篇 ローマ……………三五〇

第二八章 國土及び人民……………三五〇

第二九章 ローマの王政……………三六一

第一款 神話……………三六二

第二款 人民及び國家……………三六七

第三〇章 初期の共和政(上)・平民の權利獲得……………三七九

第三一章 初期の共和政(下)・ローマの霸業……………三九六

第一款 南エトルリア及びダチウムの併合……………三九六

第二款 伊太利の征服……………四〇三

第三二章 ローマの統治組織・文明の進歩……………四〇七

第一款 組織……………四〇七

第二款 文明と特性……………四一三

第三三章 ローマ權力の發展……………四一六

第一款 第一ポエニ戦争・シシリー争奪戦……………四一六

第二款 『休戦』期間……………四二四

第三款 第二ポエニ戦争……………四三二

第三四章 ローマ權力の膨脹……………四三二

第三五章 金權政治の發達……………四五三

第一款 政治及び社會狀態……………四五三

第二款 ローマの名士と文明……………四六〇

第三六章 軍國主義への革命……………四六五

第一款 グラッカス兄弟の改革……………四六五

第二款 元老院の權力恢復……………四七六

第三款 元老院統治の顛覆及び復活……………四八五

第三七章 軍閥と共和政との衝突……………四九一

第一款 ボムペイ、キケロ及びケイサル……………四九一

第二款 繼承の戦……………五〇九

第三款 文化……………五一三

第三八章 プリンセプスの政治・ユリウス家の君主……………五二八

第三九章 ローマの君主政治・クラウヂウス家及フラヴキウス家……………五三三

第四〇章 五賢帝・制限王政……………五四九

西洋古代史概説

八

第四章 革命の百年・軍人皇帝……………五二

第二章 専制君主政……………五七

第一款 政治史……………五六

第二款 基督教の歴史……………五四

第三章 帝國衰微の原因……………五九

第四章 ゲルマニの侵入……………五六

第一款 ゲルマニ人の生活と特質……………五七

第二款 ゲルマニ人の侵入……………五九

第五章 新ゲルマニ國家……………六〇

第六章 法王權とフランク王權の發達……………六三

重要事項年表……………六九

目次終

西洋古代史概説

G・W・ボッツフォード 著
竹 林 熊 彦 譯

第一篇 東方諸國民

第一章 緒言 古代史の範圍

第一節 現代世界 廣く現代を觀察するに、國民と民族とは著しく其の特質と習慣とを夫々異にしてゐる。ある國民は整頓せる家庭・完備せる政府・道德的宗教・學校・圖書館・壯大なる工場・電信・電話其の他幾多の娛樂と便宜とを有する。斯る民族を文明人と稱し、合衆國・大英帝國・佛蘭西其の他の歐米諸國は何れも世界の文明國である。然し中央阿弗利加諸國の如きは野蠻國である。此等兩極端の間にはあらゆる程度の文明が存在する。斯る程度の由て來る所以は、ある民族は數十百年間殆んど沈滞せる生活を送りしに對し、他の民族は進歩を遂げたからである。

第二節 野蠻・未開・文明の區別 世界史には屢々野蠻 Savagery 未開 Barbarism 文明の語を使

第一章 緒言 古代史の範圍

用する。野蠻とは最も粗野低級の生活状態を指す、狩獵・漁撈をもつて生活し一定の住居を有せざるか、或は最も粗末なる家屋を有するに過ぎぬ。未開は野蠻と文明との中間に位す。ある學者は陶器の製造に始まり、音標文字の發明に終る時代なりと便宜上定義を下してゐる、文明とは一般に改善を意味し、狹義には未開以上の生活状態を指す。吾人は文明なる語を以て、特に市民の生命財産を保護し得る有力なる政府と、秩序ある社會と、進歩せる藝術・科學とを聯想する。文化とは文明の別語に過ぎぬ。

第三節 歴史 歴史は主に進歩と關聯する、従つて生活状態を改善したる國民のみを叙述する。

歴史は記録を本とす、文字の發明後事實を記録し保存するに至りし時期を以て歴史の端緒とする。吾人の知る範圍に於て埃及人は最初の文明民族である。彼等は紀元前五千年代(5000—4000)に既に文字を發明して居る(註)。故に世界史はこの時を以て始まると稱し得る。吾人は人類が何時地上に出現せしやを知らぬ、然し吾人は歴史の黎明期に於ける埃及人の生活状態に到達するまでに、人類は幾千萬年を必要とせしことであると信ずる。約言すれば過去七千年に互る歴史時代は全人類生活の一小部分たるに過ぎぬ。

(註)第三節以下

第四節 先史時代 歴史以前の時期を先史時代と言ふ。先史時代の知識は記録以外の全く異なる

材料に仰ぐ。先史時代の研究資料は主に人類の作品、例へば道具・武器・裝飾品・城壁・住居・墳墓・寺院の遺跡等である。此等を研究の對象とするは考古學である。多くの器具・裝飾品其他原始人の作品は、嘗て彼等の住居たりし洞穴に、墳墓に、耕地に、狩獵・漁撈せし河川の礫床に、或は村落の墓地に發見せられた。此等の材料より先史時代に於ける人類の進歩を辿ることが出来る。

第五節 歴史時代の時期 歴史は河流の如く繼續してゐる。時に緩漫に時に急速に、屢々方向を轉ずるも決して停滯するところがない。歴史の一時期とは人類、或はその一部が特殊なる方向に進展し或は衰退せし時代である。一の時代は他の時代に漸次推移して行く、従つて前後の時代はその分界線を判然することが困難である。七千年に互る歴史時代を古代、中世、近世の三大時期に區分する。最近の約五世紀を通常近世と稱するも、古代史と中世史との分界については意見の一致を見ることが出来ぬ。或る學者は第四・五世紀未開種族がローマ帝國に侵入せし時を以て中世史の出發點とし、他の學者はこれを第九世紀の初期、チャールス大帝の死に置いて居る。斯る意見の相違は畢竟するに時代の區分が人為的なことを示すものである。

第六節 古代史の説明 古代史につきその概略を説明すればこの時代は紀元何年を以て終りとすべきかを決定する助けとなるであらう。古代史は地中海を中心とする諸國の關係を叙述する。こゝに現代生活に何等かの寄與をなせし當時の文明民族が居住し(註)、各地方はすべて相互的關係を有

してゐた。彼等は地中海を中心として植民・貿易・征服を行つた。換言すれば地中海は此の地方とその文明の歴史とに統一を與へたのである。

(註) 印度、支那、日本も亦た古代の文明國であつた。然しこの簡單なる研究に於てはこれを考慮する必要はない。そは此等の諸國は吾人の屬する世界の進歩とは隔絶してゐるからである。

古代史は東方世界と希臘ローマ Greco-Roman 即ち古典世界との二部より成つて居る。東方世界は埃及と西南亞細亞とより成り、こゝに文明は生れ、後更に古典世界は進展して行つた。後者は地中海沿岸全部と東部及び北部の隣接地域とを含んでゐる。斯く東洋の大部分はこゝに述べた地域のうちにある。古典世界はローマ帝國の時代に統一せられたが、此の地方より歴史的興味の中心が北部及び北西部の諸國に轉ずる時、古代史は終を告げ中世史が始まるのである。

第七節 文明の西進 以上の問題を更に詳細に論述すれば、吾人は世界の一般的進歩が古代に於て東方より西方に向ひしを見出すであらう。先づ埃及・バビロニア及び其附近の亞細亞諸國が文明國となり、次に希臘、やがて伊太利・カルタゴ、後に西班牙・南ガリア、北部アフリカの沿岸が文明に浴した。北ガリア及びブリテンは地中海沿岸より遠く、古代文明の影響を受くること少かつた。

第八節 人類の區分——人種 人類を身體的特質即ち皮膚・毛髮・頭蓋骨等によつて人種に區分すれば歴史の研究に便宜である。皮膚により人類は三種に區別せらる。第一は中部及び南部アフリカの黒人種即ちニグロである。彼等は知識最も低く、世界の進歩には殆んど何等貢獻するところが無い。第二は亞細亞の黄色人種即ち蒙古種族である。このうちには古き文明を有する支那人、日本人及び中部亞細亞の遊牧漂泊種族を含む。歐羅巴に居住せる土耳其人、洪牙利人及びフキン人もこれと同一種族に屬する。或る學者はアメリカ・インヂアンも亦これと同一種族と認め、他の學者は全然異つた種族とする。第三に歴史上最も重要な種族は白人種即ちコウカシア種族である。過去七千年のあらゆる進歩は事實上白人種のものである。

第九節 白人種の區分 白人種をコウカシア種族と稱するは、嘗て學者がその最高完全なる身體的特色を有するものをコウカサスの山民に發見し得べしと信じたからである。白人種は更にハム種族、セム種族、印度歐羅巴種族(アリアン種族)に小區分する(註)。ハム種族はノアの子ハムの子孫と稱したるものにて北部アフリカに住し、古代埃及人、リビア人を含み文明の創始者である。セム種族は同じくノアの子セムを始祖とするバビロニア人・アッシリア人・希伯來人・フェニキア人其の他西南亞細亞の民族より成つてゐる。彼等の世界の進歩に對する最大の貢獻は商業・音標文字・宗教である。印度歐羅巴種族は亞細亞族と歐羅巴族との二部に分れ、亞細亞族に屬するものは波斯人及び印度人にして、歐羅巴族には希臘人・伊太利人(ローマ人を含む)・チュートン人・スラブ人・ケルト人が屬する。此の歐羅巴族こそ歴史上最も進歩せる民族にして現在尙ほ然りである。彼等とその植

民地とは世界の大部分を支配して居る。

(註) 一般的に言へばアリアン種族と印度歐羅巴種族とは同一である。嚴密にはアリアン種族とは單に印度人及びイラニア人のみを指す。

第二節 人種區分の缺陷 遮莫、斯る人種の區分は皮相的且つ徹底を缺く。主なる缺點は區分の基礎となる特質は同じきも、他の點に於ては著しく異なることである。更に民族の混淆により現在純一なる種族の存在するものなく、又た歴史時代のどの時期にも曾て存在せざりしこと確實である。而も地理學と歴史との記述には人類を種族に區分する必要がある、上述せる區分はこの目的に極めて便宜である。白人種の間における分類の基礎となるものは、身體上の特質にあらずして言語である。例へば印度歐羅巴種族は常に互に親密なる國語を用ふるも(註一)、ハム族又はセム族の言語とは全然異つてゐる。何人もすべての印度歐羅巴種族が其の容貌に於て、其の骨格、頭蓋骨の形狀に於て(註二)類似し、將た又た一血族一種族のものと思定するものではない。實際彼等は多くの他民族と融合して生ぜしものである。而も彼等の共通せる言語のうちに、血統よりも更に價值ある知識と思想とを集成してゐる。次に印度歐羅巴種族の共通の特徴たるべきものは、現在に至るまで彼等は他のすべての民族よりも知的優越を示してゐることである。類似の言語は血統よりも歴史的關係を證明する。されば言語は人類の區分に必要な基礎である。

(註一) 第六一節

(註二) 頭蓋骨の測定によつて人類を區分することは歴史研究に實際何等の利益を與へない。頭蓋骨の形狀は二三代を経ざるうちに環境により全然變形せらるべき事實に徴しこの種の區分法は失敗に歸した。

第二章 埃及

(前五〇〇—五五)

第一款 土地及び人民——政治史

第二節 地形と其の影響 人類の進歩は主に國土と環境とによる。地中海中心の地方にして天恵を受くることナイル河流域の如きを他に見ぬ、埃及はこの平野の下部、第一瀑布 First Cataract より海に至る地域である。長さ七百哩、ナイルの水路を通じて平均幅員十哩を越えざる世界最小の國家にして、其の面積はメリーランド州に相當する。ナイル川は海に達する約百哩前に數個の運河を作り、やがて三角洲となつてゐる。夏期降雨と雪融けの爲めにナイル河は水量を増して平野に汎濫するも、十二月初旬には水量減じて再び水路を作れば、その土地は豊饒なる土壤を以て蔽はれる。實際埃及は斯くの如くして集積せられたる泥土より成り、驚くべき肥沃の土地であり、殆んど何等の勞力を須ひずして一年三回穀物・牧草・亞麻・野菜を栽培するを得る。小麥は百倍を生産する。山嶽は著しく建築用石材と各種の礦物とに富み、商業も又た容易に行はれ、ナイル河は國內貿易の

自然の通路となつてゐる。且つこの國は三大陸に接し、航運の發達せる二個の海洋を控へ、外國貿易に有利の地位を占めてゐる。溫暖なる氣候は衣服の必要少なく、降雨なき空は人民の作品の腐朽を防ぎ、兩側にある山脈と砂漠とは外國の侵略より人民を保護する。斯る自然の資源と地位とを有する埃及が文明の發祥地となりしは不思議ではない。

第三節 古代文明の遺物・文字 埃及を旅行するものは古代記念碑の夥しき數と又た其の巨大なるに驚く。旅行者は隨所に方尖碑・巨像・宏大なる殿堂の廢墟と更に最も偉觀たる金字塔を見る。本章には此等の記念碑其の他に就いて叙述するであらう。世界の他の如何なる所にも斯くの如き壯大なる古代人の建築を見ることなく、又た斯くの如き驚くべき完全さをもつて保存されてゐるものを見ない。かく記念碑の完全なるは、其の材料によるのみならず、又た空氣の乾燥せるが故である。

此等の記念碑には多く珍奇の文字が誌されてゐる。約百年前まではこれを解讀するものがなかつた、従つて此の國の歴史と生活とは長く神祕の帳に蔽はれてゐた。然るにこれが解讀の鍵はロセッタ石と稱せらるるものの銘文によりて發見された。一七九八年ナポレオンの埃及侵入に際し、其の部下が要塞の基礎工事中偶然この石を發掘したのである。こは黒色の玄武岩にして一面に文字を以て誌されてあつた。これは發掘の場所——三角洲のナイルの支流ロセッタをもつて命名された。これが解讀の名譽は主に佛蘭西の學者シヤムポリオン Champollion に屬す。この文字は埃及の公文書

に希臘語の譯文が副へられてあるものなることが分つた。譯文によりシヤムポリオン其の他の學者は苦心の末埃及文字を解讀することが出來た。多くの碑銘は大部分現在これを讀み得るに至り、埃及人の生活及び史實は詳細に研究されるやうになつた。

最初の文字には物體が繪畫によつて示されてゐる。圓盤 \odot は太陽を意味し弦月 \smile は月を示す。此等の文字は繪畫より記號に移り、太陽の圓盤は日を意味し、斧狀の γ は神を意味するに至つた。時の進むにつれ埃及人は各一音を代表する文字を發明し、これにより容易に英語の如き音標文字を製作し得たのであるが、彼等は餘りに保守的であつた爲めそこまで進歩することが出來なかつた。されば彼等は引續き繪畫と記號とを新しき音標文字と交せて使用した。僧侶は常に此等の初期の難解なる文字を宗教上の目的に使用した、従つてこれを神字 Hieroglyph と稱する。然し一種の略字が文學及び商業の書體に使用されるやうになつた。上述せしロセッタ石の埃及銘文は先づ神字を記し、其の下に普通に使用する略字が記されてある。

第三節 人民・その起源と初期の國家 (約前) 古代埃及人は他の北部阿弗利加の住民と共にハム種族(註三)に屬するが、彼等の國語はセム種族と關係がある。先史時代にセム種族はナイル河の平野に侵入し、土人と混合せしこと明かである。然し埃及の文明は輸入されたのでなく其の國土に發生したのであつた。考古學(註三)によつて吾人は埃及文明の進歩を初期石器時代——即ち人類が石造

の器具を製作したる時代に溯り得ることが出来る。而もその發達は農業の開始、國家の成立に至るまで何等顯著なるものを見ない。人民は各々獨立してナイル河に漁撈し、或は沼澤に狩獵を行つてゐた。然し此の國土の性質として、若し彼等が相當の數に達するとなれば農業によらざるを得ない。此の生活を營むには沼澤の乾拓、田圃の灌漑を行はねばならぬ。斯る大事業は協力を必要とする。此の必要は國家を創立するに至らしめた。全埃及を通じてナイル河の流域には至るところ小國家群生し、各々平野の全幅員を占有し長さ數哩に及んだ。各國家は王によつて支配され、國王が第一の義務となすは運河と堤防とによりて水路を管理し、人民の生活を安定せしむることであつた。此等の事業は人民の協力を強制する必要あり、従つて國王は專制的となり、人民は奴隸と異らざる状態に陥つた。戰爭と征服との結果漸次小國家は併呑され、終に一國のみが残つた。

此等の政治的事件は文化の大發展を伴ひ、埃及人は紀元前五〇〇〇年頃未開の状態より脱したと斷言し得る。此の時期^(前三)の終るに先ち、彼等の文明は其の後殆んど何等の變化を生ぜざる性質を具備してゐた。

(註一) 第九節 (註二) 第四節

第二節 古王國・メンフキスの國王

(前^{三〇〇}—^{三三〇〇})

埃及王の稱號のうち、今日尙ほ普通に知らるるものはファラオ *Pharaoh* である。此は「大家」を意味し、臣下が稱讚して用ゐるものである。古き時代

よりファラオは神と考へられてゐた。此の國土を統一せしファラオはメネス *Menes* (前^{三〇〇}) であつた。彼と其の後繼者とは偉大なる統治者として國家を隆盛ならしめた。

メンフキス *Memphis* はメネスの創設せしところと傳へられてゐる。この地は紀元前^{三〇〇〇}年頃王國の首府となつた。此處に住せしファラオのうちには首府の墓地なるギゼー *Gizeh* の三個の金字塔の建設者が居る。金字塔に就ては次に述べるであらう^(註)。この附近に有名なるスフィンクスがある。堅牢美麗なる岩に彫刻せられし巨大なる人面獅子像である。

(註) 第三節

六世紀の間メンフキスのファラオは埃及の統治に成功した。彼等は國內の改善と外國通商により國富を増した。其の後國王は羸弱となり、國家を統制する能はず、其の結果混亂と争鬭との幕は開かれ、久しく繼續してメンフキスは衰へ首府たる地位を喪つた。

第五節 中王國

(前^{三六〇}—^{七六〇})

次いで新系の國王秩序を恢復し、テーベ *Thebes* を首府とし、中王國を翹めた。此の時代の國王は埃及の南にあるヌビア *Nubia* を征服して金鑛を開發し、シリア^(註二) 並びにエーゲア海地方^(註三) と廣く貿易を行ひ、其の都市は殿堂を以て美化した。されば此の時代の美術と文學とは古典的——此等の完全なる模範を示すもの——と見られてゐる。

(註一) 第四節 (註二) 第八節

第二節 内部の崩潰・ヒクソス(前二七六—二五〇) 國王は再び無力となり、國土は秩序を失ひ農工業は政府の顧みるところとならず將に衰滅に傾した。此の崩潰無力の時に當りヒクソス Hyksos と稱する外來種族埃及に侵入してこれを征服した。彼等は土地を荒掠し、都市を焼き、住民を殺戮した。恐らく彼等はセム種族にして、埃及に來る以前シリアを征服せしものであらう。何れの方面より彼等はシリアに侵入せしやはこれを知悉するを得ぬ(註)。約一世紀の統治後、彼等の権力も衰微し、終にテーベの一貴族の軍隊に敗れ驅逐せられた。

(註) ヒクソスを以て『牧畜王』となすは學者の與せざるところである。

第二節 新王國・埃及帝國(前二五八〇—一九〇) 國土の救濟者は國君となり、有力なる王統を舁め、新王國の時代はこゝにその端緒を開いた。外國人の侵入により埃及は久しく進歩の埒外に立つてゐた。今や彼等は自國の防備を以て満足せず、外國征服の野心を抱くに至り、初期の國王は軍隊を改革し、之を有力なるものとした。ヒクソスは馬をこの國に輸入した。かくて國王は戰車を其の軍隊に加へ、シリア、上部埃及を征服して埃及の南部に及んだ。此等の戰王中最も偉大なるものはトートメス三世 Thothmes である。彼の領土はユーフラテス河よりナイル河の第四瀑布に達した。この時まで埃及は一王國であつた——國王の統治する一國家に過ぎなかつた。然るに今や外國領土の獲得により一躍して帝國となつた。

此の間商人はすべての既知世界と貿易を行ひ、遠隔なる地方の産物を輸入しつゝ、あつた(註一)。産業は活潑となり、ファラオは國內の改善を行ひ、テーベを壯麗なる都市となし、方尖碑・巨像・殿堂を以て飾つた。この時代の如何なる都市もこれと比肩すべきものを見ない。

世を擧げて壯麗なる景園氣に浸りつゝ、而も埃及人は既に久しく發明力を銷磨し盡し、紀元前二〇〇年頃より文明は漸次衰微した。短き復興期の存せしもこの種族は既に生命力を喪ひ、其の偉業は唯歴史に残存するのみとなつた。埃及は有力なる敵を小亞細亞の好戰民族ヒツタイト Hittites に見出した。彼等は埃及より北部シリアを奪取した。ラメセス二世 Ramses は十六年の苦戰を経て彼等の征服を抑止したが、次いで條約によつてシリアを彼等に分讓した。この文書は現存する最古の國際條約文である(前二)。

ラメセスは偉大な建築家であつた。彼は舊殿堂を修復し、新殿堂を建設した。得意の國王は彫刻師に命じ巨大なる彼の肖像を多數制作せしめ、全國民に彼の威容を周知せしめた。城壁・圓柱等に繪畫・文字を銘記する當時の習慣に従ひ、彼は特にヒツタイトとの格闘を記述せしむるを愉快に感じた。ある學者は當時埃及にありしヘブライ人(註)を迫害せしファラオは彼なりと信じてゐる。

(註一) 第三節 (註二) 第五節

第二節 外國の侵入(前一九〇—一五五) ファラオは戰爭中愈々外國傭兵に依頼するに至り、政府の再び無力

となるやリビア傭兵の隊長は王位を篡奪した^(前九四五)。斯くして君臨せし外國君主の下に人民は甚しき壓迫を受け、その國狀は悲慘を極めた。その間にヌビアは離反し埃及の大部分は其の國王に支配を受けた。弊政と内亂とに國力を銷磨せし埃及はテーベに至るまで殆んどアッシリア^(註一)の權力に屈服した。

埃及がアッシリア帝國の一部たりしは僅か數年間^(前六七〇—前六三三)に過ぎなかつた。サメチカス Psammethichusの王位に即くに及び外國の羈絆を脱し、鞏固なる統治を布き國內に平和を與へた。首府サイス Saisは^{デルタ}三角洲の西部にあり、壯麗なる都市となり、テーベは却つて衰微した。新ファラオと其の後繼者とは希臘の傭兵に信賴し、従つて希臘人を欵待した。多くの希臘人は此の國に來りて貿易に従事し、ナイル河口の一角^(註二)に植民地を建設する許可を得た。希臘人のうちには此の國にて珍奇なる物を見、又た埃及人の知識を本國に持ち歸りしものもあつた。サイスのファラオの長き統治により、埃及は榮え外國の尊敬を受けた。最後に至り埃及は波斯王カムビセス Cambysesの征服するところとなり、其の帝國に併合された^(前五五—前四四)。

(註一) 第三節 (註二) 第三節

第二節 政治史撮要 (一)紀元前五千年代(5000—4000)に埃及人は既に未開の状態を脱し、小國家を組織し、農業に従事した。(二)四千年代の終る以前(3000)全土は一個の有力なる政府に統一され、(三)メンフキスの

ファラオは舊王國(3000—2600)の最有力者であり、大金字塔を建設した。此の時代は羸弱と衰頹とのうちに終りを告げ、メンフキスも衰へた。(四)次いでテーベを首府とする中王國(2600—1700)の時代となつた。この時代は征服と商業と國內の改善と大規模の灌漑事業とを以て有名なる埃及史の古典時代である。(五)更に衰微時代(1700—1100)を生み、其の間ヒカソスの征服あり、その統治の百年間埃及人は亞細亞と交通し、馬を輸入し軍國的精神を涵養した。(六)次の新王國(1100—900)時代に至ればファラオはヌビアを征服して第四瀑布に至り、全シリアを收めて一大帝國を建設した。此の時代も亦た商業と土木事業とを以て有名である。(七)次いで衰頹と外國侵略の時代(900—550)とを見たが、其の間約一世紀半サイスのファラオの下に自由と繁榮の時代があつた。(八)波斯の埃及征服(550)後は、この國の長き歴史は他國のうちに没して了つた。

第三節 王朝 埃及の僧侶にして紀元前三世紀に出でしマネト Manethoは、希臘語を以て埃及史を著した。この書は既に湮滅せしも、後世の記者の著述に抄録引用せられ、斯くして傳へられた年代は、屢々これを他の完全なる史料に對照する時、その不明確なるを證するも、尙利用され得べきものである。マネトはファラオの歴史を王朝によつて分ち、メネスより波斯の征服に至るまでを二十六王朝に計算してゐる。以下主なる王朝の表を参考のためここに掲載する。それは屢々埃及に關する著述の年代として現在も尙ほ使用されてゐるからである。

一、古王國(3000—2600)第一—第十五朝

金字塔建設者(2900—2750)第六王朝

二、中王國(2600—1700)第十一—第十二王朝

第二章 埃及

此の時代の最も有名なる統治者は2001-268の第十二王朝

三、崩潰・ヒクソス(268-250)第十三-第十八王朝

四、新王国(250-195)第十八-第二十一王朝

偉大なる征服者統治者(250-150)第十八王朝

五、外國侵略(195-155)第二十二-第二十六王朝

サイスのファラオの復興(155-100)第二十六王朝

第二款 埃及の文明

第三節 階級及び職業・貧民と中産階級 歴史時代を通じて埃及人民の大多數は貧困であつた。

彼等は土小屋に住し一枚の綿製の上衣を纏ふに過ぎぬ。家母は水を運び、穀粉を作り灰に入れてパンを焼き、縫ひ紡ぎ織る時、家父は終日田圃に勞働し、或は商業に従事した。彼は主人に使はれ、僅かの過ち若くは不注意のために鞭たれた。

貧民の見すばらしき小屋は狭き屈曲せる陋巷に櫛比してゐた。商人の家屋は他の場所にあり、稍大きく煉瓦造にて造作も整つてゐた。當時も現代と同じく様々の商賣があつた。製造家は奴隸を使役し自らは主として其の生産品を販賣した。市場の地面に大きな籠を置き食糧品が入れてある、人民は各種の商品、特に自己の製品を持參してこれを穀物・野菜・魚獸肉と交換した。食糧品市場の附

昭和24年11月1日

一七ノニニ頁落丁



イヌーイット人
イヌーイット人
イヌーイット人
イヌーイット人
イヌーイット人

後世の繼承するところとなつた。約言すれば埃及の歴史的地位は彼等が初期文明の創始者たることであり、彼等の切磋せしところを最も有力なる民族に傳へこれを繼承せしめしことである。

(註一) 第貳節 (註二) 第八節

(註三) 有名なる埃及學者アドルフ・ヘルマン博士 Dr. Adolf Erman より抄録 (註四) 第一三節

第三章 チギリス・ユウフラテス平野(約前三五〇〇—五三八)

第三節 セム種族の國土・兩河と其の影響 埃及よりアラビア灣を横斷すればアラビアの砂漠横はる。この地の北西は丘陵重疊せるシリアと境を接してゐる。北東の國境には波斯灣とチギリス・ユウフラテス兩河の平野がある。この平野の南方は砂漠の介在するありてシリアと離隔し、北方に至りて兩地方は互に接近してゐる。アラビアの大砂漠とこれに接近する山嶽地方と平野とは共にセム種族の住する國土を形成してゐる。彼等の歴史は平野に其の端を發する。されば吾人は先づ此の地方を研究せねばならぬ。

チギリス、ユウフラテス兩河はセム種族の國土の北方の山嶽に發し、南東に向ひ波斯灣に入る以前に合流する。チギリスの中流東岸に起伏する平野はアッシリアである。更にユウフラテス河の兩岸を下れば平野は一様に廣濶となる。この地方はバビロニアである。この平野はナイル河の平野と

等しく、春季及び夏季の初期には自ら汎濫する。されば堤防・運河の建設・修理等有力なる政府を必要とする。汎濫せる水は此等の運河を通じて灌漑に供せられ經濟的に用ゐらる。此の點に於て埃及とその組織を異にしてゐる。この國は適宜なる水利事業によりナイル平野の如く生産的になる。而も埃及より天恵を受くること少く、石材に乏しく木材を缺ぐを以て、建築には煉瓦を使用せねばならぬ。更に國境には自然の防備なく、各方面、特にアラビアの砂漠より侵略を蒙る憂があつた。同時に他國と容易に接近し得るため、住民は周圍の民族と常に交渉を生ずるに至つた。斯くの如き類似と相違とにより、バビロニアの歴史と特質とは、瑣末の點は措き大體の輪廓は埃及のそれに似てゐる。特にバビロニアの他國に及ぼせし影響は遙かに埃及を凌駕してゐる。

第三節 文明と遺跡・文字 この國は數百年間顧みられざりしたため其の大部分は全く荒廢に歸して居る。古代の運河は畝狀をなして散在し、所々に土疊の點綴せるを見る。一八四二年に至り考古學者は此等の堆積物の發掘に着手し、古代都市の廢墟なるを發見した。この事業は今尙ほ繼續し年々新發見が行はれてゐる。一八九三年以來ニブール Nippur なる重要都市ヒルプレヒト教授 Prof. Hilprecht によりペンシルヴェニア大學後援の下に發掘され、城壁・宮殿・殿堂は何れも太陽を以て乾燥せし煉瓦にて建築されてゐたが發掘後間もなく崩壞した。これは現状の説明である。圖書館も亦發掘された。バビロニアの圖書は薄き粘土の牌札タブレットより成り、多くの文書は同じ粘土の圓筒シリンダーに書か

れてある。其の文字は三角形の器具を以て抉られ楔形をなし、ラテン語の Cuneus (楔) より楔形文字 Cuneiform と稱せられて居る。前世紀の中葉學者はこの文字を解讀した。その方法は尙ほかのロセッタ石(註)の場合と同様である。以下叙述するバビロニア及びアッシリア人の歴史と生活とは右の記録を主なる資料とするものである。

(註) 第一二節

第三節 人民・その起源と舊制 セム種族の故國はアラビアであつた。こゝに彼等は遊牧人種として家畜の群を率ゐる牧草を追ふてオアシスよりオアシスへと漂泊を續けた。人口増加して綠草乏しき原野の最早や彼等を支持する能はざるに至ると、此等の嚚猛なる未開人は北西及び北東の地方に殺到した。而も沼澤多きバビロニアは多くの人民を收容する能はず、漂泊人種はまた必要なる生活の改善を行ふ能力を缺いてゐた。

此の事業は他の民族スメル人 Sumerians によつて見事に行はれた。吾人は彼等が如何なる種族に屬するやを知らぬ。然し學者は彼等が北東より移住せしものと信じてゐる。恐らく彼等は初めカスピ海の北方を故國とせし如く、こゝに最近極めて古き文明の遺跡が發掘された(註)。そは兎も角、彼等は始めて堤防を築き運河を開鑿し、この國を農業に適應せしめ、また楔形文字を發明し、こゝにバビロニアの最初の文明を創造した。彼等の建設せし多くの都市は南部にあつた。彼等は何時頃

この平野に侵入したか分らぬ、たゞ紀元前四千年代(前4000)に彼等がこの地の都市に住せしことは確實である。當時彼等は約一千年前の埃及人と同じ程度の進歩せる文明に達してゐた(註一)。さればセム種族の新しくアラビアより來りし時、彼等は既にその國の大部分が耕作されて居るのを見た。兩種族は久しく支配者の地位を得んとして争つた。その間にセム種族は進歩せるスメル人の文化を採用し、彼等自身の都市——概してバビロニアの北部に——を建設した。

(註一) この發掘はラファエル・パムペレー氏 Mr. Raphael Pumpelly によつて行はれ、同氏は其の結果を一九〇八年 Explorations in Turkestan, Expedition of 1904 二卷として公刊した。

(註二) 埃及文明がスメル文明よりも一千年早くに始まりし事實は碑銘によつて疑なきものと證明されてゐる。

第三節 都市王國の時代 (約前3500—1917)

長い間この國は埃及の如く都市を中心とする多くの國家に分れてゐた。重なる都市のうちにはスメル人のウル Uruk、セム種族のアカド Accad とバビロン Babylon とがあつた。此等の國家間には最初より果てしなき戦争が行はれた。強國は弱國を征服して大王國を建設した。此等初期の統治者の姓名と功業とは彼等の遺した記録によつて知られてゐる。而も最初に擧ぐべきはアカド(註一)の王サルゴン Sargon(前約2700)である。彼は先づ全バビロニアを統一し、次でその征服を進め國土を遙か東方エラム Elam に、北方チグリスの上流に、西方北部シリアを越

へて地中海に擴張した。恐らく彼は海を越へてキプロス Cyprus に赴いたであらう。こゝに彼の時代より以後のバビロンの影響を發見する。彼の征服はシリアとバビロニアとの關係を一層密接にし、何れも他國より物産と思想とを輸入した。而もシリアの利するところ遙かに大であつた、蓋しシリアはバビロニアより遙かに文明が後れてゐたからである。征服者サルゴンは本國に神々の殿堂を作り自己の宮殿を建てた。全世界の統治者として自己の權力を知りし彼は自ら神を稱するに至つた。彼の帝國は埃及帝國よりも遙に早く知られ歴史上最初のものである(註二)。然し充分なる組織を有せざりしが故に忽ちにして崩壊した。

(註一) この都市は現在アゲート Agade と稱せられ、其の所在國をアカドと呼ばれて居る。從來紀元前三八〇〇年とせしは誤にて二五〇〇年を以て適當とする。サルゴンは或は一、二世紀前に生存して居たのかも知れぬ。

(註二) 第一七節

アカドの地位はやがてウルの占むるところとなり、其の建設せし帝國はアカドよりも更に小國に留まり、僅に一世餘繼續したに過ぎぬ。其の期間は短かりしも技藝を以ては比類なき進歩を遂げた時代であつた。ウルの没落後他の都市は互に覇權を争ひ多少の成功を見た。斯る間にバビロンの擡頭となり、國王ハムラビ Hammurabi(前1755—1750)は全バビロニアを其の權力の下に收めた。

以上叙述せし期間、國內には紛争斷えず、且外敵の侵寇ありしが、而もバビロニア文明の最高潮

に達したことに注意せねばならぬ。其の後政治的進歩はあつたけれども、文化は沈滞して衰微するに至つた。

第三節 バビロン最初の覇業(前約二五七—二五〇)

(前約二五七—二五〇)

吾人は古バビロニア帝國(註)の覇業をハムラビのバビロ

ニア統一(前二五七)の年に劃する。彼の領土は西部エラム、アツシリア及びシリアを含んで居た。ハムラビは特に其の法典(成文法規集)を以て有名である。彼より以前にも成文法は既に存し、一二の法規なきにあらざりしも、彼の法典は現存せる最初のものである。その刻寫せられし石片は一九〇一

—〇二年に發掘された。數百年間この法律はチギリス・ユウフラテス兩河の國土に行はれて居た。約三世紀の後バビロニアは衰微し國外の領土を失ひ、アツシリア先づ獨立して覇權を争ふに至り、紀元前三五〇年頃アツシリア王はバビロンを征服した。バビロンは一時自由を恢復せしも、次の六世紀間常に其の北部國境にある優越なる國家のために壓迫された。

(註)

最近まで歴史家は古バビロニア帝國を『カルデア Chaldaea 帝國』と稱する習慣があつた。然し新セム種族なるカルデア人は紀元前二〇〇〇年頃までバビロニアに侵入せざりしは一般周知のことである。

〔譯者註〕 ハムラビ法典の研究、遊佐慶夫、『早稻田法學』第一卷)

第三節 アツシリアの覇權(前約二五〇—二〇六)

(前約二五〇—二〇六)

アツシリア人はセム種族であつた。當時彼等の文明はバビ

ロニア人よりも後れて居たが、バビロニアの習慣・發明・宗教を採用した。アツシリア國民は自由農民より成り、斯る國民の常として戰爭に強かつた。アツシリアはバビロンの好敵手として既に帝國を建設し後には勢力を失つた。紀元前三五〇年後アツシリアは引續き覇權を争ひ盛衰起伏種々なる運命に遭遇した。紀元前八世紀乃至七世紀に至りて大いに成功し、當時その帝國は世界未曾有の最大なる土地を有し、其の領域は波斯灣より黒海に至り、ナイル河畔のメムフキスより殆んどカスピ海に達してゐた。

これまでの帝國はすべて土人の國王を載く若干の朝貢國より成つてゐた。此等の君主は機會さへあれば何時でも叛亂を起すものであつた。斯くの如き弛緩せし組織は永續する筈がない。大規模の戰爭・征服・統治を行ひし最初の國家はアツシリアであつた。彼等の偉大なる功績はその征服せし國家を州(太守領 Satrapy)に分ち、各州はアツシリア王の任命する太守(知事)によつて統治された。太守の任務は其の地方の軍隊を指揮し、裁判を行ひ、歳貢の徴收を監督するにあつた。太守の下に土人の國王ありしも、彼等は初期帝國の國王よりも遙かに權力と獨立性とに乏しかつた。服屬せる多數の人民は帝國の一部より他に轉住せしむる政策をとり、その目的は郷土的愛國心を根絶し、人民をして一層帝國政府に依頼せしむるにあつた。農民階級の絶滅するに及びアツシリア王は傭兵を以て軍隊を組織し、掠奪と重税によつて維持した。王の統治は全く利己的・壓制的であつた爲め、外國の侵入より臣民を保護する能はざるに至つた。

アッシリア帝國は突如終焉を告げた。バビロニア人は叛亂を起しアッシリアの東部にありし有力なる民族メデア人 Medes と協力し、帝國の首府にして人口稠密富裕なるニネヴェ Nineveh を包圍し、二年後これを陥れて奪掠を行ひ、華麗なる殿堂と宮殿とは廢墟となり、同時にアッシリア帝國も倒壊した(紀元前六〇六年)。

アッシリア史の人物・事件

- 一二五 チグラート・ピルセル一世 Tiglath-Pileser 最初の有名なるアッシリアの征服者。
- 八〇七・七三三、アッシリアの最初の隆盛時代。
- 七四五・七二七、チグラート・ピルセル二世、偉大なる征服者にして又組織者。
- 七三二・七〇五、サルゴン、偉大なる組織者にして政治家、アッシリアの最盛時。
- 七〇五・六八〇、センナヘリブ Sennacherib エジプト及びイスラエルと戦ひ、バビロンを破壊す。
- 六〇一・五六八、エツサルハドドン Esarhaddon バビロンを再建し埃及を征服す。
- 五六八・五三九、アツスールバニパル Assurbanipal 最後の有名なる國王。
- エジプト及びメデアの獨立。
- スキチア人帝國に侵入す。
- 六〇六 ニネヴェの陥落。

第三節 バビロン二次の覇業(前六〇六)

紀元前二千年頃新セム種族の一群——カルデア人——は

アラビアより南部バビロニアに侵入し、この國土を征服しつゝ、アッシリアの羈絆を脱せんと努力した。ニネヴェの占領とバビロニア第二次の覇業とは、主としてこれ等民族の手によつて行はれた。カルデアの國名は彼等の名を取りしものである。王位に登りし國王のうち、最も有名なるはネブカドネザール Nebuchadnezzar であつた。四十四年に渉る有力なる治世の間に彼はその領土を地中海まで擴張した。彼は其の國力の大部を擧げて内政の改善と、北部國境にあるメデア帝國に對する防備とに費した。彼はこの方面の國境に高さ約百呎に達する煉瓦の城壁を造り、都市には鞏固なる防禦を繞した。バビロンは周圍四十哩、正方形をなし、巨壁の内部は道路を劃すること近世の最も發達せる都市の如く、長方形の一廓には三層乃至四層の家屋が櫛比してゐた。此處彼處には壯麗なる宮殿、殿堂が聳えて居た。王の大建築の一に『釣園』hanging garden がある。それは段階を設けて高く屹立し、機械の力によつて河水を汲み上げた。この人工の山はメデア出身にして山嶽地方に生長せし王妃を慰めんが爲めに造營せしものである。バビロンは彼の治世中はもとより、其の後も長く世界最大の富裕にして魅力ある都市であつた。然るに彼の後繼者は無力にして彼の死後數年ならずしてバビロンは波斯人の手に落ちた。

(註) 第六二節

第三節 政治史撮要

(一)初期には多數の小都市國家が際限もなく争つてゐた(前五〇〇—一九七)。(二)その

うちアカツドはサルゴンの治下に短命なる帝國を建設した(三〇〇)。(三)最後にハムラビ(二九七)出てバビロンを中心にしてを統一した。彼は又其の法典を以て有名である。彼の建設したる帝國は西方エラム、アッシリア、シリアを掩有してゐた。(四)やがてバビロンは國外の領土を失つたけれども、アッシリアの征服(二五〇)を受けるまでは尙ほ其の覇權を失はなかつた。アッシリア帝國は第八―七世紀に隆盛の極に達し、其の領土の廣大なると組織の完備せると相俟つて遙に在來の國家に勝つてゐた。(五)六〇六年其の首府ニネヴェは戰勝のメデア人バビロニア人に占領され、其の帝國は分割された。新バビロニア帝國は短命なりしも、特にネアカドネザールの統治の下に榮えた。(六)が、彼の死後間もなく波斯人のために征服された(五三八)。

第三節 文明・社會階級 法律は三大階級——富者・貧民(自由勞働者)・奴隸を認めて居る。富者とは僅少の地主、國王の官吏、商人・銀行家・祭司より成り、而も多くの商人及び銀行家は祭司階級のうちに含まれてゐた。自由勞働者のうちには都市在住の工匠もあつたが、大多數は小作人であつた。彼等は生産の一部を地主に拂ひ、法律上自由であつたけれども事實に於て其の自由を享くること極めて稀であつた。奴隸は一大階級を成し大部分は各種の産業に使役された。土地所有者の主たる者は『宮廷』(國王)及び『神』の二種である。宮廷の収入は國王・官吏・軍隊を支持し、神の収入は祭司を扶持せしこと埃及の場合と異ならない。

第四節 産業・商業 主なる生業は農業であつた。農家は主に獸肉・羊毛・穀物・椰子實・椰子油を産す。ある地方よりは石油・揮發油・食鹽を出し、波斯灣には眞珠の採取が行はれてゐた。熟練工業にては煉瓦製造業が主要なる地位を占め、人民は精巧なる刺繡・絨氈を以て壁・椅子・寢床・床を飾つた。金銀器・硝子器・銅器・精巧なる家具・華やかなるリンネル織・モスリン・毛織物・果實動物を彫刻せる杖・香油其の他の必需品、奢侈品も亦有名である。彼等の木彫・象牙彫は外國人の甚だ珍重せしところであつた。これと聲價を等うしたるものは寶石の彫刻である。バビロン、ニネヴェの如き都市には豪奢なる生活行はれ、各種の産業がこれに伴つて起つた。

此等の産業はまた廣大なる通商を必要とする。彼等は香料・ゴムをアラビアより、寶石・赤色染料・獵犬を印度及び其の附近より、金屬は主として亞細亞の内地より、絹は極東より、紫色染料・香柏は西部シリアより、象牙・駝鳥の羽毛・豹の皮は阿弗利加より輸入した。通商路はバビロンを中心に四通八達、水陸兩路によりて遠隔なる土地に達した。此等の通路によりて船舶・隊商は往來織るが如く、以て世界の貨物を交換した。バビロンは數世紀間世界商業の中心であつた。

第四節 法治 ハムラビの法律は賣買・契約・損害賠償・不法行爲の處罰、婦人小兒の權利・奴隸の待遇・相續・養子——約言すれば人生のあらゆる事項を規定し、なほ人間と動物との勞賃すらこれを定めてゐる。效力發生の必要條件として契約は證人の前に於てこれを記録し封緘せねばならぬ。この法典には多くの苛酷なる刑罰を制定せるに拘はらず、尙ほ高き正義の觀念を示してゐる。身體の損傷に對しては報復主義——『目を以て目を償ひ、齒を以て齒を償ふ』——が行はれた。この法典其

の他の資料より婦人の状態を研究することが出来る。一夫多妻制は他の東洋國民同様認められて居るが實際は富豪に限られた。家庭にある妻妾のうち一人は主婦となり他はこれに従屬する。婦人も事業の經營・相續・財産の遺贈をなすことが出来た。實際に彼等の生活状態は埃及の場合と等しく幾多の便宜を與へられてゐたと思はれる。此等の法律に描寫された文明は極めて高度の發達をなせるものであつた。それは極めて古く——現代の文明より遙に舊きものであつた。然しその盛時は既に過去に屬し漸次衰微に向ひつゝあつた。

第四節 宗教・文學 バビロニアの宗教は埃及と同じ起源に發す(註)。實際すべて異教は自然崇拜に端を發する。チギリス・ユウフラテス平野の住民は埃及人と比して日月星辰を神として崇拜する傾向が顯著であつた。天と地と海とは何れも大神であつた。知識の進むにつれ事象そのものよりも、其の靈を神と考ふるに至つた。すべての地方と、人類社會とには神が存在してゐた。其うち主なるものは都市王國の神々にして、就中最も偉大なる神はニネヴェ、バビロンの如き帝國都市の神々であつた。宗教は主として現世の生活と關聯し、バビロニア人は未來の世界に關して殆んど注意を拂ふことをせず、死の觀念は陰慘なるものであつた。彼等の宗教は一面道德的特徴を有し、他面これと反對のものもあつた。祭司の記録せる文學は多く宗教的のものにして、禮拜の儀式、惡靈退散の魔法、神々の憤怒を慰めその恩寵を求むる祈禱等を詳述してゐる。祭司は占トにより神意を察

知する方法を發明し、就中最善の方法と認めしは犠牲動物の肝臓を検することであつた。此の種の占トは終に複雑なる體系となつた。未來を豫言する方法は天體、特に太陽と太陰と他の五遊星とを觀測することにて、星占術は斯くして發明せられた。祭司の諭誡はすべて記録に保存された。

(註) 第二節

宗教的經典は多くセム語及びスメール語にて記述され、文典及び辭書は『死語』の研究に必要であつた。科學的著述は數學・天文學・地理學・動物學・植物學・礦物學を含み、その歴史は史官の誇張阿諛になる國王の功業録である。讚美歌と宗教的神話とは更に注意を惹く。彼等は長篇の叙事詩を著し實在若くは神祕的英雄の行業を謳つてゐる。この詩歌の中に大洪水の物語と、たゞ一家族のみ大船を造りその難を遁れし物語とがある。また神々の一人が世界を創造せし宗教的叙事詩もある。此等の物語は聖書の物語と甚しく酷似してゐる。

第五節 天文學・曆 科學に就ては既に産業及び文學との項に關聯して可なり記述した。最も進歩せしものは天文學であつた。往古より祭司は神殿の高塔に登り蒼穹を觀測して日月星辰の運行を記録した。彼等は間もなく蝕を豫言するを得、精密に太陽年の期間を決定し、一年を三十日より成る十二個月に分けた。然しこの計算は約五日を短縮することになる。由つて必要に應じて一日を加へし月をその間に挿入してこれを正しくした。彼等は大體一個月を各七日より成る四週に分ち、週

日には太陽、月及び五遊星の名を命じた。一日は十二時より成り、其の長さは現在の二倍に相當する。彼等はその發明した水時計・日時計を以て時間を計算した。

十進法は既に知られて居たけれども、計數には主に六十進法を使用した(10×6或は12×5=60)。標準量目はタレント talent である。これを六十ミナ Mina に分ち、一ミナは約一磅三分の一に當り、六十シエケル Shekel に相當す。長さはもと指・手・足・腕を基本として計算した。

第四節 建築・彫刻 藝術に就ても既に上記の産業の場合に述べた。唯建築と彫刻とが残つてゐる。上述せし如く彼等の大事業——殿堂・宮殿・防壁——は必然的に煉瓦造であつた。國王は殿堂或は宮殿の基礎として四十呎以上の巨大なる長方形の丘陵を築いた。其の目的は濕氣を避け建築に威容を與ふるにあつたと思はれる。宮殿或は殿堂は數英町に互るこの基礎工事の上に長方形に聳え、平面の屋根は杉の梁にて支へられ、他の部分には三角塔が高く屹立して居る、塔は堅固に造られ何れの方面よりも階段にて昇降し得る。頂上は神の居所であつた。アツシリア王の宮殿は壯麗偉大、そのニネヴェにあるものは廣さ二百五十英町に達し約二百の室を有してゐた(註)。此等の大造營物はいかにして建築せられしか、その原理は現在では分らない。最古のものには圓形のアーチを用ゐてゐるが、それは他國民のこれを利用せしよりも餘程以前のことである。

(註)國王サルゴン(セニセ五)の宮殿を言ふ。この君主は初期アカツドの國王たりしサルゴンとは別人である。

バビロニア建築の内部は化粧煉瓦を以つて壁を蔽ひ、アツシリアの宮殿は石の浮彫を以て壁を飾り、入口は同じ石材の巨大なる人頭獸が守護して居る。概して都市王國時代の彫刻は自然に近いものであつたが、後代に至つて硬化し傳統に囚はるに至つた。彼等は肉體を卑賤なるものと考へ、人體の研究を疎んじ、而も好んで華美なる服裝の人物・軍隊・戰爭を描寫した。其の國は多量の石材を産し、アツシリア人はバビロニア人よりもこれを裝飾に使用する習慣があつた。然し彼等は獨創性を缺き只管バビロニア人に模倣し、其の建築は全く煉瓦を以てし、殿堂・宮殿の地位としては自然の丘陵よりも人工的の高地を選んだ。

第五節 歐洲文化に對する貢獻バビロニア人は埃及人と異り、商業を通じて其の科學・藝術・信仰を古代世界に弘めた。第三千年代(前3000)の初期シリアは其の影響を受け、殆どすべて彼等の思想と藝術とを探り、其のうちには楔形文字もあつた。バビロニア語は只に全シリアのみならず、埃及の宮廷に至るまでの外交用語となつた(註)。バビロニアの文化はシリアを経て小亞細亞及び歐羅巴に傳へられ、エトラスカ人(註)はアーチの使用法・禽獸の肝臟を以て占卜する方法を習得し、其の知識を羅馬人に傳へた。希臘人は彼等の計量・曆及び天文學の知識・體系を學び、希伯來人は日を重ねて週をなせしのみならず、宗教的要素をバビロニアより受けこれを現代に傳へた。圓周を三百六十度に分ち、天體を十二宮に分つことも彼等の發明であつた。吾人は時計を眺めてはバビロニア人

を回想する。盤面を十二時に分つことも亦彼等の發明であつた。歐羅巴人はすべて文明の要素を東洋人より受け、其の大部分は實にバビロンより傳はりしものである。

(註一) 紀元前十四世紀にこの事實ありしことは、最近埃及のテル・ヘル・アマルナ Tell el Amarna に於て發見せられし夥しき外交文書の證明するところである。(註二) 第三節

第四章 シリア―フェニキア人及び希伯來人

第四節 國土 シリアは既に述べし如くアラビアの砂漠(註)の北西に横はる丘陵・山嶽に富む國土である。この地は地中海の東岸約四百哩に亘り平均の幅員百哩を越えず、従つて全體の面積は殆んどケンタッキー Kentucky 州に相當する。北方にあるレバノン Lebanon 山脈は海岸より一哩乃至五哩の距離を保ちシリアの大半に延びてゐる。この山脈の西部傾斜面にフェニキアがあり、米國の一郡に相當する地域を占む。更に南部に至ればこの山脈は共通の名稱を有せず、海岸より次第に離れて直ちに南方の砂漠に入る。ヨルダン Jordan 河は山脈の東部盆地を南に向ひ流れてゐる。其の下流は地中海の水平面下を潜りて死海に入る。死海には出口がない。ヨルダン河の東には高原が砂漠に向つて展開してゐる。こゝに述べた海岸地方・山嶽・ヨルダンの平野・高原より成る國土はカナン Canaan 即ちパレスチナ Palestine である。

(註) 第三節

第五節 國土の民族に及ぼせし影響 シリアの歴史を研究するに當り、他國の場合と等しく國土と其の環境の人民の特質に及ぼす影響に留意するを要す。山嶽・丘陵地方の生活は平原の生活よりも困難である。従つてその昔人民に有用なる知識・技術の進歩は極めて緩漫にして、最善の生活を營む爲めに、かのナイル及び下部ユーフラテスに見るが如き大規模なる協同事業を必要としない。人民は小社會の一員として個人的勞働により最善の結果を得る。さればシリアは小國家の存在すべき國土であつた。更にシリアの人民は兩面に有力なる王國と境を接し、其の獨立を維持するために苦心した。彼等は屢々此等の有力者に屈服せねばならなかつた、然し彼等の精神は常に不羈にして奔放、且つ自由であつた。斯る特殊の事情を以て彼等生來の敏慧を説明し得ると思ふ。更に彼等は國家間の仲介者として或るものは早く商業に従事し、又は窮迫せる國土より遁れて海岸に住し海上生活を送るに至つた。

第一款 フェニキア人

第六節 都市と其の産業 最初に知られし住民はアラビアより來りしセム種族であつた。レバノン山脈の西海岸に住せる人民は、自からシドン人と稱しその最古の都市をシドン Sidon と名づけた。

希臘人は彼等をフェニキア人 Phoenicians 『紫の人』と呼んだ。そは彼等が地中海にて捕獲せし各種の貝より紫色の染料を作製せし故である。其の後建設された都市のうち最も有名なるはチル Tyre であつた。兩市は何れも海岸附近の不毛なる岩島に其の地位を占めてゐた。

フェニキア人の都市はすべていかに小なりとも自主國家であつた。彼等は國防のためには協力を吝まず、其の場合には獨立して各々其の目的に猛進した。フェニキア人は天恵を受くること少く、山中の香柏を伐つて家屋を建て、船舶を造りまた埃及・バビロンに輸出を試みた。山地の傾斜面・海岸の平野は稀に牧草を生じ、穀物は更に收穫がなかつた。されば彼等は海上に生活を求め、その漁業によりて得たる染料は、文明世界の國王貴族の争つて求めしところである。紀元前第三千年代(3000)の初期、フェニキア人は既に他のシリア人よりも早くバビロニアの精巧なる産物を輸入し、これを模造しつゝ、あつた。彼等の文化は全くバビロニア風となり、埃及の影響を受くること少く、長く楔形文字を使用してゐた。初期のフェニキア工業のうちには、銅製の武器・武器・戦車・金銀器・象牙・黒檀若くは金銀を象眼せし卓子・椅子・寶石・金銀にて裝飾せし神像、硝子器・極彩色の陶器等があつた。

第四節 商業・植民 キプロス Cyprus は其の豊富なる銅山を以てフェニキア人を誘ひ、彼等はここに植民地を建設し、更に西方に向ひ、紀元前一五〇〇年頃クリート Crete (註一)に達し、エー

ゲア海のロード Rhodes にも植民し、各所の鑛山を開發して土人と交易をした。これは希臘植民の開始する以前であつた。

フェニキア人は希臘人がエーゲア海の島嶼・海岸に植民地を擴張するに及び(註二)、此の方面から驅逐され已むなく西方に航し、阿弗利加沿岸・シシリー・サルヂニア・西班牙に植民した。彼等は西班牙の銅・錫・金・銀等の豊富なる鑛産に垂涎した。彼等の植民地は單に交易の場所たるに過ぎざりしも、四圍の境遇によりては發達して都市となつた。フェニキアの地中海植民地のうちカルタゴ Carthage は天恵を受けしものは他にない。この植民地は紀元前八〇〇年頃シシリー島の對岸阿弗利加沿岸に建設され、廣大なる港灣を控へ、豊饒なる背地を負ひ、更に西班牙とフェニキアとの中間に位置し、容易にシシリー・伊太利に達することが出來た。此等の有利なる事情によりカルタゴは他日地中海の最大商業都市たるに至つた。

(註一) この時より亞細亞の影響をクリート文明に認めることが出来る。この島と埃及との商業は約二千年以上第四千年代の初期より引續き行はれて居た。(註二) 第三節以下、第六節

第五節 通商路 フェニキア人は東洋に於てバビロンの通商路と連絡を取り、全地中海を往來して大西洋の沿岸に及んだ。然し彼等は内地には深く入ることはなかつた様に思はれる。バルト海沿岸の琥珀・ブリテンの錫は二個の陸上交通路により商人の齎したものである。其の一は北獨逸より

南方アルプスを越へてアドリア海の灣頭に達するもの、他はガリアを横断してローン河の入口にて海に達するものである。此等の陸路は何時頃より使用されしやは何人も斷言し得ない。

第三節 藝術と文字の傳播者 フェニキア人は至るところに東洋の産物を運び、各國民は喜んで此等の品物を購ひ、間もなくこれに模倣して類似の事業に着手するに至つた。同様に彼等はまたパピロニアの記數法・計量法・其の他の有益なる多くの知識を西方民族に傳へた。約言すればフェニキア人は文明の宣教師であつた。

彼等の歐羅巴に對する最も貴重なる貢獻は音標文字アルファベットであつた。彼等は既に早くも紀元前九〇〇年頃これを所有してゐた。それは明かに從來の文字を單純化して制作したものであるが、どの程度に彼等の發明力が加はりしか、將た何處よりその要素を得たりしかは分らぬ(註)。それは二十二の子音を表はす文字より成つて居た。フェニキア人は母音を極めて軽く發音し、従つて文字を以つて母音を表はす必要を感じなかつた。この文字を習得し或は發明せしため自然楔形文字を捨てた。希臘人はフェニキア人より新しき文字を得てこれを自國語に適應し、ローマ人は希臘人よりまたこれを習得して更に變化を加へ、これを現代に傳へた。斯く文字の單純化したる結果、教育はナイル、ユウフラテス地方よりも一層容易となり、知識の増進——特に各國の中流及び貧民階級の——と文明の進歩とに非常なる寄與をなした。

(註) 最近學者のうちにはフェニキア人が此等の一部をクリート文字より受けたるにあらすやとの説をなすものがある。

第二款 希伯來人

第五節 初期の漂泊時代 希伯來人の國土パレスチナについては既にこれを述べた。フェニキア人と等しく彼等はセム種族であつた。希伯來の記者等はその遠祖アブラハム Abraham が故郷ウル(註一)を去り、エホバ Jehovah が彼と其の子孫に約束せし土地カナーンに向ひ漂泊せしことを述べて居る。彼は家族・奴隸・家畜と共にこの國を轉々として餘生を送つた。彼に従ひし人民は彼を族長に推し所謂小國家を形成した。此の種の子弟・僕婢の間に行はるる單純なる政體を族父政治と稱し、漂泊民族は通常斯くの如くして統治されてゐる。アブラハムの富と權威とは其の子イサク Isaac を經て其の孫ヤコブ Jacob 即ちイスラエル Israel に傳へられ、彼等も亦族父であつた。飢饉に苦しめられたイスラエルは埃及に難を避けた。これは恐らくヒクソス侵入の時代であつたらう。イスラエル人はこゝに四百年間を奴隸として送りし後、最後に至りエホバの恩寵を蒙りし英雄モーゼ Moses は其の民族のために自由を得て、これをシナイ Sinai の荒野に導き、その山頂に於てエホバより所謂法

豪華なる生活を營んで居た。彼は多くの戦争と重課税とを以て人民を苦しめた。彼等は彼の愛兒アブサロム Absalom が父王に叛亂するやこれに味方した。而も子は敗れ父は引續き君臨した。死後彼の壓制・我意・狂暴は間もなく忘れられ、唯イスラエルとエホバとに對する彼の奉仕のみを記憶せる民族は、今日に至るまで彼等の理想的國王・國民的英雄として彼を回顧してゐる。

(註) サウル、ダビデ、ソロモンの治世の時代は唯大體しか分つて居ない。或ものはこの時期を更に二十五年乃至四十年前なりしとしてゐる。

第五節

ソロモン

(約前 九五五—九一五)

・衰微

ダビデの死後その子ソロモン Solomon 王位を嗣ぎ、只管平和に憧れ、エルサレムに宏大なるエホバの殿堂を建立した。彼は堅固なる城壁を廻らして都市の防備となし、壯麗なる宮殿を營み、東洋專制君主の奢侈と贅澤とを周圍に蒐めた。地中海と紅海とを往復する船舶は遠隔の地より産物を運び、その同盟國のうちにはチルと埃及の國王があつた。彼は實際的の人生問題に就て、又政治と外交とに英俊なる才幹を示した。今日に至るまで理由の有無は別として世人は彼を歴史上有数の賢者と稱へて居る。

此等の榮華はすべて人民の負擔するところであつた。彼は重税を課し大建築のために無償の勞働を強ひた。無慮三萬の民衆は常に石を切り木を削るに忙しかつた。自然人民はかゝる壓制に憤懣を感じ、従つて彼の後嗣が其の政策を繼續せんとするや、ユダ族のみはベンジャミン Benjamin 族の一部と共に忠誠を抽んぜしも、他の部族は離反した。今後吾人は二個の弱小國家ユデア Judea (ユダ) とイスラエルとを論述することとなる。兩國共に内紛に苦しみつゝ、斷えず戦を交へて居た。

第七節

擒囚・歸國

(前二三三—二三六)

紀元前第八世紀アッシリア王は其の國境を西方に擴張しユデア、イスラエルの兩國を朝貢國とした。イスラエルの反亂を起すに及び、國王は其の首府サマリア Samaria

を破毀し、住民をユウフラテスの彼方に遷し(註一)、間もなく彼等は其の地方の土人のうちに姿を没した。彼等の土地はチギリス、ユウフラテス地方より來りし移住民に分與せられ帝國の一州となつた(註二)。アッシリアの没落、バビロニアの勃興はユデアに取つて單に統治者の交代に過ぎぬ。彼等の叛亂を罰するためネブカドネザール(註三)は、エルサレムを圍みこれを占領した。彼は先例に倣ひ多くの住民を追放に處し、聖都を毀ち、殘餘の住民は極貧のものを除き擒囚として伴ひ去つた。

希伯來人は(前五八六—五三九)五十年間擒囚としてバビロニア帝國の各地に滞留した。波斯王キルス Cyrus (註四)は彼等の援助を得てバビロンを征服し、其の功により彼等は本國に送還され其の殿堂を再建する許可を得た(註四)。エルサレムは廢墟の上に建設せられた。然しユデアは依然波斯帝國の一屬州であつた。

(註一) 第三節參照

(註二) 第三節

(註三) 第三節

第四章 シリアアロフエニキア人及び希伯來人

(註四) 殿堂はダリウスの特別なる寄進により建築された。

第五節 宗教と文學 擒囚前の希伯來人はセム族に特有の種々なる神々を禮拜してゐた。彼等の宗教的習慣と思想とは砂漠地方より來りしものと、カナーン人及びバビロニア人より習得せしものとであつた。而も彼等の間に輩出せし指導者と豫言者とは、最初より唯エホバの外には何ものをも禮拜せず、國民を全く異教崇拜より根絶せんと努めた。ダビデによつてエホバの神殿が、その祭司と共にエルサレムに建設せられしことは、此の方面に重要な一步を進めたものであつた。ソロモンの時代にも多數の人民は尙ほ偶像崇拜者であつた。老獪なる國王は臣下のカナーン人の援助を得るため彼等の神々を保護した。而もエホバの祭司と豫言者とは引續き神の誠を主張した。爾等他の神を拜すべからず。そは嫉妬と稱する神は嫉妬の神なればなり。其の禮拜を純粹無垢ならしむる爲め彼等は更に他の誠をも力説した。『爾等決して彫像を作るべからず、天の高きと地の低きと、地中の水とにこれに似たるものを作るべからず、彼等に爾等の頭を垂れ、彼等に仕ふべからず。』漸次人民はエホバが全世界の主神にして、所謂神なるものは眞實のものにあらざるとを知るに至つた。この信仰は長きアツシリアの壓迫と、特にカルデアに於ける擒囚とによつて養はれた。復活せしエルサレムはエホバの外に神なく、エホバは禮拜する者に道德的儀式的神聖を求めた。約千九百年前同一の信仰を奉ずる新宗教即ち基督教は舊宗教より發生した。猶太教は戒律に嚴格なる服従を説き、

基督教は寛容と愛とに重きを置いた。

希伯來人は科學の方面には貢獻しなかつた。彼等の宗教は藝術を疏んじ文學を養つた。最も著聞するものは『舊約書』である。傳説・歴史・箴言・詩・豫言等より成る國民的文學であり、エホバを讚美し其の人類に對する遠大なる計畫を示すために書かれたものである。希伯來の記者により希臘語にて書かれた『新約書』は、基督と使徒の物語とその教訓とを述べたものである。聖書は舊新約書より成り、最も廣く讀まれたものである。紀元三七年に生れたヨセフス Josephus は世界創造以後の希伯來民族の歴史『猶太古代史』と、ローマ人のエルサレム破却を詳細に叙述せし記録『猶太戦争史』を著した。最後に猶太人のラビ(教師)たちは『タルムード』を編纂した、これは希伯來の法律・傳説に註釋と説明とを加へたものである。

第五節 生活・特質・世界的影響 バビロニア擒囚以前の希伯來人は主として耕耘により生活した。然るに東洋貿易の中心たりしバビロンに久しく滯留せし結果、彼等は商業國民たるに至つた。爾來彼等は廣く世界を遍歴し、外國に移住して商業に従事した。彼等は至るところに會堂を建設し、これを中心として基督教は先づ宣傳せられた。

希伯來人の間には血統による結合は宗教のそれと共に鞏固であつた。家庭的結束は眞に濃密なるものがあつた。『爾の父と母とを敬へ』とは彼等の誠の一である。一夫多妻は認許せられしも、多數

の人民はこれを奉ずることをしなかつた。婦人は非常に尊敬され、自由に公の場所に入出入した。高き道德、純潔なる家族生活、希伯來國民は幸福なる家庭を以て満たされて居たやうである。而もこの小國民の世界歴史に與へし影響はこれを過稱することが寧ろ困難である。猶太教より出でし基督教は歐羅巴人とその全世界に互る植民地の宗教となり、宣教師はこれを他の民族に傳へつゝある。いかなる賢人も十誡以上の完全なる道德律を發見することは出来まい。約言すれば西洋文明の要素として最も重要な宗教と道德律とは、主として希伯來人の寄與せしものである。

第五章 メヂア・波斯帝國

第一款 印度歐羅巴種族・イラン族・メヂア帝國

第六節 國土 時代の遷移につれ新民族は漸次文明の領域に進入し、歴史の範圍も亦次第に擴大した。紀元前五千年代の歴史は唯ナイルの流域に限られてゐた。第四千年代に至りてセム族の國家これに加はり、同時にクリート、エーゲア海地方もこれに參與した。爾來歐羅巴も亦東洋と共に歴史の領域に入つた。この事實はその後の東洋諸帝國を研究するに記憶しておく必要がある。

歴史の範圍に入り來る次の亞細亞國家はイラン Iran 高原である。チグリス・ユウフラテス平野の東、カスピ海と波斯灣との中間に位してゐる。其の中央部は北米のグレート・プレーン Great Basin

に似た大鹽原である。水量の缺乏せるため其の國土の大部分は不毛である。メヂアは北西部に位し、南方波斯灣に境して波斯がある。波斯の事情に通ぜる古代記者は次の如く記して居る、『この地は氣候溫和にして草木繁り、牧場は綠草に滿ち、葡萄其の他橄欖を除く果物を夥しく産す。鬱蒼たる公園あり、清澄なる河川湖沼には水禽多く、また國土を灌漑す。馬其の他運搬用の動物の飼育盛んにして、森林には野獸群居せり。』

第三節 印度歐羅巴種族 イランの住民イラン族 Iranians は白人種の第三部族たる印度歐羅巴

種族に屬す。印度歐羅巴種族なる語の『印度』は即ち國土印度を意味し、この名稱は極西の民族（歐羅巴人）と、極東の民族（印度人）とを表示するが爲めに用ゐられた言葉である。印度歐羅巴種族とは其の祖先の如何を問はず、印度歐羅巴語を語る白人種である。此の種族の言語はすべて共通の母語より發したものである（註）。此の母語は嘗て一地方に最も密接なる部族的集團生活をなせし民族に屬して居たに相違ない。此の國語と其の民族初代の居住地とが果して歐羅巴なりしや、將た亞細亞なりしや、或は双方に分在せしやにつき學者の意見は一致して居らない。然し紀元前三千年代のはじめ、各部族は既に分離して轉々し、各自の方言は別の國語となつてゐたことは明かである。彼等はその故國に於てすら恐らくすべて同一血屬のものにあらずして各種の種族の混和せしものであつたであらう。各部族は夫々移住しつゝ、ある間に接觸せし民族の習慣を常に攝取し、歴史時代の故

國に達するに及び其の地の土人を同化し、引續き其の起源の如何を問はず外來人を歓迎した。斯くして印度歐羅巴種族に屬する民族は其の歴史上に現はれし時には想像以上に混和融合せるものであつた。さればある民族の國語は外來の要素により、更に又文化の進歩に伴ふ自然の發達により變化した。而も斯る變化のありしに拘はらず、本質に於て印度歐羅巴語の特色を失つて居ない。

(註) 例へば英語の *father* は印度の古典語サンスクリット語では *pitar* 古代波斯語では *patar* 希臘語では *patēr* 拉丁語では *pater* 獨乙語では *Vater* であり其他の類似語に於ても然り。此等の *father* と同意語は同一の母語より發したものである。斯くの如く甚だ密接なる言語的關係にある諸國民をアリアン即ち印度歐羅巴語族といふ。

第三節 イラン族・メチア帝國 (前六〇六—一五五〇)

紀元前二千年頃印度歐羅巴種族の一部は、印度及び東部イランに侵入し、此等諸國の占領をはじめた。イランの侵入者をイラン人と稱するが、彼等は徐々にエラム人 *Elamites* 其他の初期住民とは關係なく西方に進みしが、同じイラン族に屬するスキチア人 *Scythians* はアッシリア帝國を蹂躪せしも、他の部族は平和の裡に居を定めニネヴェエの國王に朝貢した。バビロニア人がニネヴェエの國王に叛亂を起したる時(註一)、彼等は有力なるイラン族の國王に援助を求めた。それはメチア人であつた。メチア人は没落せしアッシリア帝國の分割に際し北部を受け南部をバビロンに與へた。然し彼等は其の受くるところを以て満足せず、脾肉の歎を發して

小亞細亞全土を西方ハリス河 *Halys R.* まで蹂躪した。この河流はリチア帝國(註二)の東方境界を作り、彼等の進展をこの方面に於て梗塞した。そのうちに彼等は附近の諸國を征服し南方の波斯に及んだ。而もメチア帝國は創業以來約五十年餘にして紀元前五五〇年に終熄を告げた。

(註一) 第三節 (註二) 第三節

第二款 波斯帝國

第三節 キルス大王 (前五五〇—一五五九)

波斯王キルス *Cyrus* はメチア王の臣下たりしが、紀元前五五〇年叛旗を翻へして成功し、メチア帝國は終に波斯帝國となつた。才幹と野心とを兼備せるキルスは四方に征服を進め、リチア帝國を征服し西部小亞細亞をすべて收めた。リチアはその附近を征服して國を起し、小亞細亞の希臘植民地をも支配してゐた。キルスの時クロエス *Croesus* リチアの王位に在り、前代に集積せし富を繼承して豪奢に耽り、寵臣と友邦とに情氣もなく黃白を散じた。彼は波斯の勃興に對し、埃及・バビロンの君主を糾合して同盟を組織せしも、敵の攻撃は豫想よりも速に行はれ、キルスは疾風の如く殺到し、同盟軍を破り首府サルヂス *Sardis* を陥れクロエスを捕虜にした。バビロンはこの戰に當りリチアに味方した、由てキルスはこれを圍み、諸侯が宮殿の饗宴に列せる間に乘じ不意を襲うてこれを占領した。

第六節 カムビセス (前五元) キルスの後嗣カムビセス Cambyses は埃及を征服し、ファラオの地位を襲ひこの國の神々を崇拜した。然るに酣醉の結果か激怒の餘り神牛 آپಿಸ Apis を殺したと言ふ。得意に驕りし彼は世界の征服を企圖し、リビア Libya を伐ちしも計畫齟齬して夥しき損失を蒙つた。本國に叛亂起ると聞き、彼は急に歸途に就いた。彼は埃及出征に先ち窃に弟スメルヂス Smerdis を殺したが、彼の不在中亡弟に酷似せる僧侶は王弟と稱して王位に即き、波斯帝國は大部分篡奪者に服従した。カムビセスは本國に向ふ途中過勞のため長逝した。

第五節 ダリウス一世 (前五二) キルスの遠戚に當るダリウス Darius 王位に即き、膺スメルヂスを殺して秩序を恢復し、周到なる統治組織を施した。キルスの政策を繼承し、波斯を除く全領土を二十州 satrapy に分ち、これに太守 Satrap と稱する知事を任命した。太守の下に都市、部族等は土人の長官を戴き、太守は軍隊の指揮者・最終の裁判官・行政官・徵稅吏であつた。宮廷・軍隊の經費として各州は定量の物産の外に金銀を以て定額の年貢を獻け、尙その上に巨額の間接稅と公有財産の收入とがあつた。臣下は太守竝に土人の長官を助け、戦時には軍役に服する義務があつた。ダリウスは首府 Susa より遠隔の州に達する道路を完備し、又た公文書遞送の爲め驛馬の制を定めた。郡縣制度はアツシリアの時代よりも一層徹底し、地方の知事は嚴重なる監督を受けた。此等の點に於て波斯の統治はアツシリアの制度に一步を進めたものである。

ダリウスは組織者としてまた軍隊の統率者として卓越してゐた。彼は國境を東方インダス河 Indus R. に進めた。然し北境の防備は難事であつた、特に北西部に於てイランよりカスピ海・黒海に移住せしスキチア人 (註二) に悩まされた。彼は彼等の侵入に對しあらゆる手段を講じたるも失敗に終つた。後歐羅巴に渡り背後より彼等を攻撃せんとし、希臘人と衝突するに至つた。希臘波斯戰爭以後の古代波斯史は、希臘ローマの歴史と關聯して述ぶるであらう (註二)。

(註一) 第六節 (註二) 第五節以下、第五節

第六節 文明・藝術 イランの印度歐羅巴種族はアツシリア・バビロニア帝國を征服せし時には、尙ほ牧羊者・農民であつた。されば獨創的工藝美術の發達を彼等に期待することは出来なかつた。國王と貴族とは臣下と同様のものを有せねばならぬと思つた。さればすべて彼等の高き文化は借りのものであつた。其のうちには埃及・希臘文化の要素も若干存せしも、バビロニアより輸入したものが多かつた。自然彼等はあらゆる種類の裝飾物を移入し、バビロニアより工匠・建築家を傭聘した。波斯建築の特色はバビロニアのそれの如く高臺であつた。此の地は花崗石を多く産するを以て、彼等は始めて廣くこれをその建築に使用した。第二の特色は圓柱を建築に使用し、バビロニア人は全く獨立せる意匠を示してゐる。彼等の圓柱は埃及 (註三) のそれと異り明かに希臘の影響を受けて丈高く優美に、且つ埃及の殿堂にあるものよりも間隔を置き、その建築に輕快を加味する効果が

あつた。初期建築の好範例は大キルスの墳墓である。この建築は種族發祥の地バサルガダエ Pasargadae にあり。一堂に過ぎざるも『よく保存され濶く、白大理石の七階を備へし礎臺の上にあり、明かに柱廊と覺しき遺跡をもつて廻らされて居る』(註三)。波斯人はこゝに國王の屍體を置き封蠟を施した。蓋し火葬若くは土葬は神聖なる空氣と土地とを汚す罪惡なりと思考せし故である。

(註一) 第五節 (註二) ラフジン著メデア史 100 頁以下 Ragozin, Story of Persia. p. 300 f.

ダリウスはベルゼボリス Persepolis (註一) にある宮殿の基礎に石の高臺を築き、美しき彫刻を施せる階段を設けた。高臺の一部には國王の居室がある、前面はポーチを備へし大廣間、背面と側面とに數個の部室がある。その附近に『百柱の間』があり國祭と祝祭とに用ゐる。同じ高臺には後世の國王が前記二様の設計を反覆せし他の建築物がある。宮殿の外壁は全く其の形を留めて居らぬ。浮彫のうちには獅子・牡牛・怪物等アッシリア(註二)のそれに似て、而も尙ほ多くの均整と自然味を具へて居り、希臘藝術家にしてこれが製作に参加せしものありと認められる。初期の波斯藝術のうちに國王が獅子と格闘してゐるのがある、然るに後世の浮彫は宮廷の娛樂と宗教的儀式とを示して居る。此等の變遷により波斯は東洋の影響を受けて腐敗・衰微せし經過を察することが出来る。波斯人は科學及び建築・彫刻以外の藝術には何等叙述の價値あるものを成就して居らぬ。彼等は製作者にあらずして戰士であり又た統治者であつた。

(註三) 波斯には數個の首府あり、そのうちに上述のスーサとベルゼボリスを數へる。(註四) 第四節

第五節 宗教・文學 波斯人は最初自然力を崇拜(註一)し、マジ Magi と稱する祭司は、犠牲と儀式とを掌つた。英語の Magic はいれより起りしものにて、彼等の職務の一部を示してゐる——呪

文を以て神を味方とし惡靈を驅逐するのである。其の宗教は多神教となるに先ち、紀元前七世紀の後半(註二)に出でし豫言者ゾロアスター Zoroaster によつて改革され純真なるものとなつた。彼は宇宙人類の創造者にして、全ての人類によきものを與ふる唯一最高の神のあることを教へた。神は聰明にして神聖なるもの、神のみ威嚴と權力とを有する。神の敵とするは、暗黒に住む醜惡不純の靈にして惡魔の首である。惡靈は神に挑戦するも智慧と力とを有せざるが故に常に敗れる。惡魔に背きて善神を崇拜し、これに服従するものは永生であり、その性格に相當する報ひを受け、これに反して邪惡なるものは惡魔の巢窟に墮つ。大豫言者ゾロアスターの眞の信徒は、偶像を作らず殿堂を有せず、唯山頂にあつて淨火と祈禱と祭酒とを以て神を禮拜する。而も神を表象する偶像を用ふるものあるに至り、多數の人民は唯一の神を以て満足せず、多神教に歸依した。

神がゾロアスターに啓示せし彼等の聖書アヴェスタ Avesta は宗教律・儀式・祈禱文・讚美歌より成り、その斷篇は可なり今日に尙ほ傳はつてゐる。宗教文學の外に歴史的著述があり、『メデア、波斯王の年代記』(註三)はその一である。本書は既に湮滅せしも尙ほ多數の國王の碑銘殘存し、貴重なる

資料を提供する。其のうち最も重要なものはダリウスの刻したる西部國境に近き磨崖(註二)に残れるものである。その銘文には王が神の恩寵により遂行せし功業を記録して居る。

(註一) この方面の現代の權威者ヤクソン A. V. W. Jackson 教授の説である。氏の著『ゾロアスター』Zoro-
aster 一頁以下参照。

(註二) エステル書第十六章第二節

(註三) 磨崖の名稱よりこの碑銘をベヒスタン Behistan と稱す。これ亦ヤクソン教授の綴字による。

第六節 道德 波斯民族の道德的性質は宗教と等しく賞讃に價するものがある。東洋國民の間には安逸奢侈の生活に耽り、富と權力とに淫して身心を虚弱ならしめ其の品性を腐敗せしむるものがある。最初は勇敢忍苦の征服的民族も間もなく墮落し、隣國の好戦民族の爲めに容易に征服せられる。この原則は亞細亞に起りし諸帝國の興亡により説明し得る。例へば波斯人は強健勇敢なる山地の住民にして、素朴なる習慣と健全なる性格とを備へ、容易に腐敗せるバビロニア、アツシリアを征服した。彼等は長い間初期の美德を持續し、子弟の教育には『たゞ三つの事柄を教へたゞけである——騎馬と射術と眞實を語ることに』(註一)。而も彼等も亦終には衰微し、歐羅巴より侵入した小軍隊のために征服された(前註三)(註二)。

(註一) ヘロドタス第一卷第一二六節 Herodotus, i. 136

(註二) 第三六節以下

第六節 波斯人の貢獻 波斯人最大の功蹟は、アツシリアの政治を改善せしことである。すべて初期の帝國に於て、征服者は一切を壟斷し、被征服者は單に國家歳入の財源と看做されて居た。キルス及びダリウスに至り此の國民的思想は帝國的思想に代つた。換言すれば彼等は思慮と恩情とを以て全帝國に君臨し、一個の有機體として國家の保護と改善とに努力した。其の領土は初期の帝國に比して極めて廣大なるものとなり、こゝにまた一個の利益を齎した、即ち四海同胞的思想は隣に隣ぐ小國家間に發生するものではない。廣大なる政治的基礎が置かれてはじめてこゝに其の發生を見るのである。波斯帝國は此の目的に對して一步を進めた。最後に亞細亞と歐羅巴との接觸を密にし、思想と發明の交換を助け、世界の進歩に貢獻するところあつた。

第三款 東洋文明撮要

一、一般的特徴 東洋文明は著しく歐羅巴文明と異つてゐる。東洋人は活潑なる想像力を有するも、理性は、歐羅巴人ほどに強からず、又訓練もされてゐない。東洋人の思想は矛盾し理性に従はず、生來常に權威に服従する。其の結果宗教はすべての行爲に大なる感化を與へ、祭司は特別なる尊敬を受ける。人民の間には截然たる經濟的區別がある。即ち多數の人民は生活に必要なものを生産するにこれ忙しく、支配者と祭司とは彼等の苦心せる生産を搾取するに過ぎぬ。政治に就ても東洋人は獨立思想を缺き國王に服従すること尙ほ子の親に服するに等しい。されば東洋の政體は常に王政であり、國王は臣民の絶對的主君である。この權力

は容易に大建築を成就せしめ、宮殿・殿堂・彫像其の他巨大なる事業の遺跡を東洋に發見する。小藝術と科學とはすべて宗教によつて行はれ發達する。彼等は急速の發達をみるも、宗教的拘束を受けて充分なる進歩を遂ぐるに至らぬ。すべての東洋國民は大體類似せるも、其の特色と習慣とに僅少なから相違せるを見る。

二、ナイル・ユウフラテス文化の對照 此等兩文化の類似點は既に前に述べたが、次の對照にも注意を必要とする。埃及は其の歴史の大部分を通じて殆んど外國の侵入を受くることなかりしも、バビロニアは其の反對である。埃及は他の民族に影響を與ふること少く、バビロニアは多くの影響を與へた。埃及人は石造建築を有しバビロニア人は煉瓦建築を完成した。前者は圓柱を廣く使用し後者は實用にこれを供しなかつた。埃及の宗教は來世を多く考へ、バビロニア人は現世に執着した。前者は動物崇拜に熱心し後者の神々は殆んどすべて天上のものであつた。道徳的には埃及人は最も發達せし民族であり、バビロニア人は商業及び科學の指導者となつた。

三、文化の混融 兩文化は歴史時代の後期まで融和しなかつた。舊王國の時代以來兩地方の間には多少の通商が行はれた。ヒクソスの埃及侵入はそれ自身の習慣・思想を輸入したけれども、バビロニアよりは何物をも齎らさなかつた。シリア人・希伯來人及びフェニキア人は或る程度に兩文化の融和を代表して居る、即ち彼等の文明のうちある要素は埃及より、多くはバビロニアより得た。フェニキア人は商人として各國民に他國の産物を傳へ、アッシリアは兩地方を征服して結合したが、それは意義あるものではなかつた。

四、文化の西漸 埃及は其の産物と藝術とをクリート及びエーゲア海地方に傳へ、フェニキアは東洋文明の種子を地中海の諸島沿岸に撒布し、更に小亞細亞特にリヂアは文明仲介の勞を取つた。東洋の藝術・習慣・思

想はリヂアを経て小亞細亞の兩岸にありし希臘植民地に傳はり、更に歐羅巴に播がつた。吾人は又た亞細亞に對する歐羅巴側の反動を認める。特に埃及人はクリートより精巧なる陶器を輸入し、リヂアも恐らく同じ程度の文化を希臘人より受けたであらう。

五、統一・文化の融合 波斯帝國は亞細亞の文明國民をその帝國內に合流せしのみならず、又これを有機的に統一した。波斯王は帝國最善の藝術と産業とを調和してこれを首府の裝飾に用ゐ、斯くして波斯帝國は長期に亘る政治史文化史を完成するに至つた。

第二篇 へ ラ ス

第六章 國土と民族

第七節 ヘラスとヘレネス 吾人は東洋民族の研究に當り、屢々彼等と希臘人との關係を考察する必要があつた。希臘人とはローマ人が此の民族を傳へしときの名稱にして、又た吾人の常用するところのものであるが、彼等自らはヘレネス Hellenes と稱してゐた。吾人はその意味を充分に解せぬ。然し彼等はヘレン Hellen を共同の祖先とし、自らは其の子孫であるとの神話を發明してこれを説明せんとした。彼等に取つてヘラス Hellas は其の何處にあるも彼等の所有する國土を言ふのであつた——獨り舊本土のみならず、又た多くの植民地をも包含してゐた。『ヘレネス』と『希臘人』と、『ヘレニツク』と『グリーク』とを同意義に使用して何等不都合はない。然し一方『希臘』とは現在一般に近世の希臘國家の占有する半島を稱してゐる。この混用を避くるため、本書に於て此の意味を保留し廣義の『ヘラス』(註)と區別することとした。

(註) 歴史家の屢々試むる如くに『希臘』と『ヘラス』とを同意義に使用するなれば、『希臘本土』 Greece proper と『廣義の希臘』とを常に區別する必要が生ずるであらう。

第七節 山嶽 ヘレネスの故國希臘は、南東歐羅巴より地中海に突出する半島である。希臘を旅行し若くは其の地圖を見る時、此の國は山嶽に富むに注意を惹く。カムバニア Cambrian 山脈は北部國境に沿つて延び、其の最高峰は海に近き半島第一のオリンボス山 M. Olympus である。希臘人はこれをゼウス Zeus 其の他の神々の棲所と考へた。オリンボスに近くテッサリー Thessaly の東岸に沿ふ山系にオッサの山 M. Ossa がある。この沿岸山系の遙か西方にピンダス Pindus 山系がある。これはカムバニア山脈より南方に分岐し、希臘の北部地方を殆んど等分する。更に南方に進めば山峯屹立の状態にある。中部は狭き平野と小平原とに分れて山脈簇立し、その最高峯バルナサス Parnassus 山は、半島の中央に位置して居る。

ペロポネサス Peloponnesus = Peloponnesus は希臘の最南部にあり、高低の少ない唯一の地方である。北部の中央にアルカヂア Arcadia の高地がある。山脈はすべて此高地より各方面に放射し、南方には

テゲタス Taygetus 山系が延び南部ペロポネサスを兩分する。此の山系は鐵嶺を以て有名である。第七節 河川及び湖沼 希臘の如き小國では河川は必然的に短小である。更に氣候の乾燥と相俟つて水量に乏しく、希臘にあつては河川はすべて小河に過ぎぬ。冬季雨期になれば急流をなすものもあるも、夏季は全く乾れてゐる。すべて河川は夥しく土壤を流し、下流にこれを堆積する。河口にある小平野は斯くして堆積せる土壤より成る沖積層をなし、この點に於てナイル、ユウフラテスの平

野に酷似する。此の種の最大の平原は北部希臘のテッサリーにあり、希臘最大のペネウス Peneus 河によつて構成されてゐる。一地方の小流は屢々河川と合流せずして盆地に入り、湖沼を作る。

希臘の他の特色は海岸に多数の港灣・入江の存することである。其の面積に比較して斯くの如き長き海岸線を有する國土は他に其の例を見ない。

第三節 氣候・産物 希臘半島の最大距離は直徑約二百五十哩、其の最大幅員は百八十哩、略ぼメイン Maine 州の面積である。而も氣候は斯る狭小の地域に温帯より亞熱帯に跨り各種の産物を栽培してゐる。嘗ては全土を擧げてその森林を誇りしが、今は殆んど大部分に樹木を見ない。されば古代に於て土壤は濕氣多く生産力に富でゐた。北方の森林には山毛櫸・檜・篠懸木・胡桃等殆んどあらゆる種類の歐洲産の樹木があり、南部テッサリーは米・綿花を産し、橄欖と無花果とはアッチカに榮え、ペロポネサスにはレモン・オレンジ・棗椰子が繁り、葡萄樹は至るところに見ざる所なしと言ふ。小麥は若干の豊饒なる低地に産するに過ぎず、土地の大部分は磽确にして石多く牧場の外には用をなさず、或は僅かに大麥を産するのみ。家畜には豚・羊・野羊があり、牛と驢馬とは勞力を供す、馬は騎兵に使用せられ、平時は富者の贅澤品であつた。

普通の鑛産物は鐵・銀・銅である。最良の鐵鑛はテゲタス山系中にあり、銀はアッチカに、銅は附近のユウボエア Euboea 島に採掘された。金鑛は國境に近きトラキア Thraciae と其の附近のタッス Thasos 島に存した。金屬は僅少であつたがヘレネスは花崗石・大理石を無限に有してゐた。最良の白大理石はアッチカのペンテリカス Pentelicus 山及びエーゲア海のパロス Paros 島より産出されてゐる。其の他青・黒・赤大理石もあつた。約言すれば過去・現在を通じて希臘ほど建築石材を出す國は世界に他に例がない。

第四節 北部希臘 更に地圖を注意すれば希臘半島は海洋により北部希臘・中部希臘・ペロポネサスの三地方に別れて居る。北部希臘はエピルス Epirus 及びテッサリーの兩地より成り、ピンダス山系によつて分たれて居る。エピルスの大部分は北方より南方に貫通せる山脈の高原である。

エピルスと異り、テッサリーは山嶽に圍繞されし希臘最大の平野である。北方カムバニア山脈は巨壁をなして外敵の襲撃を防禦し、オリンボスとオッサとの中間には美しきテムペ Tempe の谿谷があり樹木が密生して居る。北方より希臘に向ふ主要なる通路である。

テッサリーは古代には優秀なる牧場であつた。大地主は多数の馬匹を飼育し、戦時には數百の騎兵を戦場に送り出すことが出来た。やがてこゝに都市が発生した、然しエピルス人もテッサリー人も共に田園生活を好み、商業を營まず工業に熟達しなかつた。教育と文化生活とに於ては希臘の商業都市よりも遙かに後れて居た。

第五節**中部希臘・(イ)未開地方**

テッサリー及びエピルスの南部は、中央希臘として東西に互る

狭長の土地である。北部希臘よりも更に山嶽に富み、長き海岸線に沿ひ港灣の設備が充分である。エトリア Aetolia 及びロクリス Locris の地は特に崎嶇甚しく、住民は永く未開の状態にあつた。東部及び南部希臘の商業都市が其の文明の頂上に達せし後も、エトリア人及びロクリス人は依然武器を日常生活に携へ、抵抗力防禦力なきものを奪掠し或は殺戮を行つた。彼等のあるものは他の希臘人の不可解なる言語を語り生食した。エトリアの西にアカルナニア Aetolia がある。湖沼と港灣とに富む土地なるも、海岸は高き傾斜面より成る。古く東岸より此の地に來たりし植民者は土人に有用なる技術を教へた。従つて此の地の文明はエトリア或はロクリスよりも遙か進歩してゐた。ロクリスを二區に分つフォシス Phocis はバルナサス山の附近高地の大部分を占め、南方の山麓にデルフキ Delphi の町がある。アポロ Apollo の神託を以て有名である。

第三節 中部希臘 (口) 開明地方 フォシスの東にボエオチア Boeotia がある。その大部分は盆地をなし、水流はコバイス Copais 湖に注ぐ。湖水附近の土地は平坦にして産物に富み、其の濕氣は雲霧と化して空中に昇る。隣國人は、この陰鬱なる空と極度に牛肉を嗜むため、ボエオチアの住民は愚鈍であると揶揄して居る。然し實際彼等は知識と企業心とに於て中部希臘國家の第二位にある。

シテロン Cithaeron 山はボエオチアと中部希臘の東端にある半島アツチカ Attica とを分つ。ア

ツチカの北東マラトン Marathon の平野を望むベンテリカス山は良質美麗なる白大理石に富み、ベンテリカスの南にあるヒメタス Hyettus 山脈は今尚ほ養蜂を以て有名である。中部は海に入るに先つて合流せるセフキسس Cephissus 及びイリス Ilissus 兩河を中心に平野を作つてゐる。第三の平野は北西岸にあるエレウシス Eleusis を中心とする。アツチカは大部分礫礫の嵯峨たる瘠地であるが、長き海岸線の天恵を受け商業に従事す。知識と藝術的趣味とに於て住民はすべて他の希臘人に卓越し、其の首府アテネ Athens はやがて文明世界の中心都市となつた。

アテネよりペロポネサスに陸行する旅客はメガリス Megaris を通過する。こゝはコリント Corinth 地峽のや、廣き部分にある小國である。土地はアツチカよりも一層不毛なれば人民は牧羊に従事し、粗製の毛織物及び陶器を輸出して生活を営む。地峽の兩面に港灣あり商業の設備が整つてゐる。其の主なる都市メガラ Megara は一時貿易の大中心地であつた。

第七節 ペロポネサス (イ) 未開地方 神話の英雄『ペロプス Pelops の島』ペロポネサスは巨大なる半島にして、東岸に一個南岸に二個の港灣を擁してゐた。中部地方は『希臘の瑞西』と稱せらる、アルカヂアにして、高山を廻らせる高原である。山中には肥沃の平野と平原とあり、種族或は都市の領土である。アルカヂア人は簡素なる山民の生活を営み、主人と奴隸とは豚肉と麥製菓子と共に食ひ、葡萄酒を同じ盃より飲んだ。剛健にして戦を好むアルカヂアの自由民は、等しく其の本國の

ために戦ひ又傭兵となつて外國に仕へた。

高原の北部傾斜面には狹長なる海岸の平原を有するアケーア Achaea がある。十二の獨立せる都市に分れ後世に至るまで歴史上重要なものとはならなかつた。エリス Elis は西部の傾斜面と海岸の廣き平野より成り、其の最も有名なる都市オリムピア Olympia は希臘最大の國民的祝祭を開催し、全ヘラスの運動競技を闘はした場所である。此の地には現に殿堂の廢趾が各所に散在して居る。

第七節 ペロポネサス(ロ)開明地方 地峽に近きコリントはヘラスの最大商業都市の一であつた。其の高き城地は形勝の地を占め、サロニカ Thronica 灣に二個、コリント灣に一個、都合三個の港によつて東方並びに西方と通商することを得た。其の狹き國土は大海軍を擁したるに拘はらず、強國たるに至らなかつた。アルゴリス Argolis はペロポネサスの東に當る主として山地の半島である。主要都市はアルゴリス灣頭より北方に達する平野に沿うて散在してゐた。その一なるミケーネ Mycenae は初期の有力なる王國の所在地であつたが、やがて衰微しアルゴス Argos 代りてアルゴリスの首位を占むるに至つた。然し數十年にしてこれも亦廢墟となつた。

アルゴスの競敵はラコニア Laconia の主都スバルタであつた。最初此の國はユウロウタス Eurotas 河の肥沃なる盆地に其の地位を占めてゐた。その住民は數世紀間世界の最強の精練なる軍隊を有し、従つて全ヘレネスは國家の危急に際してスバルタの保護を期待した。『洞穴多き丘陵の間に低

く横はる』スバルタは唯村落の聚合に過ぎぬ。他の多くの希臘都市と異り全然防備を有しなかつた勇敢なる戰士の隊列こそ、其の城壁であつた。

ラコニアの西には丘陵にして而も肥沃なるメセニア Messenia があつた。其の中央に近くイトメ Ithome 山があり、頂上は要塞として上乘の地位を占めて居た。

第七節 島嶼・エーゲア海地方 半島の東はエーゲア海である。希臘と小亞細亞の中間に位し、一個若くは數個の集團をなす島嶼を以て點綴されて居る。タッスは其の金を以て、ユウボエアは其の銅を以て有名なることは既に述べた。後者は中部希臘の沿岸に殆んど平行する長き島嶼である。シクラードス Cyclades 群島はユウボエア及びアツチカ海に繋續せるものに過ぎぬ。其のうち最も有名なるは神話にアポロの誕生地と傳へらる、デロス Delos と、美しき大理石の産地として既に述べたパロスとである。小亞細亞の海岸近くには、抒情詩に有名なるレスボス Lesbos 初期工業の所在地たるキオス Chios とサモス Samos フェニキア人の植民(註)せしロード Rhodes がある。此等島嶼のうち最も大にして且つ最も重要なものはシクラードスの南、希臘と埃及との海路に當るクリート Crete である。他の島嶼に就ては希臘史の研究の進むにつれ叙述するであらう。エーゲア海と隣接する小亞細亞の沿岸にも注意する必要がある。この地は小規模なれども豊饒なる平野に富み希臘の對岸としての港を充分に備へてゐる。

(註) 第四九節

エーゲア海は其の兩岸の國土を分離せず寧ろこれを結合する。即ち島嶼は言はゞ一方より他方に至る踏石である。航海者は輕舸に乗じて少しの危険もなく、陸地を見失はずして海洋の全面を横斷するを得た。實際希臘人は南ユウボエアの山々よりキオスの丘陵を望むことを得た。夏季絶えざる軟風を利用して海上を行くは陸上よりも容易であつた。されば自然エーゲア海——島嶼と兩沿岸——の人民は産物と思想とを交換し、等しく文化の發達を見た。此の地方は歐洲文明の最古の地方であり、半島よりも寧ろヘラスの中心たりしことを以て、その研究は重要視すべきである。

第八節 國土の人民に及ぼせし影響 希臘は山嶽に富み、この特色はナイル、ユウフラテスの平野と著しき對照をなす。希臘は幾分シリアに似て而も更に山脈によつて分立して居る。希臘人の多數は山地の住民である。山地の住民は狩獵・畜産・小規模の農耕によつて生活を營み、他人の協力援助を仰がず、又た政府をも必要としない。彼等は自由であり、其の生活は彼等を強大勇敢ならしめた。斯る人民が其の自由のために戦ふ時には殆んどこれを克服し難きものである。これは希臘人が山間の生活に習育せし特色である。

國土の性質は又政治的結果を齎した。平野即ち狭き平原の人民は、高き山脈に圍繞せられ隣人を見ること少く、完全なる獨立生活を以て満足した。換言すれば山嶽は大國家の發生を妨げた。

次にこの國の主要なる特色は、優秀なる港灣により海に開かれてゐることである。希臘人は半島の殆んどすべての場所より、當時の緩漫なる旅行によつてすら一日にして海に達するを得た。この環境は自然彼等を海上生活に誘つた。礪確なる土地は稠密なる人口を支持することは出来ぬ。北方にある高大なる山嶽は希臘人を中部歐羅巴に進出するを妨げた。すべて此等の地理的特色は合して彼等を商業植民の民族たらしめた。吾人は既にエーゲア海の航海が如何に容易にして、又た島嶼の連鎖により遙か埃及・阿弗利加と通じ得るかを叙述した。約言すればエーゲア海は東洋に近く其の方面に展開せるため、東方諸國の船舶が先づ訪れる西方の土地とならしめた——斯くて希臘は歐洲文明の發祥地となつた。

就中最も重要なものは此等の地理的環境の精神上に及ぼす影響である。貧しき土地は希臘人の生活に節約の習慣を與へ、中庸は彼等の思想・行動を支配した。彼等は世界に比類なき均整の人民となつた。溫和なる氣候、靜穩なる四季の變化は彼等を幸福にした。爽快なる空氣は彼等に明晰なる思索を與へた。樹木なく屹立せる山嶽は彼等の靈魂のうちに知的美を愛する心を覺醒し、この心は希臘人を他のすべての民族より卓越せるものとした。最後に氣候・土地・産物の多種多様なることは、他の好影響と共に希臘國民をして文學・科學・藝術・政治の天才を以て令名を博するに至らしめた。

第七章 クリート・ミケーネ文明(紀元前約3500-1000)

第一款 遺跡・住民

第八節 最近の發見 歴史家は最近まで希臘史叙述の端緒を紀元前第八世紀に置き、或は精密に紀元前七七六年(註一)を以て始め、最初の一世紀間は單に二三の事件を列擧するに過ぎなかつた。而もこの事はエーゲア海地方に於ける發掘の結果變化を生ずるに至つた。この發掘事業の開拓者はハインリッヒ・シュリーマン、Heinrich Schliemannであつた。彼は幼時ヘレネスの詩人ホーマー Homer の傳へしトロイ戦争(註二)に現はる、蓋世の英雄譚を聞き、これを以て眞實の歴史と考へ、地下に埋没せられし古代都市トロイを發見し得ると信じ、これを遂行することは彼の生涯のインスピレーションであつた。彼は實業界に入りて財を得、一八七二年にホーマーの記述によりトロイの所在地と論斷せし丘陵の發掘を始めた。この丘陵は北西小亞細亞の海岸を距る遠からざるところにある。其の結果は彼の希望を満足せしめた以上であつた。ここに彼とこの事業後繼者とは時代を異にせる層より成る九個の植民地の遺跡を發掘した。最下層の植民地は粗野なる村落にして紀元前3500年頃に人民の居住ありし如く、第六層は更に發達せる文明を有し、紀元前一五〇〇—一〇〇〇年頃に

に榮えしものと推算される。其の後シュリーマンは希臘のアルゴリスにあるチリンス Tiryns 及びミケーネを發掘した。此等はトロイの第六層市と年代を等しくする。ミケーネは富と文化とを表象する。彼は當時希臘の沿岸とトロイとが隆昌なる文明の中心であつたと信じ、この文明をミケーネ文化と命名した。

(註一) 第二節註一 (註二) 第二節

此等の發見後希臘史は紀元前一五〇〇年に遡る必要を生じた。而もこの年代すら最近に至つては全く新しきに過ぐる事が分つた。一八九九年以來英國の考古學者アーサー・エヴァンス Arthur Evans はクリート島クノッスス Knossos に一大宮殿を發掘し、他の學者も亦この島の他の部分に小規模ではあるが同様の發掘を行つた。此等の發掘はクリート文明がミケーネ文明よりも古き時代に始まりしこと、即ち事實に於て古バビロニアの文明と選庭なきことを證明した。約言すれば吾人は歐洲文明を研究する端緒を紀元前三五〇〇年頃に溯らす必要あるに至つた。

吾人は此等の年代をクリート人の記録より得たのではない。彼等の文字は未だ解讀するに至らぬ。此等の年代は埃及年代紀の研究に基づくものであつて確實に紀元前二五〇〇年まで辿ることを得る。當時埃及とエーゲア海地方との間には物資の交換あり、此等の商品の比較研究により吾人はエーゲア文化の年代を改訂し得るのである(註一)。

(註一) 然しながら紀元前七〇〇年より以前の希臘史の時日は、すべて單に近似的なることに注意するを要す。既に列擧せるものうちにも二三世紀早過ぎるものも又た遅過ぎるものもあるべし。

第六節 最初の住民 希臘の神話はヘレネス以前の種族の名稱をも其の絶滅後長く保存して居る。其の一例としてペラスシア人 Pelasgians を擧げることが出来る。彼等は原始種族の一たるに過ぎぬ。ヘレネス以前の住民は何等共通の名稱を有せず、その何種族に屬するや明瞭でない。吾人は唯其の文明の進歩を現存せる彼等の作品によつて考へ得るのみである。

第二款 クリート文明

第八節 發端 紀元前三五〇〇年頃、全エーゲア海地方には村落植民地があつた。住民は圓形の小屋に住し、石にて道具・武器を造り、轆轤の助けなく手を以て粗末なる陶器を製し、これに裝飾を施した。斯る太初の時期に於てすら埃及とは通商が行はれた。當時の村落のうちにはトロイ及びクリートのクノススにある最古の植民地を數へる。それは石器時代のことである。

此の地方の文明は斯る見地より其の盛衰興亡を辿ることが出来る。吾人は陶器の著しき改善、銅器・青銅器・金器・銀器・文字等の相次いで紹介せられ、建築其の他多くの文化の發達を見ることが出来る。クリートは埃及と商業により密接なる關係を結び、この文化運動の嚮導者となるに至つた。

詳細なる叙述を避け、吾人は簡明に其の發達の高潮時——紀元前二〇〇〇乃至一五〇〇——に於けるクリートの生活に一瞥を與へんとする。

第八節 宮殿と廷臣 クノススの國王は廷臣と共に、埃及のそれに匹敵する廣大なる宮殿に居住してゐた。宮殿は矩形の庭園・長き廻廊・多くの部屋と貯藏室とより成つてゐた。其の一室には曾て國王の用ゐし王座と、壁側には輔弼の貴族のための腰掛のあるを發見した。他の一室にも腰掛を置き教室に使用されし如くに思はれる。當時の華麗なる宮廷生活は壁畫に描かれて居る。『屢々君主の臣下は堂々たる行列を作り參殿して貢賦を齎し、宮廷は盛裝の婦人と流行を追ふ紳士とが或は坐し或は立ち、或は身振りをなし或は遊戯せるを見る。淑女は東洋婦人の如く容貌に白粉を施してゐる。尙ほ廷臣等は牡牛調練者の一群を眺めてゐる』(註)。彼等は青年と淑女の一團である。此等の繪畫にある貴族は、端麗なる衣服・寶石・家具を有し、型と仕上げの美しき花瓶を有し、精巧なる彫刻を施したる寶石の印章・貴金屬を鏤めたる大刀を携へてゐた。彼等は藝術上の趣味と技術とに於て遙かに東洋人を凌駕して居た。其の藝術に現はれた人と動物との形態は特に優美且つ自然に近いものであつた。

(註) アーサー・エヴァンス博士 Dr. Arthur Evans の報告書より抄録。

第八節 文字 クリート人は二様の文字を有して居た。初期の神字と後期の略字とである。此等



の文字を以て記されたる幾千の粘土製の小牌札は、宮殿の一室に發見された。疑もなく此等は金錢の受取支拂の記録であつて、其の或ものは事實の記録であるかも知れぬ。至るところ發見さる、大牌札は神への獻物の記録であらう。一言にして言へば此等の記録は宗教・商業更に恐らく歴史的の目的に使用されたのであらう。學者が此等の文字を解讀し得る時には、クリート人の國語は分明し、其の文明は一層よく理解さるゝに至るであらう。

第八節 社會・政治 彼等の社會は多數の勞働者と少數の貴族とに分れ、國王は絶對的支配者であつたこと明かである。この島は一人の國王の下にすべて統一せられし平和境なりしと信すべき有力なる證據がある。國王は深く其の海軍に信頼して防壁を作らず、埃及の盛時に於てすら遠征軍の海上輸送を爲し得なかつた。クリート王は多くの贈與を以てファラオの歡心を買ひつゝ、他面エーゲア海の多くの島嶼に號令してゐた。

第三款 ヘレネスの移住

第八節 發端(前約二五〇〇)・種族の形成 吾人はエーゲア海地方の研究に於て今まで希臘人或は印度歐羅巴種族に屬せざるものに就て述べた。吾人は既に(註)紀元前約三〇〇〇年に印度歐羅巴種族が其の故國に於て分離運動を始め、別種の民族となりつつありしことを述べた。その或ものは移動の間

に長くダニユープの平野に留まりし如く、考古學者はここに彼等の文明の遺物を發見した。紀元前約二五〇〇年頃この地より各種族は希臘に向ひ南進を始めた。ダニユープの平野とエーゲア海との間には既に商業が行はれて居た。されば新來者は彼等自身の生活と多く異ならざるものを發見した。歐洲語の移住民はその他の場合と同じく土人と混合し、他よりも多くの外國人の侵入ありて幾分の變化を受けしも右移住民の言語は主要なる勢力を有し且つ廣く行はれた。兩民族の融合はこゝにヘレネス種族を生ずるに至つた。

(註) 第六節

第八節 植民地の騷亂と争闘 こゝにヘレネスの移住を詳述する必要はない。彼等自身その記録を有せず、又たその祖先の外國移住民なることを記憶せざる故である。彼等は疑もなく民族をなし、同じ印度歐羅巴種族に屬するイリリア人 *Illyrians* 及びトラキア人に背後より壓せられ、恐らく『波濤』に乗じて漸次侵入せしものであらう。侵入者と土人との間に又た移住民族の間にも、一樣に良地を占有せんとして斷えず争奪戦が行はれたに違ひない。されば數世紀の間希臘は騷亂と争闘との巷であつた。混亂は第十三・十二世紀に至りて頂上に達し、希臘とエーゲア海とは全く渾沌としてゐた。當時の埃及の記録は『島嶼は不和の状態にある』と記して居る。その原因はイリリア人其の他の民族の南方壓迫運動にあらねばならぬ。

此の運動の一部は希臘人の多數を半島の北西即ちエビルス、エトリア及び其の附近(註)より東部及び南部ペロポネサスに移動せしめた。此等の民族は後にドリア民族として知らるるに至り、彼等のペロポネサス移動をドリア人の移住と言ふ。こは半島内に於ける最後の大移動にして、後世希臘人の記憶する唯一のものである。そは紀元前第十三・十二世紀に行はれた様に思はれる。

(註) ドリア人の方言が北西希臘の言語と殆んど同一なる事實は、彼等が此の方面より來りしことを立證する。

第四款 ミケーネ文明(約前1500—1000)

第八節 發端・チルンス

希臘人がその歴史的國土を占有しつゝ、ある時、クリート人は生活の技術に一大進歩を遂げ、彼等の産物は商業により其の工業上の知識と共に、エーゲア海地方より、更に遠隔の諸國に弘まりつつあつた。然るに希臘人は移住と征服との混亂に茫然自失して、久しく此等の進歩に何等興味を感じなかつた。而も紀元前第二千年代(1000—)の中葉に至り一時生活の安定を得るや、半島の東岸及び南岸の住民は急速にクリートの影響を受くるに至つた。この時クリート人は既に發明力を失ひ、其の文明は同時期の埃及文明と同じく沈滞してゐた(註)。

(註) 第二節

東岸に住せし希臘人の族長等は外國の影響を受け、小王國を河口の沖積層の平原に建設し、有力なる防備を施せる都市を中心とした。此等の植民地の一をチルンスといふ。アルゴリス灣を距る一哩餘の低き平面の丘上にあり、歐羅巴大陸最古の都市である。其の城壁は巨大なる粗石を以て造られ、神話によればシクロプス Cyclopes なる巨人種族の建設せしものなりと傳ふ。かゝる理由により同じ粗石建築をシクロペア風と名づける。此等の防備に圍繞されし牙城の最高部には大宮殿がある。クノスの宮殿の如く多くの部屋を有し、別に男子と婦人との爲めに離れたる庭園・大廣間・地下道と下水とを備へし浴室・寢室・廻廊・玄關等があつた。この宮殿はクノスのそれよりも簡素小規模のものであるが、僅々數平方哩の土地を統治せし國王のものとしては寧ろ大宮殿であつた。其の城壁と宮殿とは國王の富と驕奢と、その臣下に對する生殺與奪に對する無限の權力を如實に物語つてゐる。

第九節

ミケーネ

ミケーネは、アルゴリス平原の最北にある峻嶺に位置して居り、周圍にはチ

ルンスのそれよりも更に精巧なる城壁を以て繞らされてゐる。この城壁は都市の發達に伴ひ附近の低き峯に及んだ。防備の完き昔の場所は牙城となり、後に加はりし個所は下市と稱せられた。ミケーネはチルンスよりも後世のものである。然し國王は其の地利を利用してやがて全アルゴリスを統治した。ここにシュリーマンは宮殿の外に私人の家屋・貴族・奴僕の住宅をも發掘した。更に驚くべきは丘嶺に圓形の一廓をなして國王の墳墓がある。こゝに初期の國王は其の家族と共に葬られた。

後世の支配者は下市に巨大なる圓天井の墳墓を自ら造り、其の一なる所謂アトレウス Atreus の墓は高さ約五十呎、直径もこれに等しきものである。此の種の墳墓は丘陵の半腹地下に設けられ長き平行せる通路により瑩域に達する。ミケーネにある此等の墳墓はすべて空虚であつた。恐らく掠奪を受けたに相違ない。此等の遺物により特に牙城にある墳墓の内容により、ミケーネ人民の生活、其の衣類食物をも知ることが出来る。

宮廷の婦人は胸衣と鬘ある裾を着けてゐた。衣類は亞麻布若くは軟き毛織品を紫色に染めたものであつた。『金冠を額に着け、精巧なる金の髪飾と髪針とは暗黒色の頭髮に輝き、金の頸飾と襟飾とは長く胸に垂れ、金腕環を穿め、金の指環は彼女の指頭に其の精妙なる技術を誇り、華麗なる外衣は金色を以て目を眩す』(註)。男子は胸部に單純なる外衣をつけ、其の儘寛やかに垂れて短き袴衣をなす。肩には外套を吊るし、婦人の如く寶石を以て裝飾した。香水を用る自ら青銅製の鏡の前に立ちて其の姿を眺むるを好む。

(註) ツオウンタス、マナツト共著ミケーネ時代、一八九以下 Tsountas and Manatt, the Mycenaean Age, 189 f.

國王及び貴族は戦争に際して胄を冠り、頭部より足部に達する巨大なる楯を携へ、毛製又は革製の脛當を着ける。護身の武器は刀槍であつた。斯くの如き重き武器は自ら遠く携ふ能はざるが故に

戦車に乗り二匹の馬を以てこれを曳き、格闘の際は下車する。平民は輕裝し防禦の武具を着け、主に弓と抛石器とを以て戦ふ。然し平民は戦争と政治とは重要視せられなかつた。

ミケーネ人は未來生活を信じ、墳墓にある靈魂は屍體と共に葬られし器具・裝飾品を使用するものと想像したに相違ない(註)。彼等は死者のみならず、又た偶像を以て作りし神々を禮拜した。

(註) 第二〇節

第九節 クリートの關係・表徴

ミケーネは此の時代の希臘に於ける最も富強にして文化燦然たる都市であつた。されば當時の文明をミケーネ文明と言ふ。されど同程度の文化は希臘のスパルタ附近のラコニア、アテネ其の他の場所にも存在して居た。エーゲア海の彼方にはトロイの『第六層市』が時代を同うし、その生活も略同様のものであつた。約言すれば同様の文化がエーゲア海地方に行はれてゐた。至るところにクリートの影響が見られる。彫刻された寶石・精巧なる金細工・象眼のある刀身其の他ミケーネに発見された家具類は、疑もなくクリート島より輸入されたのである。クリートの建築家は宮殿を作り、クリートの藝術家は内部の壁に自國同様の繪畫を描いた。多くの移民はクリートを後にし、企業心に富む此等新民族の間に其の運命を開拓したに違ひない。兩文化は著しく異なるを見ず、主に時代の相違たるに過ぎぬ。初期の文明は發明的であり、進取的であり、後期の文明は暫くは停滞するも、やがて頽廢するに至る。クリートは其の氣風が寧ろ藝術的

であり、チルルスとミケーネとは政治的であつた。希臘の都市は城壁を繞らしたが、クリートの如きものを他に見ない。チルルス或はミケーネの宮殿はクノススのそれよりも更に單純正規の形狀を備へ、後世の希臘殿堂が繼承せし特色を具備してゐた。生活は活潑であつたに相違ない。國王の間には常に爭覇戦が行はれ、又北方より殺到し來りし半島内部の漂泊未開種族に對し自由擁護の戦争があつたに違ふない。かくてミケーネ其の他の都市は城壁を造ること、なり今日尙ほ旅客の歎稱を受けて居る。クリートの衰微につれ、希臘王のうちにはこの地に渡來してこれを征服するものもあつた。

エーゲア海の都市は東洋よりも高度の生活を營みしが、其の精神なり大體の特色は同様であつた。幸にしてこの状態は永續せず、富と奢侈とに惑溺せし者は愈々其の數を減じ、精力を浪費して最早や周圍の未開人民に對抗して其の都市を防禦する能はざるに至つた(註)。これは埃及が外國の統治を受け、野人のカルデア人がバビロニアを蹂躪せしとほゞ同時代であつた。古代世界は内部の腐敗により野蠻状態に墮落しつゝ、あつた。

(註) この衰微の原因としてドーリア人の移住を餘りに力説してはならぬ。ドーリア人の接觸せざりし同種の文明も亦等しくアツチカに於ても衰微した。一般に征服者の破壊的行動は隣國人の猜疑心によるよりも輕微である。ミケーネ宮殿の焼失は隣接都市との戦争、國內の革命、時には偶發の事件によると言つ

てよい。その大原因は國內の廢頽であつて、これは全世界の文明に影響を及ぼしたのである。

第八章 植民の第一期・叙事詩(ホーマー)時代

第一款 植民の第一期(約前1500)・ヘレネス種族

第五節 エオリア人 ヘレネスは移動を續けて海岸に達するや、直ちに附近の島嶼に渡つた。彼等が初期の植民をエーゲア地方に行ひし前後は、尙ほミケーネ時代の首尾とほぼ一致する。吾人は彼等の主なる植民地を地理的の順序により北方より南方へ一瞥しよう。

植民者はテッサリーより廣き海上を横斷してレスボスに達し、ここにミチレーネ Mytilene 其の他の都市を建設し、更に小亞細亞大陸に渡り、レスボスの南に至る沿岸狹小の土地を占領した。この大陸地方はエオリス Aeolis にして住民を、エオリア人 Aeolians と稱す。エオリス・レスボス・テッサリーの大部及びボエオチアにては、幾分の相違あるも同一の言語が行はれて居た。されば吾人はすべて此等地方の人民をエオリア人と稱する。然しエオリア種族と稱する場合には、テッサリーよりの植民者と共に、希臘の他の部分より加はりし人民と、これ等の移住民と土人と混和せしものをも含むことを記憶せねばならぬ。血統は植民地にては本土に於けるよりも著しく混じた、この事實はエーゲア海方面に植民せし他の希臘種族に就ても同様である。

第九節 イオニア人 斯る間にアツチカよりの移住民はシクラードス群島を占有しつつあつた。此等の中デロス・パロスの二島に就ては既にこれを述べた。パロスの近くにナクソス *Naxos* があつた。やがて政治的に重要なものとなつた。彼等はシクラードス群島の彼方、亞細亞の沿岸に近きサモス *Samos*、キオス *Chios* と、最後に其の附近の沿岸イオニア *Ionia* として知られし土地を占有した。古代希臘の歴史家(註)は言ふ、『吾人の知るすべての人類のうち、イオニア人は幸にして氣候・季節の最も適合せる位置に其の都市を建設した』と。其の土地は亦著しく肥沃であつた。最大の都市ミレトス *Miletus* は商工業・知的生活の中心であり、其の建設後數百年間ヘレネス文明の指導者たる地位にあつた。一般的の廣き意味に於てイオニア人とはイオニアの住民のみならず、諸島嶼とアツチカの同族をも含んでゐる。斯くてイオニア種族はエオリア人の南、エーゲア海の中央部と沿岸とにその居を占めてゐた。

(註) ヘロドタス第一卷第一四二節 *Herodotus, i, 142*.

第十節 ドーリア人 エオリア人とイオニア人とがエーゲア海に發展しつつある時、ドーリア人はペロポネサスより南シクラードス群島のメロス *Melos* テラ *Thera* に移住し、又クリートの一部を征服した。當時のクリート島民は種族と言語の混合せるものであつた。詩人ホーマー(註一)はこれを記して言ふ、『黒葡萄酒の海の唯なかにクリートと呼ぶ土地あり、美しく豊かに、海水を繞らし、

人口多く、九十の都市あり。すべての人は同じ言語を用ゐず、國語の混亂あり。ここにアケーア人住み、また心驕れる土人のクリート人あり、其處にシドニア人 *Cydonians* あり、椰子振るドーリア人あり、人のよきペラスチア人 *Pelasgians* あり。』ドーリア人は更に進んでロードとこれに接近せる小亞細亞の沿岸に移住した。斯くしてドーリア種族はエーゲア海の沿岸・島嶼の最南部を占有するに至つた。エオリア人、イオニア人及びドーリア人は、初期希臘史に於ける最も有名なる三種族であつた。

此の時期はアルカチア人のキプロス植民(約紀元前1000)を以て終りを告げる(註二)。

(註一) オデッセイ第一九篇一七〇以下 *Odyssey, xix, 170 ff.*

(註二) アルカチア人と其の植民者とは合して第四の種族アルカチア・キプロス人となる。叙述の完全を期する爲めに、ここに第五、第六の種族をも述べようと思ふ。(五)所謂北西希臘人にしてエピルス、エトリア、及びその地方の他の諸國、並びに北部ペロポネサスのアケーアとに占據するもの、及び(六)北西ペロポネサスのエレイア人 *Eleians* とある。この區分は其の使用する言語に本づく。

第二款 叙事詩(ホーマー)時代

(約前1000—700)

第五章

史料・ホーマー 叙事詩とは實在或は神話の英雄の功業を讚美叙述した長詩である(註)。

第八章 植民の第一期・叙事詩(ホーマー)時代

吾人は今尙ほヘレネスの二大叙事詩イリアッド *Iliad* とオデッセイ *Odyssey* を繙いて感興を覺ゆる。此等は單純・優美にして興味に充ち、叙事詩として他に比類なきものである。傳説によれば著者は盲目の老詩人ホーマー *Homer* にして、彼は其の美しき詩句を熱心に傾聴せる聽衆に誦しつつ、都市より都市へ漂泊せしといふ。彼の偉大なる名聲は七都市をして各彼の誕生地を有することを誇とせし程である。イリアッドは希臘人のトロイ戦争に關する物語を述べ、オデッセイはトロイ戦争の歸途英雄オデッセウス *Odysseus* の漂泊を傳へて居る。此等の物語に就ては尙ほ次章の神話に關する説明のうちに述べる。

(註)

バビロニア人は叙事詩に於ては希臘人よりも先驅者である(第三節)

第九節

ホーマーの詩の歴史的價值 此等の詩に現はれる宮殿と其の家具・裝飾及び美麗なる金細工等の叙述は、ミケーネ時代の實際の遺跡遺物と一致して居る。従つてホーマーは此等の時代にも尙ほ大家族の相續財産として存在せしに相違ない。然しホーマー時代の生活は、ミケーネ時代よりも更に進歩せしことを證明する他の特徴がある。例へばホーマーは鐵材の使用を知つて居た。然るにミケーネ時代は鐵材の使用に先だつ青銅時代である。尙ほその國土は相違してゐる。ホーマーはイオニアに住み古イオニアの方言を以て詩を作つた。されば彼の時代はイオニア植民後であ

る。彼の物語は恐らく過去の偉業に關する若干の傳説を含む神話なりとするも、其の描ける風俗習慣は彼の時代と國土とのそれである。此の時代のイオニアの生活はミケーネの生活よりも進展し、更に新種族と新環境との刺戟によつて新鮮味を加へて居た。

第十節

イオニア人の社會生活(前1000—700)

ホーマー時代のイオニア人の中には家族と血族とを神

聖視し、竈を祭壇とする『家庭』のゼウス *Zeus* の保護の下にあつた。父子・兄弟・従兄弟は血統・宗教の二重の結合により、危険に際しては互に援助を與へた。國家は未だ市民の生命を保障するに至らざりし故である。ゼウスは旅客に親切なれと命じた。彼等を歓迎する詞に、『賓客よ、よくぞ來ませし、吾等と款待を共にせよ。これより後、食事を取り給ふ時、何を求むるかを吾等に告げ給へ』(註)と。懇切・肉親の愛・婦人の自由・家庭と社會生活との優雅なる習俗は、暗黒面を戰爭に暴露する時代にあつて最も稱讚すべき特色であつた。當時は都市を焚掠し捕虜を殺し、婦人小兒を奴隸となし、海賊は尊敬され、弱きもの家なきものは何等の保護を受け得ざりし時代である。

(註)

オデッセイ第一篇一二三以下 *Odyssey*, I, 123f.

第十一節

財産・勞働

地主は平和の時代には奴隸を使役し、果樹園・葡萄畑を植ゑ、大麥を蒔き家畜を飼育し、生活の必需品をこれ等のものに仰ぐ。熟練勞働者の數は少く、従つて日常生活の必需品は、一切家庭に於て製作せねばならなかつた。國王も王妃も奴隸と共に勞働した。當時貨幣尙ほ

行はれず、生産品は物々を以て交換し、家畜・青銅・鐵・其他の金屬を以て價值を計算した。フェニキアの商人は東洋の高價品を供給せしも、イオニア人は間もなく自ら船舶を建造して貿易を開始し、フェニキアの船舶を希臘の海洋より驅逐するに至つた。

第九節 政治 平民は田園に勞働し、或は城壁・家屋・船舶の建造に従事し、貴族は都市にあつて富と權威とを擅にした。大地主は會議に列席し國事に關して國王に忠告を與へ援助すると共に、又自己の階級の利益を計つた。貴族の首席に過ぎざる國王は將軍にして祭司・裁判官であつた。軍隊を指揮し都市の安全を神々に祈り、民事の訴訟を判決した。而も平和を維持し殺傷を豫防する能はず、國家内の家族をして互に相闘争するが儘に放任した。國王の權力は決して絶對的のものではなかつた。國王は貴族會議の希望を尊重せしのみならず、すべて重大なる計畫は自由民の會議に附議した。自由民の會議は投票を用はず、單に歡聲を發して承認を表し沈黙を以て不賛成を示した。彼等は貴族出身のものよりも國王に對する勢力は遙かに劣つてゐた(註)。

(註) ホーマー時代をも含む宗教に關しては次章にこれを叙述する。

第九章 宗教・神話

第一〇節 未來生活 希臘人が初めて自己省察を試みし時、彼等は眠りと死とを説明せんとした。

人は眠りのうちに憩ひつつ、尙ほ第二の我即ち肉體の影象は平素の義務に服し、或は夢の生活に不思議なる冒險を経験しつつあるものと想像した。彼等に取つて死は永遠の眠りである。肉體は朽つるも第二の我即ち靈魂は墓穴に留まりて飲食し、在りし日の道具を使用し驕奢を恣にする。死者は血族が彼に飲食を供することを豫期し、この義務を怠るものは嚴重に罰する。然し適時適當なる儀式を以て供物を獻ぐる近親には保護と祝福とを與へる。此等の理由より希臘人は引續き死者に犠牲を獻げ、基督教の弘通後に及んだ(註)。

(註) 根本的に希臘人の思想は埃及人のそれに似てゐる(第二節)。然し全く別個の發達を遂げたのであつた。

時の推移につれ希臘人は神ヘーヅ Hades の領域たる地下を想像し始めた。こゝにすべての靈魂は肉體を去りし後、悅樂なく夢の如く永遠の時を過さねばならぬ。神の舟人シャロン Charon はスチックスの川を越えて靈魂を死の國に送る。こゝに三頭の番犬セルベラス Cerberus は門を守りて、入るは拒まざるも去るを許さぬ。更に後代に至つて審判の思想が發生した、地下にある三判官は靈魂の肉體時代の行動により賞を頌ち刑を下した。

第二〇節 神々 希臘人は種族として尙ほ幼稚なりし時代に、獨り自己省察を試みしのみならず、又其の生活せる世界に就ても思索したのである。彼等は自然力を崇拜した。彼等はすべて此等の神

神が人類と等しく、唯その異なる點は偉大なる體軀と力と不死なるにあると漸次信ずるに至つた。ホーマーは屢々神が人類のため戰場に負傷せしことを記して居る。『然り、神々は遠き外國の人に似てあらゆる風采をなし、人類の邪惡と正義とを見つつ都市を遍歴する』(註)。神々は唯巨大なる人間として善と惡との性質を備へてゐた。そして宗教の感化は道德的なるあり又不道德なるものもあつた。

(註) オデッセイ第一七篇四八五節以下 *Odyssey*, xvii. 485 ff.

第二〇節 オリムボスの十二神

最も偉大なる神は「神と人との父」ゼウスであつた。父クロノス Cronos を王位より退け、すべての反對を鎮めし後彼は最高の權力を以て全世界に君臨した。弟ポセイドン Poseidon には海洋を、更に又弟ヘーヅには地下を領域として與へ、自らは天と地とを支配した。雪を戴くオリムボス(註)の頂は彼等の兄弟姉妹・子女たちの棲所であつた。大オリムボス會議は彼を含めて十二神より成つてゐた。それは

ゼウス(神と人との父)

ポセイドン(海洋神)

アレス(Ares 戰の神)

アポロ(Apollo 男性美の理想、光と弓矢と音樂・醫術)

ヘラ(Hera ゼウスの妻・婦人と結婚の守護神)

パラス・アテナ(Pallas Athena ゼウスの額より大人の姿をなして甲冑をつけ出て來りしもの、戰と智慧、特に熟練勞動の保護神)

(神)

ヘルメス(Hermes 神々の使者、商業の保護神)

ヘフェスタス(Hephaestus 火と爐の神)

アフロダイト(Aphrodite 愛と美の女神)

アルテミス(Artemis 狩獵の女神、温良なる女性、少女を保護す)

ヘスチア(Hestia 家庭の竈と住居の女神)

デメター(Demeter 農業と文明の女神)

である。多くの小神は此等の大神に附隨す、更に多くの神々は地上・海中・空中に住するもオリムボスに近づくを得ぬ。

(註) 第七一節

第二一節 デルフキのアポロの神託

希臘人は神々のうちには其の意思表示をなし、未來を人類に豫言するものありと信じた。神意の啓示せらるる方法を神託 Oracle と言ふ。神託とは又神の詞を意味する。神託の顯示ありしヘラスの最も有名なる場所は、デルフキのアポロの神殿であつた。其の殿堂はバルナサス山の南麓に當り、溪谿の壯麗なる風光のうちに屹立してゐる(註)。殿堂の内部龜裂せる地面より發する蒸氣は、その上に置かれた三脚臺に坐するアポロの巫女ピシヤ Pythia を無我の境に導き、質問に應答する。近く侍立せる祭司は其の言葉を筆録し、アポロを通して人類に與へられたるゼウスの意思を質問者に傳へる。神託は漸次勢力を附近に及ぼし國民的のものたるに至

つた。次でアポロは全ヘラスのために宗教道徳律の説明者となり、屢々政治問題にも與り曆法を監督し、植民の嚮導者・保護者となつた。個人も國家も共にアポロの忠言を公私の事件に求めた。彼の恩寵を被りしものは種々の贈與を獻け、神庫は爲めに財寶を以て充滿するに至つた。神託の眞の作者たるデルフキの祭司は、機宜の忠言を與ふるために最近の事件を知悉して居た。而もアポロの信用を保持するに必要な場合には二重の意味ある豫言をなし、いづれの場合にも適合するを得る様にした(註二)。道徳問題に關する神託は常に健全なる感化を及ぼし、また正義中庸の行爲をすすめた。然し神託は屢々贈賄によつて左右され、時には政治家の計畫に援助を與へた。而も希臘人の波斯に對する獨立戰爭には其の非愛國的なる答辯により人氣を喪ふに至つた。

(註一) 第五節

(註二) 答辯の曖昧なる一例は第一四三節を見よ。

第二四節 デルフキの隣保同盟

アポロの神殿と財産とは十二族の同盟に監理されて居た。元來この同盟國はデルフキ附近——テッサリー及び中部希臘——に限られてゐたが、夫等の部族のあるものはやがて膨脹發展し、終に遠隔の都市をも包括するに至つた。此の種の宗教同盟を隣保同盟 Amphictyony と言ふ。同盟都市は一定の時期神殿に集まり神の祝祭を行ふ。各部族の代表者は神アポロと其の禮拜とに關して評議を爲す。この代表者の集會は隣保同盟會議であつた。同盟都市は時

に戰を交へ、また外國の侵寇に當り同盟都市を援助することなかりしも、一種の戰爭法規を認めてゐた。例へば同盟都市を破壊し或は包圍中に水路を斷つことを禁じ、また神を瀆し或は神の財産に損害を與へしものは、あらゆる手段を以てこれを罰する。これ等の刑罰を『神聖戰爭』と稱す。

其の他の餘り有名ならざる隣保同盟に就ては、ここにこれを敘述する必要を見ない。

第二五節 國民的大競技

更に他の宗教的制度は國民的大競技である。國民的大競技はオリムピア・ネメア Nemea・コリント・デルフキの四個所に夫々其の地の主神を祝福して開催せられた(註一)。就中オリムピア Olympia の競技は最も壯觀を極め、四年毎にすべての希臘人は地中海の沿岸よりエリスのアルフェウス河岸に集まり競技を觀覽した。この競技の行はるる月は神聖なる季節として、其の期間全ヘラスは平和を保持せねばならなかつた。群集はオリムピアの大神ゼウスの神域を中心し、幕舎を作りて起居し、『商人は小屋を掛け、兩替商は其の店舗を開き、あらゆる階級の藝術家は聽衆と賞讃者とを集めんとし、群衆は競技者の練習に列席し、或は競技に出場する馬及び戰車の演習を賞讃した。傳使は最近希臘都市の間に締結された軍事・通商條約を廣く告げ知らせた』(註二)。

(註一) デルフキはアポロ、コリントはポセイドン、ネメア及びオリムピアはゼウスが主神である。

(註二) ガードナー著『希臘史新講』二七五頁以下 P. Gardner, New Chapters in Greek History, 275 f.

競技に出場する者は善良なる品性を備へ、宗教的身分を有し、充分競技の訓練を経たる希臘人で

なければならぬ。審判員は出場選手の資格を判定し、最後に勝利の月桂冠を與へる。競技の種類は徒歩競争・跳躍・圓盤投・槍投・角技・拳闘・競馬及び戰車競争であつた。斯る競技は藝術を促進し、希臘の彫刻家は最善のモデルを競技者のうちに發見した。此等の國民的大競技は又商業・國內の平和と統一とを育成した(註)。

(註) 此等の祝祭を本としてやがて曆法の發達を見るに至つた。新曆の紀元元年は西曆紀元前七六六年である。祝祭と祝祭との期間(四年)をオリムピアード Olympiad といふ。オリムピアードは紀元前七六六年に起り、其の以後はこれを基本として計算する。然し最初の年は全く任意的のものにして、後世の希臘歴史家の著述を讀み、或は古代希臘に關する近世の著述を理解する參考にとゞまる。

第10節 歴史的な神話・希臘人の古代史觀 希臘人は神話を以て自然界並びに其の種族の起源及び初期の歴史を説明してゐる。神話のうちには疑もなく傳説的に史實の中樞をなすものがある。然し其の主要價値は希臘人の歴史觀に存する。クリート文字は最早使用せられず。希臘人は恐らくこれを習得せず終つたであらう。而も紀元前九〇〇年後までフェニキアの音標文字を利用するに至らなかつた。結局何等の記録を有せざる彼等は自由に活潑なる想像力を働かし、遠き過去の充分ならざる傳説を修正しこれを擴充した。斯くして彼等の發明せる物語は單に希臘人の精神力の表現たるのみならず、文學にも重要な地位を占め、屢々藝術に表現せらるるを以てこれを知り置く必要がある。

初期の神話は多く紀元前七〇〇年頃に出でし詩人ヘシオド Hesiod のテオゴニー Theogony の中に記されてゐる。テオゴニーとは神々の系圖を意味する。彼は此の著作に於て神々の出生と其の初期の相互關係とを系統的に説明せんとしてゐる。そのうちには人類の起源とヘレネス種族の發祥と其の分派とを記してゐる。ホーマー・ヘシオド・其の他の資料によりここに主なる歴史的な神話を叙述する(註)。

(註) ここに述ぶる神話は細緻なる研究を目的とするものではない。然し神話の價値を認め宗教の徹底的研究を試むるは大切なることである。

第10節 ヘレンとその子等 ヘレネスの共同の祖先はヘレンであつた。ヘレンはエオルス Aeolus

Dorus クスタス Xuthus の三兒を有し、最後のクスタスにアケウス Achaeus とイオン Ion とが生れた。エオルス、ドルス、アケウス、イオンはヘレネスの四種族、エオリヤ人、ドーリア人、アケーヤ人、イオニア人の國王となつた——これ疑もなく神話に現はれし國祖の最初の形態である。ここに言ふアケーヤ人とはドーリア人の移住前ペロポネサスに住みし人民である。希臘人はドーリア人侵入者が、彼等を北部ペロポネサスに壓迫したと信じてゐる。吾人は歴史時代に至り、アケーヤ國家をこの地に見る。他の種族の地位は既に述べた(註)。

(註) 神話の分け方は全ヘレネスを包含して居ないから完全でない。参照第四節註三。

第二八節 アルゴリスの英雄 希臘人は又その發明せる神話を以て、都市の起源と初期の發達とを説明して居る。彼等は遠き昔に神々の子孫或はその近親に當る英雄が地上に生存して居たと想像した。人類よりも身の丈高く、強健勇敢なる英雄は、野蠻なる獸類盜賊より社會を保護し、戦時には偉功を奏した。彼等の或ものは都市を初め、種族或は國民の祖先となつた。すべての種族・部族・都市・村落には夫々其の英雄がある。吾人はそのうち國民的に重要な若干のものに注意するであらう。

アルゴリスのペルセウス *Perseus* は強健勇敢なる英雄であつた。當時ゴルゴン *Gorgons* といふ巨怪なる婦人が生息して居た。彼女たちの頭髮は苦悶せる蛇身であつた。このゴルゴンを目のあたり見たるものは、何人も立どころに化石せしといふ。ペルセウスは此の怪物中最も兇惡なるメヅサ *Medusa* を殺戮すべき命を受け、非常なる苦心と注意とを以て搜索の後、彼女を發見し其の首を斬つた。彼は尙ほ多くの危険に遭遇したが、其の力と勇氣とによりすべてに打克つた。

ペルセウスの孫女アルクメネ *Alcmene* はテーベに亡命中、ゼウスの子を生みヘラクレス *Heracles* と命名した。彼は英雄中最も偉大なるものとなつた。ゼウスの意はこの愛兒をして附近をすべて統治せしむるにあつた。然るに嫉妬深きヘラ(註)は、ミケーネに君臨せる臆病なるヘラクレスの従兄

弟に命じ、彼を怪物退治の旅に送り出した。卑怯なる君主は彼に十二の大事業を命じた。そはすべて危険を伴ひ、また巨人の力を必要とするものであつた。ヘラクレスは怪物を求めてこれを殺戮するため、古代世界の殆んどすべてに互り漂浪せねばならなかつた。その上彼は番犬セルベラス *Cerberus* を誘き出すため、死者の家宅にさへ下つて行つた。然し彼が其の光榮ある勤勞の生涯を終りし時、ゼウスは彼をオリムポスに呼び戻し、永久に不死の神々の間に歡喜の生活を送らしめた。斯くして徳は其の報ひを受けた。

(註) ゼウスとヘラとに就ては第一〇二節を見よ。

第二九節 ヘラクレス子孫の歸國 ヘラクレスの子孫は三代の間、アルゴス王位の相續權を奪はれ亡命のうちに送つた。次で當時中部希臘の山嶽重疊たる小國ドーリスのドーリア人は、ヘラクレスの曾孫テメナス *Themennus* クレスフォンテス *Cresphontes* 及びアリストデマス *Aristodemus* を嚮導とし、彼等に率ゐられてペロポネサスに侵入した。彼等は一戦の後全半島を征服し、エリスをエトリア人の嚮導者に與へ、テメナスはアルゴスを王國として受け、クレスフォンテスは豊饒なるメッセニアの地を得、アリストデマスは征途半にして死し、其の雙生兒ユウリステネス *Eurysthenes* とプロクレス *Procles* とは、ラコニア最初の國王となつた。爾來ラコニアは常に二王を載ぎ、一はユウリステネスの家系より、他はプロクレスの家系より出でた(註)。斯くしてペロポネサスにはド

ーリア種族の三大國家が建設され、何れもヘラクレス子孫の治むる所となつた。

(註) 第二三節

第二節 テーベの英雄

希臘の他の大都市たるテーベの神話的英雄に、カドマス Cadmus があつた——フェニキアに生れ、ゼウスの奪ひ去りし妹ユウロバ Europa を求めて西方に放浪した。アポロの命によりて彼は其の搜索を放棄し、ボエオチアにテーベ市を建設した。カドマスの子孫は數代の後、神々の呪咀により怖ろしき罪を犯し、殆んど其の一族は滅びた。オエヂプス Oedipus は其の母とは知らずに、女王ジヨカस्ता Jocasta と結婚した。彼女は其の夫の身分を知りて縊死を遂げ、國王オエヂプスはこの不幸に其の兩眼を泣きつぶし、其の後冷酷なる臣下の爲めに追放せられた。怒れる神々の目的に適はんが爲め、オエヂプスの子エテオクレス Eteocles とポリネイセス Polynices とは其の町に留まり、更に激しく相争つた。ポリネイセスは亡命してアルゴスの王アドラスタス Adrastus の許に難を避けた。王は其の國の勇敢なる英雄を集め彼の復位を助けしめた。七人の族長は其の部下を率ゐてテーベに現はれ、『七人七門に向ひ同數の敵に當つた』(註)。住民は牙城より城壁の周圍に唯輝ける楯と槍の他に何ものをも見ず、敵の叫び聲と武器の觸れ合ふ音より外に何ものをも聞かなかつた。既にして先登にあつた攻撃者が城壁に立つて勝利を叫ばんとした時、ゼウスは雷火を送つてこれを打ち仆した。二人の兄弟は何れもこの一戦に仆れた。戦の波は再び靜まり、

テーベは自由を得て舞蹈と神々への供物を以て其の救済を祝した。

(註) ソフォクレスの『アンチホーネ』Sophocles, Antigone.

第二節 アテネの英雄

アテネにも亦英雄が居つた。半人半蛇のセクロプス Cecrops は、アクロポリス Acropolis にある都市の創立者・最初の國王であつた。この地は海岸を距る四哩のところにある峻嶺であつた(註)。彼は自身の名を以てこの植民地をセクロピアと命じた。彼の治世中アテナとポセイドンとはセクロピアの所有を争ひ、女神アテネの勝利を得るや彼女はその名を以つてその都市をアテネ・住民をアテネ人と名づけ、爾來アクロポリスに留まりアテネ國家の主神・守護神となつた。

(註) アクロポリスとは要塞となれる丘陵の頂上を言ふ。希臘の最も有名なるアクロポリスはアテネのそれである。

其の後久しくして最も有名なるアテネの英雄テセウス Theseus が出た。彼は力と勇氣とに於てヘラクレスに次ぐ勇士であつた。彼は青年時代盜賊と怪物とを退治して名聲を馳せた。此の時までアテネ人は海上に威力を揮ひしクリート王ミノス Minos に犠牲の人を送つて居た。彼等は九年毎に七名の青年男女を、迷宮に住む怪牛ミノトール Minotaur の犠牲に獻けた。而もテセウスはこの悲しむべき使節の一行に加はりクノススに赴きて怪物を殺戮せし後、ミノスの女アリアドネ Ariadne の

與へし糸を頼りに九十九折の迷宮より遁れ出でた。彼はアテネに歸國せし後其の王となり、アツチカにあるすべての都市を結合して一大國家を組織した。

第二節 アルゴ船の航海 各都市の英雄は屢々一致協力して國民的事業に従事した。その遠征には金羊皮を求めたアルゴ船の航海がある。テッサリーのイオルコス Iolcos の王嗣ヂエソン Jason は、ペリオン山の洞穴に亡命しつつ成人した。彼は二十歳の時イオルコスに歸り、父の異母弟に當る王ペリアス Pelias に自身の權利を要求した。老獯なる國王は若しヂエソンがコルクス Colchis より、數年前二王子を奪ひ去りし牡羊の金皮を持つて歸つて來るなれば、すべてのものを與へる約束をした。そはこの羊皮が手に入れば、神々は當時猖獗を極めた疫病を鎮めると思つたからである。ヂエソンの求めに應じて全希臘の英雄は、コルクスへ向ふアルゴ Argo 船に乗り組む爲めに集まつた。五十のアルゴノート Argonauts —— アルゴ船の乗組員 —— は橈を取つて波を蹴り、『敏速に船を動かして倦まず急ぎ進んだ』(註一)。彼等は多くの困難を沿岸の土人より受けつつ進んだ。

英雄等はコルクスに達した。この地の國王は彼等に若しヂエソンが火を吐く牡牛を以て土地の一部を耕し、これに龍の齒を蒔くならば金羊皮を與へると約束した。國王の女にして巫女のメデア Medea は、如何せばヂエソンが被害なくこれを成就すべきかを英雄たちに教へた。そして國王が其の約束を守らざるに及び、彼女はヂエソンを助けて金羊皮の懸れる洞穴よりこれを盗み取り、彼に従つて船に乗じ其の妻となつた。其の歸途アルゴ船一行は世界の海洋を彼方此方へと漂泊した。希臘人は此の神話的航海を題目とし、多くの歌謠と戯曲とを作つた(註二)。

(註一) ピンダー第四篇 Pindar, Pythian Ode, iv.

(註二) 例ぐピンダーの Fourth Pythian Ode 及びユウッリヤデス Euripides の Medea.

第二節 トロイ戦争

英雄たちの事業の中、最も有名なるはトロイ戦争である。ラセデモンの王メネラウス Menelaus の妻ヘレンは、ヘラスの最も才色豊かなる婦人であつた。多くの希臘國王は彼女と結婚することを希望してゐた。然しメネラウスが戀の勝利者となつた時、彼等は彼とヘレンとを尊重する誓約をした。偶まトロイの王プライアムの子パリスはメネラウスを訪れ、彼の信賴を利用してヘレンを誘拐しトロイに携へ歸つた。プライアムが彼女の返還を拒絶するや、ヘラスの國王等は其の誓約を奉じ、メネラウスと力を協せ武力を以ても彼女を奪回せんと結束した。ボエオチアの海岸アウリス Aulis の港に集まりし彼等の船舶は、其の數殆んど一千二百に達し、アルゴス即ちミケーネの國王にして、メネラウスの弟アガメムノン Agamemnon を其の指揮者に載いた。

一行はトロイ附近に上陸し九年間その市を圍み、土地と村落とを荒掠した。次で最も勇敢にして最も敵の恐怖せし英雄アキレス Achilles は、捕虜とせし婦人をアガメムノンと争つた。希臘人は町を占領せし時の戦利品の一部として彼女をアキレスに與へた、然るにアガメムノンは不法にも彼女

を奪ひ去つた。憤怒の餘り幕營に退きし勇猛なる青年アキレスは、この上戦争に従事することを肯へんじなかつた。由てゼウスはアキレスの母に對する好意としてトロイ軍に勝利を與へ、尙ほ多くの災害を希臘人に下し、遂にアガメムノンの誤れる行爲を認めしめ、これを充分に償ふに至らしめた。而もアキレスを再び戰場に赴かしめしものは、彼の受けし賠償にあらずして、彼の愛する戦友パトロクルス Patroclus がトロイの最も偉大なる英雄ヘクトールに殺されしことである。アキレスはヘフェスタス(註)の鑄造せし甲冑を着け、戦車に乗つて駿馬に曳かせた。彼は切齒してトロイ人に對ひ、炯々たる眼光は炬火の如く、其の楯の輝きは天に達した。彼はトロイの兵士を羊群の如くに驅逐し、多くの有名なる英雄を親しく殺戮し、終に英雄ヘクトールを無残にも殺害した。希臘人は其の屍體を寸斷し、非情のアキレスはこれを戦車の車輪につけて曳き廻した。

其の後間もなくアキレスも殺された。然し機略に富むイタカ Ithaca の王オデッセウスは、策略を以つてトロイの占領を案出した。彼は希臘人に大なる木馬を造らしめ、そのうちに百人の勇士を匿し、次いでトロイに内通せしシノン Sinon をして、この木馬を都市に引き入れアテナに獻ぐれば、希臘人の領土は彼等の掌中に歸するであらうと伴り説かしめた。夜になつて木馬は城内に引き込まれた。勇士たちは忽ち木馬より出でて城外の味方に門を開いた。希臘人は次でこの都市を燒きて奪掠を行ひ、男子は殺し婦人小兒は捕虜とした。

(註) 第二三節

第二四節 トロイよりの歸國 トロイの破毀は希臘人苦惱の終りではなかつた。其の歸途彼等は多くの困難に遭遇し、あるものは死にさへ見舞はれた。オデッセウスはポセイドンの怒に觸れ、海上を彼方此方に彷徨ひ、多くの國土と人民とを訪れ、激しき勤勞と不思議なる冒險とを経験した。終に本國に達した彼は、貞節なる妻ペネローペ Penelope の愛を求めつ、彼の家に住し、其の財産を浪費しつつありし一群の貴族を殺害した。

第二五節 神話及び宗教の特質とその影響 希臘の神話と宗教とは、其の初期の形式では、かの東洋人の間に見る如き怪物及び畏怖すべき神々を扱つてゐる。而もやがて希臘人の思想は此等の問題につき精鍊され純化された。怪物はすべて殺され想像の彼方に投げ去られ、神々は其の恐怖を取り除かれた。彼等は超自然物に美しき形態と恩情なる精神とを賦與した——宗教的禮拜に適し藝術的靈感を受くるに足るものとなつた。犠牲は神の赫怒を鎮むる贈物でなく、神々と禮拜者とが共にする食事と考へらるるに至つた。神々と人類との關係は最早や恐怖にあらずして親密を基礎とするに至つた。この事實は更に社會・政治・藝術・科學の問題を解決するに當り、希臘人が毫も恐怖心を抱かざりしことを説明するものである。

第二章 都市國家と其の發達

第二節 家族とゲンス 希臘の家族は東洋のそれと異り一夫一婦制であつた。完全なる家庭は父母・小兒・奴隸より成つて居た。家族は獨り社會的的制度なるのみならず、又た宗教的のものであつた。アツチカにては家族はゼウスとアポロとの監督の下にあつた。斯る關係よりアポロを以て全アテネ人の共同の祖先なりと信じ、これを『祖宗』と稱した。

家族生活は別章(註二)にこれを叙述するであらう。本章に於ては其の一般的性質と、其の國家に對する關係だけを注意する必要がある。男子は成人して結婚すれば、新家族を創設すること尙ほ現在の歐米人に等しきものがあつた。そして近代世界に於ける如く、共同の祖先より發生せし家族はすべて相互の關係を喪ふ。而も彼等は時に其の關係を持続する。この場合には共通の祖先より出でし子孫は自らゲンス (Gens) (註三)と稱する團體を組織し、職員を置き共同の財産と寶物とを有する。ゲンスは各々一個若くは數多の守護神を有し、定日には祝祭を行ひ供物を獻ぐ。斯る場合に一族のものは宗教的社會的會合を行ふ。貴族は血統に重きを置き、その關係を持続するに都合よき地位にあつた。さればゲンスの大部分は彼等に限られた。

(註二) 第十八章第三項

昭和24年11月1日

一〇五—二〇二頁 終了



104/1111
104/1111
104/1111

膨脹發展の第二期に於て

注意すべき動機は人口過剰である。この現象は特にアケ

ア及びロクリスに於て顯著であつた。これ等の地方の人民は、全然農業と牧畜とによりて生活を營み、而も饒裕なる土地は多數の人口を支持することが困難である。人口の稠密となるにつれ、過剰の人民は植民地に溢れ出た。同様の動機は工業中心地にも存し、更に新しき動機がこれに加はつた。外國に貿易居留地を發見せんとする希望である。此の原因はコルクス、コリント、メガラ、ミレトス——すべて通商・製造工業の中心地に盛んであつた。

第三の動機は政治的不安である。希臘文明の進歩せる地方にては、貴族政治及び寡頭政治は(第二節)王政に代つた。國家は屢々内部の紛争に悩まされ、その施政は常に酷烈堪へ難きものであつた。政敵の壓迫排斥を受けし多數の人民は、遠隔の土地に運命の開拓地を求めた。これと同様有力なる動機は、冒險を愛し世界を見んとする希望である、これが富を求むる精神と結合した。

(註) 第八章第廿一、九四節

第三節 植民地の組織 都市國家は遠隔の地に植民地を計畫するに當り、先づデルフキのアポロの意思と承認とを求むる習慣があつた。其の允許を得ると、若干の貴族を「設立者」に任命し、この計畫を指導し、植民者に土地を分配し、政府の組織に當らせる。一般に母市は、附近の都市より參加を希望するものには、此の事業に加入することを許可する。設立者は新國家に於ける各人の地位

を定め、母市と同様の政府と宗教とを決定する。この點に就て、希臘の各都市はその市廳に聖爐を設け、こゝには恒久不斷の聖火の在ることを記憶する必要がある。此の聖爐は都市の宗教的中心として、都市設立者たる神と祖先とが、供物を受くる祭壇であつた。植民者は母市の聖爐より聖火を携へ、新植民地の聖爐にこれを移し、舊社會の宗教的生活は、新社會にそのまゝ繼承され、新家庭を營む爲めに外國に渡航せしものと雖も、常に母市の保護神の加護を受くる習慣であつた。

第三節 植民地と母市との關係 母市は出來得べくんば、引續き植民地を政治的に支配せんとした。然し概して周圍の事情により、これは實行されなかつた。植民者は他の希臘人と等しく、其の植民せる都市の完全なる獨立を欲し、然らざる場合には決して満足しなかつた。又た通常植民地は遠隔の地にあり、母市との交通は時間を必要とする。すべて此等の事情が累積して、母市の政治的支配を不可能ならしめた。されば植民地概しては政治的に獨立して居た。然し宗教的社會的には、母國と密接なる連絡があつた。新舊兩都市國家は常に互に通商貿易に従事し、屢々他の植民地の建設に協力し、危險に際しては相互に援助を與へた。かゝる道德的の結合は殆んど破壊される、ことがなかつた。

第三節 伊太利とシシリ島の植民地

伊太利は、小亞細亞と比し希臘半島より遠く隔たり、且つイオニア海はエーゲア海の如

せず、而も希臘人はエペイロト Epeiros の海岸より、

天には遙か伊太利の海岸を望見し得る。こゝに彼等は希臘本國よりも遙かに豊饒なる土地を發見した。吾人はこの地に於ける希臘植民地を、年代的よりも地理的に考察するであらう。

下部伊太利はこれを長靴の形に比することが出来る。其の踵に相當する個所に優れた港がある。大都市タレントム Tarentum はこゝに發達し、天惠的地位を以つて商業と富と文化とを以て有名となつた。この地は又た希臘文明を半島人に傳播するに與て力あつた。海岸線に沿つて靴の甲の方に轉すれば、シバリス Sybaris に達す、富と豪奢とを以て有名である。英語の Sybarite は、今尚ほ法外なる奢侈贅澤に耽溺する者に用ゐらる。更に南にクロトン Croton がある。有名なる運動家・醫師を出した。兩市共にアケーア人の植民地であつた。彼等は多年親交の後激しく争ひ、終にシバリスは亡びた(紀元前 510年)。更に南西にあるロクリ Locri は、母國ロクリスの名を藉りて命名せし植民地である、優越善美なる統治を以て有名なる都市であつた。ロクリは印度歐羅巴種族のうち、最初の成文法典を有せしものである(註)。半島の尖端を過ぎればレギウム Rhegium に至り、更に北すればナポリ灣に近きクメア Cumae に達する。クメアの重要なは、ローマ人がこゝに音標文字其他文化の基礎を得たることである。後世ナポリ市はこの灣に近く發達した。クメア、ナポリ、レギウム、其他西海岸にある植民地は、カルキヂック Chalchidic と稱す——ユウボエアのカルキス市の創設するところである。

シシリーにては、同じくカルキスがレギウムの對岸にメツセネ Messene を(註一)、東岸及び北岸にその他の植民地を創設した。シシリーに於ける最も重要な都市は、東岸にあるシラクユーズである。やがてそれは希臘人の最大都市となつた。其の『大港』は世界の海軍を碇泊せしむることを得る。人口と富とに次ぐものは、アクラガス Agragas(拉丁人のアグリゲンツム Agrigentum)であつた。この都市は海岸を距る二哩の丘上に建設され、殿堂・廻廊・住宅の美を誇り、同時に其の周圍には葡萄園を造り、橄欖樹が植ゑられた。詩人ピンダルはその華麗を賞讃して、この市を『シシリ一の眼』と稱した。タレンツム、シラクユーズ、アクラガスはドーリア人の植民地であつた。

(註一) パピロニア人は既に千二百年前に法典を有して居た(第三節)。ローマ人は更に二世紀後まで(第三六節)法典を有しなかつた。

(註二) もとザンクル Zancle と稱してゐたが、數年後メセニア(第四節)の植民により其の勢力を加へし後、メツセネと改稱するに至つた。

第三七節 西方植民の結果 シシリーは地味の豊饒なるため、其の富は間もなく遙かに母國を凌ぐに至つた。シシリー島の海岸の大部分は都市を以て圍繞されてゐた。ピンダルはこれを『牙城にて鏤めし華麗なる王冠』と稱した。然し希臘人はシシリーの西端を占有せるフェニキヤ人(註)のため、植民地圏の完成を妨げられて居た。

西方植民は紀元前七五〇年頃に始まり約二百年間繼續した。希臘人の伊太利にて占有せし土地は、拉丁名にてマグナ・グレシヤ Magna Graecia(『大ヘラス』)と呼ばれ、『西方ヘラス』 Western Hellas なる語は伊太利とシシリーとの植民地を含めて居た。西方ヘラスと母國希臘との關係は、現在のアメリカと歐羅巴との如きものであつた。政治的には截然區別されて居たけれども、商業的的關係は極めて密接であつた。西部希臘人は二方面より文明史上に重要な意味を有する。即ち(一)彼等は科學と藝術とに一大貢獻をなし、(二)ローマ人及び西方諸國民は、其の文化の大部分を彼等より受けしことである。

(註) 第四節

第三八節 カルキダイスの植民地 希臘人は伊太利とシシリーとに植民地を建設しつつ、他面又たエーゲア海の内部に、其の植民地を發展するに忙しかつた。彼等はエーゲア海の西北海岸より、海中に恰も三つの腕を突出せるが如き廣き半島を發見した。この地は土地起伏し、長き海岸線を有し、頗る本國に似てゐる。従つてこゝに植民せし希臘人は、土地に親しみを感じた。この地に集まりし多數の植民者は、銅・銀・金鑛を開發し、材木を伐り出して船舶を建造した。彼等の多數はカルキスより移住し、この地をカルキダイス Chalcidice と命名した。而もコリントの植民地ポチデア Potidaea も亦この地方の主要なる商業都市となつた。カルキダイス附近の内部に、マセドニア人が居た。彼

等は希臘の方言を語り、且つ實際希臘人であつた。然し彼等の住せる地方の地勢より見て、その文明は殆んど進歩の見るべきものがなかつた。彼等は附近の希臘植民地より、徐々に(註)ヘレネスの文化と進歩的思想とを吸収した。さればこの方面の希臘植民者はマケドニア人に對し、尙ほ西方に植民せし希臘人のローマ人に於けるが如き貢獻をなした。

(註) 彼等の状態は、紀元前第四世紀まで『ホーマー時代』の希臘人(第六一五節)と大差はない。

第三五節 黒海地方の植民地

希臘人の一部がカルキダイスの鑛山を開發しつゝ、ありし時、他の希臘人はヘレスポント Hellespont に向ひて漁業を行ひ、其の沿岸に植民地を建設し、尙ほヘレスポントを越え、プロポンチス Propontis の海岸を探險したのもあつた。プロポンチスとはボンツス Pontus 即ち黒海『前面』の海洋である。此の地方の植民地のうち、最も重要なものは小市メガラの建設したるビザンチウム Byzantium であつた。此の植民地はプロポンチスにあり、ボスポラス Bosphorus 海峽の入口に位置してゐる。雄大なる港灣を控へ、廣く諸方面と貿易を行ひ、其の建設後一千年、コンスタンチノーブルの名を以てローマ帝國の首府となつた。

希臘人はボスポラスを通過し、黒海の沿岸を探險してこゝに植民した。彼等はこの海洋を單にボンツス即ち海、或は普通ユージン Euxine 『異郷人を好遇する』と稱した。やがて黒海の沿岸は植民地によつて連絡され、ミントス市のみにてもこの地方に八十以上の植民地を建設したと言ふ。

の地が著しく希臘人を誘惑せしは、その豊富なる自然の物資による。コルクスは金を産し、南岸は銀・銅・鐵・材木を出し、北岸は家畜・皮革・穀物に富み、海洋は魚類が豊富であつた。希臘人は土人を奴隸として買収又は誘拐し去つた。されば黒海を中心とする地方は、希臘の人口稠密なる地方に勞働者・食物・貴金屬・工業の原料品を供給した。この地方はヘラスの知的生活に殆んど参加せず、其の文化も海岸に止まり深く内地に浸潤しなかつた。

第三六節 遠隔の植民地

上述せる植民地は、希臘より各方面に亘り、海洋を中心に行はれたものであつた。その他の植民地は、地中海の遠隔なる海岸地方に建設された。吾人は埃及史(註二)の研究に於て、後世のファラオがナイル河口に希臘人の移住を許可せしことを述べた。この植民地はナウクラチス Naucratis であつた。こゝにすべての希臘の商業都市は埃及政府の特許を得て倉庫を置き、埃及國王は青年をナウクラチスに送りて希臘語を學ばしめ、希臘國家と始めて同盟を締結した。熱心知識を求め、且つ旅行の時間と資力を有する希臘人は、バビロニア並びに埃及を訪れ、不思議なる古き國土を見、其の祭司より知識を得た。彼等は測量・星辰の運行・事件の記述に關する貴重な若干の知識を本國に傳へ、この僅小なる真理の援を藉りて彼等自身の發明的精神を發揮し、眞の科學と稱すべき最初のもの創造するに至つた。

イオニアのフォシス人は、全く反對のガリアの南岸に大船を寄せ、その海港にマツサリア(註三)

を建設した。彼等はこの植民地を中心に、海岸並びに内地に貿易居留地を作り、此等の植地民を通じて其の商業をガリア全體に擴張し、更にブリテン・バルト海に及ぼした。西班牙にては、希臘人に先つてこの半島を占有せるフェニキア人(註三)の反對を受けしと、其の土地の餘りに遠隔なるため、少數の植民地より建設し得なかつた。

(註一) 第二八節 (註二) 現在のマルセーユ (註三) 第四九節

第三節 ヘラスの膨脹 希臘人がその植民時代に、世界の至るところにかく植民地を擴張發展せしことは、尙ほ西歐諸國民の近代世界に於けるが如きものがあつた。希臘人は當時にあつて尙ほ現代の西歐人の如く、最高文明の代表者であり、教師であり、其の文化を到る所に傳へ、彼等の優越なる生命力と知力とを以て他を征服した。ヘラスは地中海と其の勢力範圍とを——埃及より「ヘラクレスの柱」即ちジブラルタル Gibraltar 海峽まで、南露西亞より阿弗利加の沙漠に至る一切の植民地を包含してゐた。此等の植民地は單一なる政府の支配せしものではなく、血統と言語と習慣と宗教とに於て一致結合されたのであつた。

第三章 スバルタの勃興とペロポネサス同盟 (紀元前約 七五〇—五〇〇)

第三節 スバルタとラコニア ペロポネサスの一國ラコニアについては、既に概略これを述べた(註一)。北方にアルカヂアの高地を控へ、東西は平行する山脈で塞がれて居る。全土はユウロウタス河の盆地にして、希臘中最も肥沃なる地方の一であり、西方の山脈(註二)は鐵鑛に富んで居る。されば住民の主なる職業は、農業と鐵器の製作とであつた。

ラコニアの都市スバルタは、ユウロウタスの右岸にあつた。普通の希臘都市の如く、丘上に位置して防備を施せるものとは異り、城壁もなく唯高地にある僅かの村落の聚團に過ぎなかつた。此の特色の由て來る所以は、以下述べるところによつて判明するであらう(註三)。

元來ラコニアには數個の都市國家があつた、然しスバルタのため他の都市は征服せられ、一個の獨立都市のみとなつた。スバルタの場合には、都市と國家とを區別する必要がある。スバルタは單なる都市である、その國家はラセデモン Lacedaemon と稱した。國民——ラセデモン人 Lacedaemonians——はスバルタ人と其の從屬民とより成つてゐた。

(註一) 第六節 (註二) テゲタス山脈 第七節 (註三) 第三八節

第三節 社會階級・ヘロット ラコニアでは奴隸の數は少かつた。勞働者の多數はヘロット He-lots 即ち國奴である。彼等は或はスバルタ人に征服せられてこの地位に墮ち、或は自由農民たりしものが壓制により農奴の境涯に入つたのである。ヘロットはスバルタ人の田圃を耕作し、一定の穀物・

葡萄酒・油・果物を主人に支拂つた。彼等は戦争に際しては輕裝兵として軍務に服し、勇氣と忠誠とを以て自由を與へられることもあつた。彼等は家族と共に其の耕作する田圃に住し、若くは村落に群居して居た。主人は彼等を釋放し、或は國外に估却する權利を有してゐなかつた。彼等は有利な條件の下に、自身の財産を獲得することさへ出來た。而も彼等の生活状態は苦しいものであつた。彼等が聰明になればなるだけ、スパルタ人は彼等を怖れて壓迫を加へた。スパルタ人は青年祕密糾察隊を組織してヘロットを監視し、國家社會に危険なりと見做したるものはすべてこれを國外に放逐した。

第三四節 ペリオシ Perioeci はヘロットとスパルタ人との中間の階級に位するものであつた。彼等はラコニア及びメッセニアの市府に住し、最初はすべて地方的の事件には獨立の行動を取つた。然るに時代の移るにつれ、スパルタは官吏を派遣し彼等を支配し、その自由を侵害した。彼等は戦税を拂ひ、ラセデモンの軍隊に重甲兵として勤務した。彼等が征服者より受けし土地は、最も礪确の瘠土であつた。従つて彼等の多數は、熟練せる工業と商業によつて生活を營んだ。スパルタ人自身は唯鐵錢を使用したるに過ぎぬ。従つてペリオシは其の事業に打撃を受けることはなかつた。彼等は不遇ではなかつた。されば彼等は數世紀間スパルタに忠誠を盡した。吾人の知る限りスパルタ人・ペリオシ・ヘロットは一様にドーリア族であり、彼等の間に種族的相違は發見されない。スパルタ人は、何故被征服者の一部を農奴とし、他を自由民としたか、その理由は判然しない。恐らくペリオシは征服者と有利なる條件を締結し得る程に、社會的に有力なる人民であつたのであらう。

第三五節 スパルタ人・男兒の訓練 スパルタ人はスパルタ市の住民であつた。彼等は甚しく自尊心に富み、排他的であつた。されば彼等はラコニア及びメッセニアの被征服者にスパルタ市民權を與へなかつた。而もスパルタ人の軍務に服し得るものは、八千乃至九千に過ぎず。これに對して被治者の數は幾倍に達するを以て、其の支配を持續するには常備軍を組織し、常に軍事的訓練を爲す必要があつた。スパルタ人は先づ健全なる身體を有せねばならぬ。父は男兒出生すれば、直ちにこれを同族の長老の許に携へ、若し長老等が、其の兒童の羸弱畸形にして爲すなしと裁定すれば、これを附近の山中に遺棄し、強健にして用ふべしとすればこれを養育する。七歳までスパルタの兒童は、母の監護の下に養はれ、次で國家は其の教育を擔當し、これを少年の仲間に加へ教練者に託す。彼等は、十二歳となればユウロウタスの岸より蘆を集めて寢床を作り、下着を著けず冬夏裸足の儘の生活を送らねばならぬ。彼等は毎年女神アルテミス Artemis の祭壇の前に立ち、鞭撻の下に其の忍耐力を示さねばならぬ。最も長くこれに耐へしものは英雄である。少年と青年と成年とは、隊伍と組合とを組織し、行軍・擬戰・體育を勵んだ。彼等は狩獵によつて敏捷・巧慧を教へられた。而も彼

等の精神的教養は、音楽と詩とに過ぎなかつた。彼等の教育目的は、全く勇敢・强健・訓練ある軍人を養成するにあつた。少女は少年と同じ訓練を受けた、唯幾分嚴格を缺くに過ぎなかつた。彼等も亦徒步競争・跳躍を行ひ、槍投・圓盤投を試みた。國家は斯る運動を獎勵した。そは婦人の體格は種族の肉體を完全に發達せしむるに必要なりと考へたからである。

第三節 成年 スパルタ人は廿歳に達すれば成年となる。彼等は戰場に出で、軍務に服さねばならぬ。由て『メス』Mess 即ち約十五人より成る戦友に加はり、戦時と平時とを問はず食事を共にする。メスの全員は、入團希望者の加入を許すべきや否やを、『侍者が水鉢を持ちて食卓を一周する間に、各自パン屑を投じて決定する。その青年を好むものは、パンの形を變へず水鉢に投じ、その加入を好まざる者は、指を以てパンを扁平にして投ずる。若し扁平のパンが一片にても水鉢の底にあれば、其の候補者は入團を拒絶せらる。かやうにして此等盟友の一團は、相互の協力一致を希望したのである』(註)。彼等は各一ヶ月分の大麥・葡萄酒・乾酪・無花果及び肉類と嗜好物とを購ふべき金錢を據出し、又た其の狩獵の獲物の一部を提供せねばならぬ。『黒き肉汁』はスパルタの御國風の食卓に缺ぐべからざるものであつて、長者がこれを調味した。成年は無論肉類を好んだ。斯く彼等の食事は簡素であつたが、營養は充分であつた。何人も戦争に際し、美食のため肥滿して役に立たぬものはなかつた。

(註) プルターク『リカルガス』傳 Plutarch, Lycourus

第三節 成年男女 スパルタ人は三十歳にして成年となり、民會に列席することが出来る。然し六十歳までは軍務及び軍事教練をやめなかつた。法律により結婚を強制されたが、家庭を有せず、其の家族を私的のものとして考へることは出来なかつた。すべて年長者は年少者を自己の子女と考へ、青年は又たすべての市民を、自己の父と等しくこれに服従し、尊敬することを教へられた。スパルタの男子が戦友と陣營にて食事を共にし、軍事教練に時を過す時、其の妻は娛樂と奢侈とに日を暮した。アリストートル(註)曰く、リカルガスは男子を訓練に服せしめたる後、女子をも従順ならしめんと試みたが、終に失敗し、女子はその欲するが儘に任せた。婦人はラコニアに於て財産を取得・相續するを得た。而も男子は商業に従事するを得ざりしを以て、やがて國土の三分の二は彼等の掌中に歸するに至つた。

(註) 希臘都市の政治に關する多くの著述をなしたる希臘哲學者。第三節

第三節 軍隊 ミケーネ時代及びホーマー時代には、貴族のみが重甲の精銳の武器とを備へることが出来た。多數の人民は、部族及び血族を以て團體を作り、武装も訓練も全く缺けて居た。戰場に於ては、一人の貴族は將に百人の平民に相當した。これ貴族が平民を輕蔑し、彼等に殆んど政權を與へざりし理由である。

而もホーマー時代に於てすら、戰士の多數を並列せしめんとする計畫ありしを見る。然し軍事方面の偉大なる改革者は、スパルタ人であつた。こゝに述ぶる改革の二大原因は、これを其の國土それ自體に求むることが出来る。(一)廣大豊饒なる平野に、他國よりも多くの土地所有者を擁し、彼等は充分なる富を有し、完全なる武器を備へ得たること。(二)ラコニアの鑛山は、刀槍の製作に必要な鐵を夥しく産したこと、當時防具の大部分は青銅で作られてゐた。而も更に重要な原因として、此等の資源を遺憾なく利用したる彼等の知識を忘れてはならぬ。この新計畫によつて組織された軍隊は、密集隊 Phalanx——即ち有力なる防具と長槍(註)とを備へたる武士の戦列にして、音樂につれて一個の單位として行動をする。此の戦列は若干の列伍より成つて居た。此の制度によりラセデモンは、世界の最大有力なる軍國となつた。斯くてスパルタは要塞を不必要とし、且つ其の政體にも重大なる影響を與へた。

(註) スパルタ人の武器は、ミケーネ人のそれに似たる全身を蔽ふ大楯・冑・脛當より成り、やがて重き等身大の楯の代りに小圓形の平楯と鎖鎧となつた。彼等は槍の他に劍を帯びてゐた。

第三節 政治組織 上述の如く、ペリオシの住せし町は、其の地方的事件に多少スパルタの干渉を受けたるも、主として自らこれを治めた。この點に於て彼等は程度こそ異れ、現代の自治體の如き獨立の地位を有して居た。これに反しスパルタ市の政治は、全然スパルタ人の手にあつた。彼等

は此等の町村を監督し、國家全體の事件に干與した。本來スパルタの政治組織は、ホーマーの記せしものに似て、唯一人の代りに二名の王があつた(註)。

二王間の斷えざる争鬭は、國王の地位を弱くした。斯くて政權は、多くの希臘國家の場合の如く、元老會 Councilの手に歸せずして、自由民の民會に落ちた。其の理由は、^{フアラックス}密集隊の採用に歸すべきである。ヘラスにては至る所、有力なる軍隊の組織者が、政治的支配權を握る人々である。ラセデモンの政治は、斯くて軍國的貴族政治となつた。蓋しスパルタの自由民は、すべて貴族にして臣下の住民を支配してゐたからである。而も民會は直接政治の實權を行はず、これを毎年選舉する五人の監督官 Ephors 會議に委ねた。監督官はやがて國家の首班に立ち、これに對して國王は、祭司及び將軍たるに過ぎざるに至つた。スパルタ人の中には特別なる家柄の貴族があり、彼等は二十八人の長老と、二人の國王とを以て元老會を代表してゐた。元老會は、國王と共に其の勢力を失墜した。

(註) 第一〇九節

貴族政治の梗概

一、長官 Magistrates

- 1、五人の監督官・毎年選舉・行政長官。
- 2、二人の國王・世襲終身・王家の出身者・祭司にして將軍・小事件の裁判官。

第一二章 スパルタの勃興とペロポネサス同盟

二、元老會 Council

1、貴族を代表する、六十歳及びそれ以上の廿八人の長老と、二人の國王とより成る。

2、權限 イ、民會に提出すべき法案の審議。

ロ、刑事事件の裁判。

三、民會 Assembly

1、徳望あるスパルタ人より成る。

2、權限 イ、長官及び元老會員 Councillors の選舉。

ロ、元老會より提出する法案の決定。

第二四節 リカルガスの神話

後代のスパルタ人は希臘人通有の方法(註)を以て、制度の起源をすべりリカルガスの發明に歸して説明してゐる。彼等の信ずるところによれば、リカルガスは甥に當る青年國王の攝政であつた。彼は國を擧げて暴力の行はる、を見、慨然としてクリートに行き、其の地の慣習と法律とを習得してこれをスパルタに招來した。彼は市民に新法を遵守尊重することを求め、世界の最も秩序ある人民とした。これはスパルタに行はれた物語である。他の希臘人は、アポロにこの名譽を與へんとして、リカルガスはデルフキに行き神託によつて其の法律を得たと言つてゐる。此の物語は更に續く、ラセデモン人は彼の死後彼のために殿堂を造り、こゝに彼を祭つて非常に尊敬したと。

スパルタ人の神に、リカルガスなるもの、存せしことは事實である。然し初期の希臘人は、偉人を神とすることはなかつたから、此の神は立法者たりし人ではない。スパルタとクリートとの法律の類似は、何れか一方が他方より學びしものなることを示す。然しこの物語に對する反對論の尤なるものは、ラセデモンの事件を記したる初期の記者が、全然リカルガスを無視し、この制度を他の人物の事業と見做すことである。事實、スパルタ人の制度は、既に指摘したる如く、主として其の環境に負ふものである。實際に神リカルガスと同姓の人物が居たかも知れぬ。そして彼は制度を完成し、これを強制したかも知れぬ。然し彼の事業に就ても、又た彼の存在に就ても、吾人は何等積極的の知識を有せぬ。

(註) 第二八節

第二節 第一メッセニア戦争(前約)

スパルタ人は全ラコニアを征服したる後、『豊饒なるメッセニアを耕耘する』希望より、此の國の征討を企つるに至つた。彼等は、實際増加する市民の戰士

を支持するため、更に多くの土地とヘロットとを必要とした。二十年の苦闘の後、彼等はメッセニア人をイトメ山の要害より驅逐し、其の東部を併合した。多くのメッセニア人は、國境を越えて遁亡し、殘餘のものはヘロットとなり、スパルタ人のために、嘗て自から所有せし田圃を耕作せねばならなかつた。『重荷に疲れたる驢馬の如く、彼等は苦しいながらも必要の下に、其の産物の半を主

人に献けた』(註)。

(註) チルテウス Tyrtæus 抄録、次節を見よ。この戦争には多くの傳説があるが、上記の事實が吾人の知る一切である。

第四節 第二メッセニア戦争(前約)

メッセニア人は數十年後に至り叛亂を起した。アルゴス・アルカヂア其の他の同盟國の援助を得て、彼等は全くラセデモンの軍隊を撃退した。スパルタ人は失望の餘り、戦争を放棄せんかと言つた。然しチルテウスに激勵され、新しき努力を試むるに至つた。彼は軍國詩人 Martial poet であり、將軍であり、政治家であつた。吾人は彼の『突撃の歌』の一節を抜萃する、これは戦士が戰場に赴くとき、口々に誦したものである。

『戰場へ、お、スパルタの子等よ、

人多き、自由の親たちより生れし。

左手もて、汝の楯を押せ、

勇敢なる心もて、其の槍を投げよ、

戰場にて生命を吝むなかれ、

そはスパルタの律法おきてにあらず。』(註)

彼は指揮權を與へられ、終に決定的の勝利を得た。生存者はアルカヂアの山中に遁れ、時々出で

ては數年間ラコニアの田野を荒掠した。損害を受けしスパルタ人は賠償を求めた。然しチルテウスは『よき秩序』なる詩を以て彼等の不満を鎮めた。この戦争はメッセニアの完全なる屈服を以て終つた。更に多くのものは外國に遁れた。あるものはシシリーのカルキスの植民地、メッセネに新しき家郷を發見した。新來者の名稱より、この都市と附近の海峡とは、新しく命名さるゝに至つた。被征服者の多數はヘロットとなつた。約三世紀の間、メッセニアはラセデモンの一部であつた。

(註) フォウラー著『希臘文學』三頁 Fowler, Greek Literature, 66.

第四節 アルカヂア人との同盟 次にラセデモンの統治者は、デルフキのアポロに全アルカヂアの

の征服を求めた。然し女神の答に曰く――

『汝はアルカヂアの土地を求む、汝は餘りに多くを求む、われこれを拒む。

アルガヂアの國には樅實を食ふ多くの強大なる人あり。

彼等は汝の事業を妨ぐ。されどわれ汝を嫌へるにあらず。

轟く足もて打つテゲアに、われ汝を與へて躍らせん。

而して美しき平野をわれ汝に與ふ、尺度もて計りこれを分て。』

而もテゲア Tegea はラセデモン人を撃破し、捕虜に其の平野を測量させ、足柵のまゝ耕作せしめ、以て神託の眞なるを證した(註)。然し幾許ならずして、テゲア人はスパルタと同盟し、戦争の際は

其の指揮を仰ぐことに同意した。此の事は他のアルカチア人の倣ふところとなり、彼等はスパルタの軍隊に入り有力なる要素となつた。蓋し彼等は山地住民に通有なる强健・勇武なる人民であつたから、スパルタ人に次いで優れたる武士となつた。

(註) これが二重の意味を有する豫言の一例である(第二〇三節)

第二四節 コリントの僭主政治^(前六五—一五三)

コリントはラセデモンと、永久の同盟を締結せしペロポネサスの最も有力なる國家であつた。さればこゝにその以前に溯りてコリントの歴史を述べよう。王政は少數の貴族政治に代つたけれども、彼等はやがて壓制となり傲慢になつた。茲に於てか平民出身のシプセラス Cypselus は、起つて彼等を仆し僭主となつた。一般に僭主は、他國より徵募せし軍隊に護衛されるのが常であつたが、シプセラスは多數の人民に愛せられたるを以て、三十年間一人の護衛なくしてよく統治するを得た。其の子ペリアンダー Periander あとを嗣ぎ、反對貴族に苛酷なる手段を取るの已むなきに至り、富者には重税を課した。然し彼は其の歳入を以て都市を裝飾し、其の権力と勢力とを希臘全土に普遍せしむるに用ゐた。此等の僭主は多くの植民地を建設した。希臘の西岸にあるコルキラ Corcyra 島は、久しき以前コリントの植民地であつたが當時獨立して居た。僭主等は一時この島を征服し、附近一帶に植民地を建設し、植民地は何れも母市に對して忠實であつた。僭主は宗教・特に農民の宗教の寛容を示し且つ保護者であつた。彼等がオリムピア

(註一)の神々に獻けし供物は世界の驚嘆するところであつた。僭主一族の没落するや、コリントは完全に秩序のある寡頭政治となつた(註)。

(註一) 第二〇五節 (註二) 第三三節

第二四節 ペロポネサス同盟

寡頭政治のコリントはラセデモンの同盟國となつた^(前約五〇)。エリスは既に同盟に参加し、シシオン Sicyon も數年後これに倣つた。すべて此等の國家は、何れも其

の富豪が政權の支配に任ずるといふ保證の下に、同盟に参加するに至つたのである。而してスパルタも亦、其の同盟國が一般に寡頭政治であることを欲した(註)。蓋し寡頭政治家は僭主若くは民主政治家より、スパルタに對して忠誠なることを知悉して居たからである。

斯く、スパルタの組織しつゝ、ありしペロポネサス同盟は、今日の北米合衆國の如き共通の聯邦憲法を有せず、各國家が夫々單獨に、ラセデモンと條約を締結したのである。同盟國家の代表者は、スパルタ若くはコリントに會合して、宣戰講和の問題を決定し、各國家は戰時に際してラセデモン王の下に服務すべき軍隊を提供した。彼等はスパルタに朝貢せず、單に同盟の經費を分擔したが、その額は輕小なものであつた。斯くして各國家は其の獨立を樂み、同時に同盟の利益を受けた。

(註) 第三節

第二四節 スパルタとアルゴス

ペロポネサス同盟は紀元前第六世紀の中葉までに、スパルタ覇權

の下にアケーア及びアルゴリスを除き、全ペロポネサスを網羅するに至つた。紀元前五五〇年の頃、バルノン山の東、海岸に沿うてアルゴスの占めし狭長の土地シヌリア Cynuria の所有に就き、スパルタとアルゴスとの争となり、こゝに危機を胎んだ。兩國は三百人の選手を出し、この紛争を決定することとなつた。一日の戦闘の後、僅かに二人のアルゴス人と一人のスパルタ人とが生き残つた。決勝戦は終に激闘となり、ラセデモン人は完全に勝利を得た。此の成功はスパルタにシヌリアとキテラ Cythera 島とを與へ、且つ希臘の最大強國たらしめた。

第三章 アテネの王政より民主政へ

(ミケーネ時代より紀元前五〇〇年頃に至る)

第一款 王政

第四節 アツチカとアテネ 曩に希臘の地理を叙述せし時、吾人はアツチカ半島が極めて長き海岸線を有し、山嶽と小平野より成り、土地は確切にして生産に乏しきことに注意した(註一)。すべて此等の特色は、其の國史に重要な意義を有する。海岸を距る四哩にして最大の平原の中央に、一群の丘陵聳立す。其の中央の高地と其の附近とは、アクロポリス(牙城)(註一)として知られ、こゝにアテネ市がある。

アテネはミケーネ及び叙事詩時代(紀元前約一五〇〇—七〇〇)には、僅かにアツチカの獨立都市の一に過ぎなかつた。然るに第七世紀の直前、全國土はアテネ都市國家のうちに包含されて居た。

吾人はアテネ初期の歴史を、他の希臘國家よりも能く知悉して居る。従つて其の進歩を一層確實に述べる事が出来る。これ吾人がその初期の研究を爲す第一の理由である。第二の理由は、アテネが後代に得たるその名聲である。本章に述ぶる時代に於て、アテネの文明はミレトス(註三)其の他の希臘國家よりも遙かに遅れてゐた。其の後間もなくアテネは、他のすべての國家に先んじ、智力と文學と藝術とに於て世界第一の都市となつた。さればヘレネスの歴史は、その中心をアテネに置く。

(註一) 第六節 (註二) 第二節註二

(註三) 第三節第二節

第四節 王政(前約壹) 神話の章に於て吾人は、テセウス及び其の他の傳說的國王に就て述べた

(註一)が、王政時代の晩年について説明しなければならぬ。最後の王家メドンチダエ Medontidae は、國王コドラス Codrus(『光榮』The Glorious)の子孫であると言ふ。彼の治世にドーリア人はアツチカに侵入したといふ神話がある。デルフキのアポロの神託によれば、軍隊はその將軍が敵に殺さるれば勝利を得るであらうと。由てコドラスは自から農民に扮してドーリア人の軍營に赴き、その正體を知らさず、故意に争論を起して殺され、彼は永久の光榮を得、彼の國家は勝利を得た。アテネ

人は彼の勇敢なる犠牲に感激し、彼の子メドン Medon を後継者とし、メドンの死後その子孫 Medonidae は、數代に亙りアテネの國王であつた。コドラスのことは神話に屬するも、何人も其の家族の存在せしことを疑はぬ。

此の時期の政治は、國王これを行ひ、貴族會議と自由民會とが、これを援助し且つ又た牽制を加へた。

後世の歴史に於て、貴族會議は其の職務(註二)を遂行するに當り、アクロポリスの西に當る丘陵アレオパガス Areopagus に會合を開いた。斯くしてその會合の場所より遂にアレオパガス會議と稱するに至つた。此の貴族會議は、他のヘレネス國家の同種の會議の如く、國王を犠牲に供して自己の權力を増進せんとし、紀元前五〇年頃に至り、國王の任期を十年に低減した。されば表面は其儘王政を繼續せしと雖も、此の變革により實際は貴族政治となつた(註三)。

(註一) 第三節 (註二) 第五節

(註三) 貴族政治の説明については、第二三節第二六節を見よ。

第二款 貴族政治・富人政治

第一四九節

貴族政治(前約七五〇—六五〇)

國王の權力は漸次剝奪されて新官吏に與へられ、終に(註四)九名の

執政官 Archons と稱する長官を置くに至つた。執政官は(一)アルコン Archon と稱する行政長官(註一)(二)軍隊の司令官ポレマーク Polemarch (三)單に祭司・裁判官と化せし國王と、(四)法律を記録し公文書を監理し、ある種の民事裁判官たる六名のテスマテタエ Thesmothetæ(立法者 Legislator)とであつた。一時此等の官吏はアレオパガス會議に於て、貴族中より選出された。

アレオパガス會議は、他の都市の貴族會議(註二)の如く本來大貴族より成つてゐた。議員は其の地位を終身保持した。すべての貴族は、自らユウパトリッド Eupatrids (希臘語のユウパトリダエ Eupatridae) 貴族を祖先とする子孫『Sons of noble fathers の意』と稱してゐた。彼等のみ重甲を備ふる資力を有してゐた。彼等は最早や戦車(註三)を使用せず騎馬を用ゐてゐた。平民の不完全なる武装を輕視せる彼等貴族騎士は、彼等を政治に參與せしめなかつた。自由民會は不必要のものとなつてしまつた。貴族は唯富豪階級の利害を考慮し、長官を監督し、無法不道德なる市民を罰した。彼等は此の期間國家最高の權力であつた。

(註一) 本書にて『九人の執政官(アルコン)』の首席として使用するアルコンは、特にアルコンと記す。

(註二) 第三節 (註三) 第九節

第五節 富人政治(前約六五〇—五九四)

・密集隊

平民は自然この壓制を憤り政治に參與せんと努力した。彼等はアテネが恒に隣國と交戦せる状態により、彼等の地位を有利に展開することを得た。貴族は他

國の征服より免かるゝ爲めに、他のヘレネス國家がスパルタより學びたる密集隊（註一）を採用せねばならなかつた。貴族の數は少かつた。従つて完全なる武具（註二）を備ふる平民を密集隊に参加せしむる必要があつた。當時偶然にも産業發達のため武具は廉價となり、多くの平民家族は生活に餘裕を生じた。戸口調査の結果として武具を備ふるに足るものの富の程度を決定した。然し富裕なる平民は密集隊に参加するや、直ちに會合を開き政治に參與するに至つた。政治上の特權は、財産の多寡に基くこととなり、こゝに富人政治 Timocracy の出現を見た。この變革は、紀元前約六五〇年の事であつた。

（註一） ラセデモンの政治上に及ぼした密集隊の効果と比較せよ、第三節以下。

（註二） 武具はスパルタ人のそれと殆んど變化なし、第三節及び註。

第三節 富人政治の構成 アツチカは他のイオニア國家の如く、四部族（註一）に分れて居た。各地方は更に十二の邑 Township （註二）に分れ、合せて四十八邑あつた。其の目的は全國全土に善政を布き、各人公務を負擔するにあつた。

新に組織された四百一人會は、抽籤にて四部族・四十八邑を代表するものを以てこれに充てた。この會議は民會に提出すべき法令を準備し、長官の職務を補けた。爾來アレオバガス會議は退任執政官より成ることとなり、他の貴族會議と民會とに牽制されしも、依然國家の首腦であつた。

完全なる武具を具備し得るものより成る民會は、定期に會合を開き、長官を選擧し、四百一人會の提出する法令の賛否を決定した。同時に富裕なる人民は、貴族となり得ざりしも官職に就任するを得るに至つた。

市民は租税と軍務とより、其の土地の産額に應じて四階級に分れた。然し此等の戸口調査に基づく階級は、次の時代まで重きをなすに至らなかつた。

（註一） 四部族とはゲレオンテス Geleontes、エギコレニス Aegicolreis、アルガダイス Argadeis 及びホプレーツ

Hoplites である。此等は多くイオニア國家に存せしを以て、イオニア部族と稱せらる。参照第一一七節。

（註二） ナウクラリス Naucraris と稱す。

第一五二節 國家組織概要

一、アツチカの領土的區分。

四種族・四十八邑 Naucraris 地方行政に任ず。

二、戸口調査による四階級。

市民の公務特權を決定す、この時期のことは詳知し難し、第一五八節、第二を参照。

三、主なる長官

イ、行政長官

ニアルコン、人口、家族權に及ぼす事件の裁判官

第一三章 アテネの王政より民主政へ

ハ、『九執政官』Nine archons 會議の議長

2 國

イ、祭司

ロ、殺人事件の裁判官

3 ポレマーク

イ、軍隊の司令官

ロ、外國人に關する事件の裁判官

4 六人のテスモテ

イ、法律及び公文書の保管者

タエ『立法者』

ロ、ある種の民事裁判官

此等の九名の長官は屢ミアルコンを議長とし、部局を組織して行動する。

四、會議

1 アレオパガスの會議(Boule 高等會議)

イ、退職執政官より成る、任期終身。

ロ、國家最高の權威として長官及び市民の行爲を監視す。

ハ、謀殺事件の裁判所。

2 四百一人會(Boule 高等會議)——部族及び邑を代表す。

イ、長官を輔けて政務に當る。

ロ、民會に提出する法案の準備。

五、民會(Ecclesia)

1 完全に武裝し得るものより組織さる。

2 長官の選舉、四百一人會の提出する問題の決定。

六、政體

政權は、財産の多寡によりて程度を異にする富人政治であつた。

以上はアテネ國家組織の梗概である。時にその一部は變更せられ、新しき特色を加へたるも、新制度によつて廢止することはなかつた(註)。約言すればアテネは唯一の制度を有してゐたのである。

(註) 紀元前四二二年、及び四一四三年の二回に寡頭政治の出現を見たも、それはここに説明する必要を見ぬ。

第二節 キロン(註)の陰謀(註)

此等の變革に際し、アテネは混亂と争鬭の巷となつた。富豪の奴隸

たりし多數の貧民は叛亂を起して主人を脅し、北アツチカの高地にありし牧者・農民は、アテネ附近の富者を憎んだ。尙ほ蘇蘭の高地と低地との住民が互に憎惡するが如きものであつた。而も高地人も平地人も、共に海岸の商人・漁夫に對して更に敵意を示し、此等の地方的黨派の争鬭は斷えず内亂を惹起した。此等の紛糾に乗じ貴族は官職を争ひ、子弟は又た父兄の不和を繼承し、殆んど紛擾の結末を見る能はず、國家は無秩序の状態に墮しつゝ、あつた。

當時アツチカにキロン Cylon と稱する青年野心家があつた。最も有力なる大貴族の一に屬し、オリムピアの競技に勝利を得て名聲を揚げた。彼は國家の疲弊に乗じて、政府を篡奪せんと計畫し、

傭兵の援助と友人貴族の支持とを受けアクロポリスを占領した。然るに多数の國人は、武装して彼を牙城に包圍した。食糧の缺乏するに及び、キロン兄弟は包圍線を突破して脱出し、飢餓に瀕せる黨與は降服するの已むなきに至り、アクロポリスにあるアテナの祭壇の周圍に集まり只管保護を求めた。こゝに於て區長等(註二)は彼等の歎願に對し、若し柔順に裁判に服するならば、其の生命は赦免する約束をした。彼等はこれを承諾した、然しこの約束に衷心信頼せざりし彼等は、絲の一端をアテナの像に結び他端を持して山を下つた。彼等が女神フューリー(註三)の祠附近に來りし時、女神アテナの與へし保護の絲が突然切れた。アルコンのメガクレス Megacles 及び其の黨與は、彼等を石にて虐殺し、逃走し得たものは僅かに數名に過ぎなかつた。恐らくキロンの一族とメガクレスの一家との不和が、この不祥なる虐殺を生じたのである。メガクレスの屬するアルクメオニダエ Almeonidae 家は、アツチカの最も有力なる一族であつた。されば國家の權力を以てするも彼等を殺人罪を以て、或は歎願者虐待罪を以て、これを裁判に附することが出来なかつた。然し彼等の全家族に對する不信仰の呪詛は二世紀以上に及んだ(註四)。斯る不和を鎮壓する法律と法廷とが必要であつた。

(註一) 第五節

(註二) フューリー Furies 即ち怒りの女神は、偽誓・殺人・尊屬及び歎願者を虐待する者を罰するを任務と

した。當時その祠殿は、アレオパガスの南側の洞穴にあつた。

(註三) 歎願者とは、神の祭壇若くは殿堂に避難せしものである。歎願者を虐待せしものは、自己また家族のものも不信仰の呪詛を受けた。

第二節 立法者ドラコー(註六)

貴族は法律を神聖なりと認めつゝも、この時まで貴族階級のために利益ある政治を行つてゐた。長官は自己の階級若くは最大の費用を負擔するものに利益ある裁判を下してゐた。不當利得により富を殖すものを生じた。大富豪は時に互に争つたけれども、協力して下層階級を輕侮しこれを壓迫した。自然平民はこの壓制に對抗し、其の裁判の由て來る法律の公表を迫つた。貴族は讓歩し、紀元前六二一年市民はドラコー(註七)を「立法者」に選舉し、國家に代り法典起草の完全なる權力を與へた。

彼の殺人法は、アテナ人が數世紀間これに變更を加へなかつたことに興味がある。ドラコー以前には、自己防衛のため或は他の正當なる理由により、殺人を行ひたるものと雖も、謀殺罪と同じく亡命するか、若くは一定の賠償金を被害者の血屬に支拂はねば復讐を受けること必然であつた。ドラコーの法典によれば、謀殺罪はフューリーの聖丘アレオパガス(註八)に開かれた貴族會議の審問を受け、有罪の場合には死刑に處せられ財産は沒收される。其の他の殺人罪の場合には、下級裁判所の審理を受け、苛酷なる刑罰は受けぬ。故殺の場合には一時的追放を命ぜられ正當防禦は無罪で

あつた。

野菜の窃盜は死刑に處せられた。そして此の事實によりドラコーを苛酷なる立法者とした。然し窃盜罪の刑罰は非常に嚴酷であつたにしても、殺人法には多大の改善が行はれた。『英雄にせよ、神にせよ、其の何人が制定せしにせよ、こは不幸なるものを壓制せず、出來得る限り正しく彼等を人間愛を以て寛恕した』(註二)。彼の殺人法は別として、恐らく彼は當時の習慣に著しき變更を加へることは出來なかつたに相違ない。さればその法典の苛酷なりとの非難に對して、彼に全部の責任を負はせることは出來ない。

(註一) 彼は六人のテスマテエの一人であつた。第二四九節。

(註二) この會合の場處より、貴族の會議はアレオパガス會議と稱するに至つた。

(註三) デモステネス第二三篇、第七〇節 Demosthenes, xxiii, 70

第二五節 地主と小作人

ドラコーの立法は悲慘なる貧民を救助する効果はなかつた。彼等の悲境の原因に就ては、こゝに説明の必要がある。貴族は一切の政權を壟斷するを以て満足せず、更に國家のすべての富を獲得し、市民に對して絶對の支配權を行使するを目的とした。彼等は自由農民を自己に従屬せしめ、尙ほ地主は不當にせよ、田圃に對しその權利を主張する場合には、これに『境界』石を置き、その土地と人とは自己に所屬することを表示した。久しからずして此等の境界石は、

アツチカの殆んどすべての田圃に建てられ、當時の大政治家ソロン Solon の言によれば、『肥沃の土地は奴隸』にせられた。若し地代を支拂はず、或はその他地主に對し債務を負ふ時は、農民と其の子女とは共に奴隸として估られた。貧しき小作人は確かなる土地を耕すに、唯銳利なる木片以外には一切農具を有せざりしを以て、其の生活を營み且つ負債を辨償することは困難であつた。従つて多數の人民は奴隸として外國に賣られた。然るに彼等の地主は裁判官であり、彼等の不滿を矯正する合法的方策は存在しなかつた。由て彼等は一致して地主に反抗することとなつた。

第三款 ソロンの改革

第二五節

ソロンのアルコン職(註)

ソロンはアツチカ大貴族の一員たりしのみならず、商人と

しての經驗を有し貧民の味方であつた。されば彼を信頼せし全階級は、紀元前五九四年彼をアルコ

ン並びに立法者に選舉し、彼によつて市民間の協調を恢復し善政の行はる、ことを希望した。

彼は就職後、直ちにすべての境界石の撤去を命じ、地主に對する小作人の負債を免除した。更に

ソロンは市民の自由を現在及び將來に保障する爲め、次の如き身體自由法の實施を命じた。

(一) 負債のため、奴隸となりしものを釋放すべし。

(二) 何人と雖も、其の子女及び血屬の婦人を奴隸として估却するを得ず。

(三)何人と雖も、身體を擔保として金錢を貸與するを得ず。
(四)何人と雖も、法定額より多くの土地を所有するを得ず。

第二五節 制度の改革

彼は今後人民の自由と財産とを保護するため、最も貧困なる階級テテス Thetes (註一) を、他の階級と等しくその創設せし人民最高裁判所及び民會に参加せしめた。この裁判所は三十歳以上の市民にして、陪審官を欲するものより成り、十八歳以上のものは民會に参加した。而も此等の義務は久しき間無報酬なりしたため、唯餘裕ある富者の壟斷するところであつた。人民は民會に於て長官を選擧し、四百人會——從來の四百一人會(註二)——の提出する重要な共通の問題を決定した。他面、人民裁判所は執政官の判決に對する控訴を受理し、長官の職權濫用に對し告訴するものあれば、その任期滿了後に審問を行ふ。以上はソロンの重なる改革であつた。而も彼は政府の全く改善せらるるまで意を安んじなかつた。

(註一) 上述せし如く(第五節第二五節五)ソロン以前の民會は、重甲を備へ得る人民のみがこれに参加した。民會は三大富裕階級(第二五節二)より成り、最下級(テテス)はソロン以前の富人政治より排斥されてゐた。ソロンは彼等もこれに參與することを認めた(參照第五節二の四)

(註二) 第五節第二五節四

第一五八節 改革制度の概要

一、アツチカの領土的區分

四部族・四十八邑 Naigraites は従前と異ならず(第二五節一)

二、四階級

- 1 ペンタコシオメゲムニ (Pentacosiomedimni) ——『五百アシエルの人』——即ち其の所有土地より五百アシエル以上の穀物・油・葡萄酒を産し得るもの。彼等は騎兵となり、最高の軍職に就き、收入役・執政官たる資格を有す。
- 3 ヒツペイス (Hippais) ——騎士——三百乃至五百アシエルの酒類其他を産する土地の所有者・彼等は騎兵となり又た執政官となり、其の他適宜重要な官職に就くを得。
- 3 ゼウジタエ (Zeugitae) ——戦列に就く重甲兵——其の土地は二百乃至三百アシエルの酒類、其他を産する土地所有者。彼等は重甲歩兵となり、下級官吏たるを得。
- 4 テテス (Thetes) ——勞働者、貧民——ゼウジタエよりも劣等なる土地の所有者、或は全然土地を有せざるもの。彼等は輕甲歩兵となる。官職に就くを得ざるも、民會及び人民裁判所に出席するを得。最初の三階級は稀に課せらるる戦税を支拂ふもテテスはこれを免除せらる。此等の階級は以前にも存したるが(第二五節二)、ソロンは上記の如く定めた。

三、長官 Magistrates

彼等は前期と同じ義務を有し(第二五節三)、其の資格は第二五節二を見るべし。彼等は任期の終りに當り、人民裁判所に對し其の責を負ふ。

四、貴族會議

第一三章 アテネの王政より民主政へ

- 1 アレオパガス會議
(高等會議 Boule)
- 2 四百人會
(高等會議 Boule)

議員の資格、任命、會議の權限等は従前と實質的に變化なし(第一五二節四)

五、民會 Ekklesia

- 1 すべての市民のうち餘暇あり、且つ出席を希望するものより組織せらる。
- 2 長官を選擧し、四百人會の提出する問題を決定す。

六、人民最高裁判所 Heliaea

- 1 三十歳以上の有閑市民にして出席を希望するものより組織せらる。
- 2 執政官の判決に對する控訴を受理し、長官の任期滿了後其の職權濫用を裁判す。

七、政體

第一五二節に掲げし概要と比較するに、ソロンの改革は重大なるも、初期の制度は大部分その儘其の效力を繼續した。政府は依然富の程度に基きて政治上の特權を有する富人政治であつた。然しソロンの制度によれば、人民裁判所とテテスの民會參加とは、共に民主政治に一步を進めたるものである。此等の民主的要素は漸次有力となり、やがて全く民主政治となるに至つた(註)

(註) 一時代の制度は、これを前代のそれと比較すべきものである。改革せられたる點に注意を拂ふと共に、其の理由をも探究せねばならぬ。斯くして研究したる政治史は、利益あり且つ興味を與ふるものである。

第二五節

ソロンの特別法 制度の改革はソロンの行ひし事業の一部分に過ぎぬ。彼は各種の法律を制定したが、其の最も重要なものに次の如きものがある。

(一) ドラコーの殺人法はこれを改正せず、其の儘に採用した。彼はこれを正當と信じたからである。然し他の犯罪に就ては苛酷と思はれる刑罰を輕減した。野菜・林檎の窃盜罪は爾後死刑に處せられなくなつた。

(二) 彼は橄欖油以外の土地の産物の輸出を禁止した。其の目的は國産の食糧を保存して飢饉を防止するにあつた。

(三) 彼はすべての子弟に商業教育を施し、また熟練工業を獎勵する法律を通過した。蓋し彼は土地確切にして農業に適せず、國家の繁榮は一に商工業にありと信じたからである。其の後アテネは此の方面に發達した。

(四) 彼より以前のアテネは通貨を有せず、エギナ Aegina の通貨を使用してゐた。この島國家は當時アテネの競争國であつた。然るにアテネと親密なる隣國カルキスは輕量の銀貨を鑄造使用して居た。ソロンはこれをアテネの本位貨とした(註)。此くしてユウボエア及びカルキスの植民地、其の他同じ本位貨を使用する國家との貿易を助長し、從來アテネの未だ知らざりし商業世界を展開した。

(五)彼は又た婦人の自由を制限し、彼等の夜間外出を許さず、唯輿に乗り炬火を先行せる場合はこれを例外とした。ホーマー時代の婦人は男子と同等の自由を有し、スパルタの婦人は一層自由を有してゐた(註三)。アテネの婦人はソロンの時代以後漸次家庭に蟄居し、其の社會的勢力は次第に凋落した。

(六)最後に彼の動亂法を述べよう。彼は尙ほアツチカに内亂の惹起すべきを豫知し、黨争に際しては市民は正と信する側に味方すべしと命じた。争鬪を回避するものは不名譽の譏を受け、且つ市民権を剝奪せらるゝことになつてゐた。彼の目的は平民をして必ず公生活に参加せしむるにあつた。彼は市民の協力により、尙ほキロンの陰謀の場合の如く、動亂を速に終結せしめ得ることを確信したからである。

(註一) 彼の銀ドラクマ Drachma は重量・本質殆んど米貨二十仙(十片)に相當す。然しその購買力は遙かに大であつた。ソロンの時代には一ドラクマを以て一メヂムムス (Medimnus 一・五ブシエル)の小麦を購ひ、五ドラクマを以て牛一頭を買ふを得た。

(註二) 第七節第二三節

第二〇節 無政府状態に陥る(前五九四—五〇〇) ソロンは彼の法律を百年間繼續するものと考へ、すべての市民に服従の誓約を求めた。彼が其の事業を完成せし時、『人民は彼の許に訪れて、その法律に就き、

こゝ、彼處を批評し質問して彼を悩ました。然し彼は一旦決定せしものを變更するを欲せざりしと、又たアテネに留つて市民に憎まるゝに忍びず、去つて埃及に向ひ……十年間を商業と旅行とに費した。』(註一)

彼が、諸國を往訪して歸國した時本國の大混亂に陥つてゐるのを見た。何人も彼の改革に満足しなかつた。貴族は舊權力の恢復を望み、貧民は財産の完全なる分配を豫期してゐた。實際ソロンは、其の國家に優れたる法律を與へたけれども、これを施行するに足る意思と權力とを有する人物はるなかつた。斯くて國家は無政府状態に向ひつゝ、あつた。山地と平野と海岸(註二)との人民は互に争ひ、數年間はアルコンの選舉すら出来なかつた。

(註一) アリストートル『アテネの制度』第一章 Aristotle, Athenian Constitution, II
(註二) 第一五三節

第四款 僭主政治(前五〇〇—四五〇)(註一)

第三節 ピシストラタスの僭主(前五〇〇—四五〇) 高地住民の首領は、『辯論の雄・貧民の保護者・中庸を得たる闘士』(註二)ピシストラタス Pisistratus であつた。彼は人望を博する上記の性格により、多くの追随者を得た。然し平原・海岸の人民(註三)は彼の苦手であつた。彼等は機會あれば彼を殺傷するを躊躇

第一三章 アテネの王政より民主政へ

躊しなかつた。一日彼はアテネの市場に馬を驅り、彼が敵より被りしといふ傷を人民に示した。民會に出席せし人民は、彼に武装せる五十人の護衛兵を附する決議をなし、彼等の好意を示した。ピシストラタスは次第に護衛兵の數を増加し、棍棒の代りに長槍を持たしめ、遂に牙城を占領して自らアテネの僭主——不法なる統治者(註三)——となつた。

ピシストラタスの政治は中庸宜しきを得た。然し海岸派の首領と平原派の統領とは、相結んで彼を追放せしを以て彼の支配は長く續かなかつた。其の後兩同盟者は互に争ひ、海岸派の首領は「ピシストラタスと協定し、彼に其の女を娶ることを提議し、此等の條件に基き、極めて原始的單簡なる方法を以つて彼をアテネに復歸せしめた。彼は廣く宣傳して曰く、女神アテナはピシストラタスを召喚すと。次いで長大美貌の婦人を搜し出し……これに女神に似たる服裝を纏はしめ、ピシストラタスと共にアテネに送つた。ピシストラタスはこの婦人と共に戰車を御し、恐怖に打たれた市民は彼を崇敬して迎へた」(註四)。その後彼は岳父との不和により再び亡命し、十年間苦心して財を積みたる後、再び歸國した。平民は彼を歓迎した、然し多くの貴族は恐怖の餘り國外に遁亡した。斯くして權力を恢復せしピシストラタスは、外國傭兵の力によりその地位を鞏固にした。

(註一) アテネに於ける僭主政治の緒論として第三節を参照せよ。

(註二) プルターク『ソロン傳』第二九節 Plutarch, Solon, 29

(註三) 第五節 (註四) 第三節

(註五) アリストートル『アテネの制度』第四章 Aristotle, Athenian Constitution, 14

第二節 彼の政治 『彼の政治は既に述べし如く、穩健・中庸を得たものであつた。そして專制的といふよりは寧ろ立憲的に近きものであつた。彼はあらゆる點に於て博愛且つ溫和であり、叛く者に對しても寛容であつたのみならず、進んで貧民に金錢を貸與してその仕事を援助し、以つて農業により生計を営ましめた。これは二個の理由からである。第一に貧民を都市に集中せず、國內全體に散在して生活するを得せしむること、第二に穩健なる生活を營み、其の業務に熱中する結果、政務に參與するを欲せず、またその閑暇を有せざることを希望したからである。同時に彼の収入は、國土の開発により著しく増加した。そは彼がすべての産物に十分の一税を課したるに因る』(註)。彼は上水道を設けてアテネに清水を供給し、殿堂を建て、また宗教的祝祭を設け、文學・美術を獎勵した。彼の治世は獨り教育方面のみならず農業と工業とは繁榮し、平穩秩序ある政治と相俟つて一大進歩を遂げた。

(註) アリストートル『アテネの制度』第六章 Aristotle, Athenian Constitution, 16

第三節 ヒツピアスとヒツバルカス ピシストラタスの老境に入りて歿するや(前)、彼の子ヒツ

ピアス Hippias とヒツバルカス Hipparchus とは其の後を繼承した。彼等は一時父の賢明なる政治

第一三章 アテネの王政より民主政へ

に倣ひしも、不幸にして弟ヒツパルカスは戀愛問題より、青年貴族ハルモヂウス Harmodius とアリ
ストゲイトン Aristogeiton とを侮辱したるため、彼等はこれに對して僭主政治の顛覆を計畫するに
至つた。彼等はアテナの祝祭を利用して劍を桃金娘 myrtle の花輪に隠し、行列の部署を定めつ、
ありしヒツパルカスを刺した。然し彼等は政府の首班たりし兄ヒツピアスを襲ふことは出来なかつ
た。斯くて僭主政治を倒す能はざりし彼等は、終に捕へられて死刑に處せられた。而もアテネ人は
自由の恢復後、ハルモヂウスとアリストゲイトンとを僭主殺戮者として詩歌に詠誦し、兩英雄の子
孫に永久市民の名譽を浴せしむる布告を發した。

暗殺事件のありし結果、ヒツピアスは甚しく貴族を冷遇し、爲めに彼の人望は著しく凋落した。
其の間亡命せる貴族は、歸國の計畫を爲しつつあつた。彼等の領袖クリステネス Cleisthenes は
アポロのために、大理石の前階を有する壯麗なる殿堂を建て、デルフキ神託を味方とした。この爲
めに彼は豫定よりも更に多く金錢を必要とした。斯る寛容なる行爲に感謝せしアポロは、亡命者の
歸國に援助を吝まなかつた。さればペロポネサスの覇者ラセデモン人が、あらゆる問題に就きアポ
ロの神託を求むるに際し、其の應答には必ず「アテネを自由にせざるべからず」といふ一節があつ
た。

スバルタ王クレオメネス Cleomenes は神託に従ひ、兵を率ゐてアツチカに入り、ヒツピアスを

クロボリスに圍んだ。僭主及び其の友人等は窮かに包圍を突破し、其の子女を安全の地帯に遷さん
としてこれを敵の手に委ねた。ヒツピアスと其の與黨とは彼等を奪回せんが爲め、五日以内に國土
を退去する約束をした。斯くしてアテネの僭主政治は、紀元前五一〇年を以て終を告げた。

第五款 民主政治 (紀元前五〇八年に始まる)

第二節 イサゴラスとクリステネス (前五〇八―前五〇六)

僭主政治の没落後、貴族は國家の幸福に力を盡さ
ず、ソロン時代の前後に屢々行はれし如き權力の爭奪を開始した(註)。僭主の味方イサゴラス Isagoras
とクリステネスとは主なる競敵であつた。彼等はアルコン職を争つた。イサゴラスは人民の
投票よりも、政治俱樂部の援助を得て先づ其の職に就いた。失望せしクリステネスは、人民に訴へ
てイサゴラスの追放を求め、成功の曉には人民の奪はれし投票權を復舊する約束をした。然るにイ
サゴラスは其の友人スバルタ王クレオメネスの救助を求め、後者は僅少の軍隊を率ゐて來援し、ク
リステネス及び其の與黨は終に亡命した。イサゴラスの自ら僭主たらんとする意思は今や明瞭とな
つた。而も人民は奮起し、彼と其の與黨とをアクロボリスに圍んだ。第三日に至り、彼等はラセデ
モン人の退去を許し、クリステネスを與黨と共に召喚歸國せしめた。高壓手段に出でし人民は、そ
の約束を實施するため、クリステネスに完全なる政權を委任した。恐らく彼は絶對權力を有する立

法者』に任ぜられたものであらう。

(註) 第二五、二六節

第二五節 クリステネスの改革^(註)

誓約を厳守せしクリステネスは、徹底的に政治の改革を断行した。其の目的は、(一)すべての階級の人民を、市民の公簿に基いて融和せしめ、貧民も貴族も共に平等の投票権を有するに至らしめ、(二)平野・海岸・山地の住民間の争闘を根絶するにあつた。この目的を達するため、先づ彼はアツチカを百個以上のデメ *demes* 即ち邑(註)に分ち、此等の小邑を更に新しき小部族 *tribes* に纏めた。而も一部族の邑はこれを接近せしめず、その一部は山地に、他の一部は平野に残餘は海岸に邑の聚落を作らしめた。換言すれば部族は一の連絡ある地方を構成せず、隔離せる邑に散在してゐた。斯くして平野・海岸・山地の人民は小部分をなして十部族の間に介在するに至つた。されば彼等は一致を缺き、紛擾の原因は除かれた。舊四部族に代る新部族を作りし目的は、階級的區別を廢止するにあつた。蓋し貴族は舊部族を支配したるも、平民は新部族により貴族と同一政治的水平線に立つに至つた。クリステネスの計畫は成功した。人民は以前よりも遙かに平等となり、部族間の争闘は全く其の跡を斷つに至つた。彼は五百人會——各部族より五十人宛を出す——を以て四百人會に代へ、各部族より一名宛合せて十名の將軍を置いた。

(註) クリステネスの設けしデメは、ソロン時代より以前に存在せし四十八邑 *Zeugonoties* に代つた。

第二六節 クリステネスの制度改革概要

以上の改革と其の他の小改正を試みし後、アテネの制度は次の如くになつた。

一、領土的區分

十部族は百餘のデメ(邑)に分れる。デメは近世國家の町村に相當す。

二、國勢調査の四階級は従前と異ならず(第二五節二)

三、長官

1 九名の執政官は従前と異ならず(第二五節三)たゞ民選官職の發達につれ、漸次其の重要さを減ずるに至つた。

2 各部族より一人宛選出する十名の將軍は、十部族の聯隊を率ゐ、ボレマークの下に軍事會議を組織す。將軍は執政官を犠牲として自己の權威を増し、遂に主要なる長官となつた。

四、貴族會議

1 アレオパガス會議

組織及び職務は従前同様とす(第二五節四)、然しクリステネスの人氣取り政策により、表面に活躍せざるに至つた。ペルシア戦争と共に再び活動せしが其後(前四〇—四三)漸次民主的制度(民會、人民裁判所五百人會)の發達するにつれ衰微す。

2 五百人會(四百人會に代る。第二五節四)

第一三章 アテネの王政より民主政へ

各部落の出す候補者より抽籤にて各五十人を選出す。

イ、組織——議員は十部に分れ交代して會議事務を掌る。各部一年の十分の一日間 Prytany 其の任に當る。一期の當事者五十人をプリタネス Prytanes と稱す。其の部の委員長は毎日交代す。委員長は又た毎日短時間集合する總會及び民會の議長となる。

ロ、職務——民會に提出する法令の審査をなす。アレオパガス會議に代り漸次國家の主要なる監督權行政權を掌握するに至る。

五、民會

プリタニーに一回定期の會合をなす。組織職務は従前に異ならず、(第二至節五、六)政治上更に活動するに至る。

六、人民裁判所

一年數回集會す。

七、政體

1 貴族的要素

イ、アレオパガス會議(富豪は終身其の他位を保持す)

ロ、執政官たるに必要な財産上の資格。

ハ、執政官は選舉によつて就任す(寧ろ抽籤による)

ニ、公務の大部分は無報酬とす。

2 民主的要素

イ、民會及び人民裁判所(すべての市民より成る。)

ロ、五百人會(抽籤により就職、貧民も富者と等しく選舉せらるる機會を有す)

3 約説——以上の概要と、(一)ソロン以前と、(二)ソロンの改革以後の政治概要とを比較すれば、ソロン及びクリステネスは、新制度を創始したるにあらずして、現在の政體を民主的に變じたるものなること明瞭である。

第二至節 貝殼追放 クリステネスは『貝殼追放』Ostracism なる特殊の制度を創めた。これは投票に使用せしオストラコン Ostrakon と稱する陶壺より出でしものである。一年一回民會の適當と認めたる時、人民は集合し國家に取りて危険人物と認むるものを投票する。執政官はこれを計算し

若し合計六千票に達せざる時は、その投票は無効である。然し若し少くも六千票の投票があつた場合、最大多數の投票を得しものは十年間の國外追放に處せられた。追放には必ずしも六千票を必要としない。唯多數であればよい。アテネの貴族は政府に對し尊敬心を缺いで居た。されば官職を争うて敗れし時と雖も、多數の意思を尊重して服従することをせず、只管幸運なる相手を仆す爲めに法律を無視することを敢てした(註)。貝殼追放は社會より危険なる人物を除き、國家の元首として人民が最善を信する人物を置いた。

(註) クリステネスの行爲参照(第一至節)

第二八節 スバルタの野心 スバルタ人はペロポネサス同盟(註二)を組織して以來、著しく其の勢力を伸張した。第六世紀末、メガラはこの同盟に参加した。スバルタ人は特に希臘各國の貴族を援助し、僭主に對抗せしめ以て其の勢力の伸張を計つた。されば國主クレオメネスは進んでヒツピアス追放の事(註三)に従事した。これ疑もなくラセデモン人はアテネが自由を回復したる後には、これを支配することを希望したからである。

而も豫期に反しアテネ民主政治の樹立を見たるクレオメネスは、ペロポネサスの軍隊を集め其の目的を告げずしてアツチカに入り、同時にテーベ及びカルキス人も彼と協力して同國に侵入した。アテネ人は數に於ては劣りしも、勇敢にこれに對抗し、ペロポネサス人とエレウシス Elousis に會戦せんとした。幸にしてコリント人は遠征の目的を知り、正義に背くものなりとして参加するを拒み、他の同盟國もこれに倣つた。クレオメネスは歸國の外に策の出づるを知らなかつた。由つてアテネ人は、轉じてテーベ及びカルキス人を各々別々に同日に撃破した。アテネはカルキス侵入の罪を問ひ多大の土地を奪ひ、ここに四千の植民者を移住せしめた。アテネ植民地はアツチカの附庸國となることとなつた。即ちこの植民地は地方的の政府を有したけれども、其の住民は依然としてアテネ市民であつた。

其後暫くしてラセデモン人はヒツピアスを其の都市に招き、同盟國の會議を召集し、彼の地位

を回復する提議をした。然るにコリントの代表者はアテネのために辯じ、他の同盟國もこれに同意を表した。ヒツピアスは失望の餘り小亞細亞に遁れ、こゝに波斯人と本國に對する陰謀を企てた(註三)。其の後間もなくアテネ人はペロポネサス同盟に参加してスバルタと和を講じた。同盟に於けるアテネの地位は完全なる獨立を有し、特に有利なるものであつた。

(註一) 第二五節 (註二) 第二三節 (註三) 第二七節

第二九節 アテネ史撮要(前七五) 吾人は今や二百五十年に亘るアテネの歴史を述べた。(一)王政は貴族政治となり(註四)、貴族は甚しく下層階級を壓迫した。(二)ソロンの時代より以前に富豪は、貴族と等しき政治的特權を有するに至つた。(三)ドラコー(註五)は市民に成文法の便益を與へた。(四)ソロン(註六)は多數の人民を農奴より解放し、自ら保護する方法を講じた。(五)ピシストラタスと其の後嗣者等(註七)は、貴族を壓制して秩序ある政治を肇めた。(六)自由と平等とを目的とするクリステネスの大改革は、市民の愛國心を喚起し、獨り敵意を抱く隣國のみならず、間もなく希臘に侵入せんとする波斯の大軍に對し、其の國土と自由とを擁護する力を與へた。

第三〇節 希臘の政情(約前五〇〇) 吾人の叙述せし時代(約前七五〇)の末期、ボエオチアの西部及び北部にある希臘半島の大部分は、依然未開若くは半文明の種族によつて占領されて居た。即ちテーベは何等著しき功業の誇るべきものなく、アルゴスは既に衰微して居た。伊太利シシリイの希臘都市は、

多く僭主の下にあつて統一なく、勢力も微弱であつた。小亞細亞の希臘都市は、後章(第一章)に述べ
る如く、波斯王を支配者と仰いで居た。アテネとスパルタとは、他の都市よりも希臘の政治的發達
に多くの貢獻をなした。アツチカは中庸なる民主政治の下に鞏固なる結合をなし、市民は互に平和
の生活を營んで居た。彼等は尙ほ海軍を有せざりしも、有力なる民兵組織を備へて居た。彼等は聰
明にして勇氣あり熱情に富み、必要に應じてはヘレネスの自由を擁護するために、必死の争闘を辭
せざるものであつた。活動と聰明とに於ては稍劣るも、スパルタ人は世界の最も訓練あり有力なる
軍人として、國家の命には生命を鴻毛の輕きに比する訓練を有し、其の同盟國と共にヘラスの一大
軍國を作つて居た。アテネとペロポネサス同盟とは、政治と軍事とに著しき進歩を遂げて居た。間
もなく彼等は他の援助を受くることなく、強大なる波斯帝國の勢力に對抗するために出で、戦ふに
至つたのである。

第四章 知的覺醒 (約前五〇〇—五〇〇)

第七節 時代の特色一般 此の時期の希臘人は、地中海及びこれに隣接せる海洋の最も遠隔なる
地方に植民地を建設し、また此等の海洋を縦横に通商路となして居た。同時に彼等は軍隊組織を改
善し、政治の技術的方面に著しき進歩を遂げつつあつた。此等の進歩は偉大なる知的覺醒と歩調を

一にして居た。此の時代の初期希臘藝術は粗笨なるものであつた。彼等は埃及人・バビロニア人よ
りも多く有用なる知識を有せず、熟練せる産業は極めて少く、科學は何等見るべきものがなかつた。
然るに此の時期の末期に至れば、彼等は藝術に於て、産業的活動に於て、科學に於て、精神力に於
て世界第一等の國民となつて居た。吾人は本章に於て此等の著しき發達の主なる方面を瞥見するで
あらう。

第七節 建築 各種の藝術、例へば花瓶の製作裝飾・繪畫・金屬細工等は、何れも此の時代に涵養
せられたものである。然し吾人は吾人の研究を藝術最高の建築と、これと最も密接なる關係ある彫
刻とに限るであらう。

此の時代の希臘人の間に、又た實際すべての時代を通じて、建築は神殿建築に其の最高の表現を
見た。最初希臘人は神々の住所の必要を想像しなかつた。然るに紀元前第七世紀に至り、彼等はす
べての都市を通じて其の神殿を建築しつゝあつた。漸次此等の建築は均整優美に進み、終に美の模
範たるに至つた。神殿の構造を理解するために、吾人は先づ建築の三様式——ドーリア式・イオニ
ア式・コリント式に注意する必要がある。此等の様式は希臘神殿の特色たる圓柱によつて區別され
る。本來圓柱は木製のものに過ぎなかつたが、やがて石造のものを見るに至つた。

第七節 ドーリア式 ドーリア式圓柱は直接神殿の礎石(柱)の上に置かれて在る。通常それは

單一なる石塊にあらず、『太鼓形』をなしてゐる。圓柱上部の直径は底部よりも短く、而も其の太きより細きに移るには、直線的にあらずで徐々に外部に彎曲してゐる。その脹曲せる程度は後期よりも初期の神殿に著しく認めらるゝは興味を唆る。即ち彎曲を少くすることにより、著しく優美を加へ得ることが發見された。圓柱は其の地位に置かれたる後、これに上端より下方に向ひ、注意して丸溝を造る。ドーリア式は普通廿の丸溝を有してゐる。彎曲と丸溝とにより圓柱は、優美と弾力性とを備へし外觀を呈する。圓柱の上に柱頭がある。一個の柱頭は二個の要素より成つてゐる。(一)四角形の冠板 Abacus は(二)柱冠 Echinus の上にあり、圓柱よりも直径稍大なる圓盤である。初期の神殿にあつては柱冠は『椀狀』をなしてゐるが、やがて外部への彎曲を減じ、終に其の最盛時に至つて(註)曲部は著しく微弱となつた。此の變化は又た優美を増大せしことを意味する。ドーリア式圓柱はミケーネ式圓柱より發達したものである。此の様式の初期の建築には、埃及の影響を認める。その主として行はれしは希臘半島である。

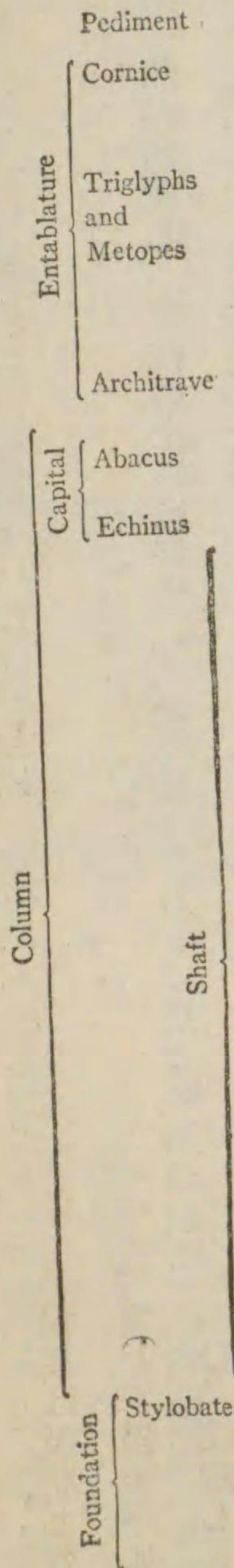
(註一) 柱廊——圓柱列の並立せる——の基礎部をスチキョバート Stylobate と稱す。
 (註二) 最盛期とはペリクレス時代である。第三節以下。

第二節節 イオニア式・コリント式 イオニア式圓柱は、小亞細亞に起原を發す。そのドーリア式との相違は、礎臺 Base の存する點にある。礎石は圓く、種々の裝飾が施されてゐる。柱身の Shaft

は膨らみ少く、而も一層纖麗である。柱身とは全圓柱より礎臺と柱頂 Capital とを除きし部分を言ふ。丸溝の數は多く——最盛時には二十四を算へた。柱頭は渦卷をなしてゐる。ドーリア式の極めて簡素なるに對して、イオニア式は常に多少の裝飾を備へてゐた。概言すれば、ドーリア式の美は



隔一の殿神アニドシボ



莊重・瀟洒にあり、イオニア式は曲麗・艶雅を極めた。コリント式は、イオニア式の更に發達せしも

のである。それはアカンタスの葉を飾りし柱頭と、一層豊麗優美なる形態とにより他の様式と區別せらる。コリント式は第五世紀に創始されしも、希臘天才の凋落せし後に至りて廣く行はるゝに至つた。

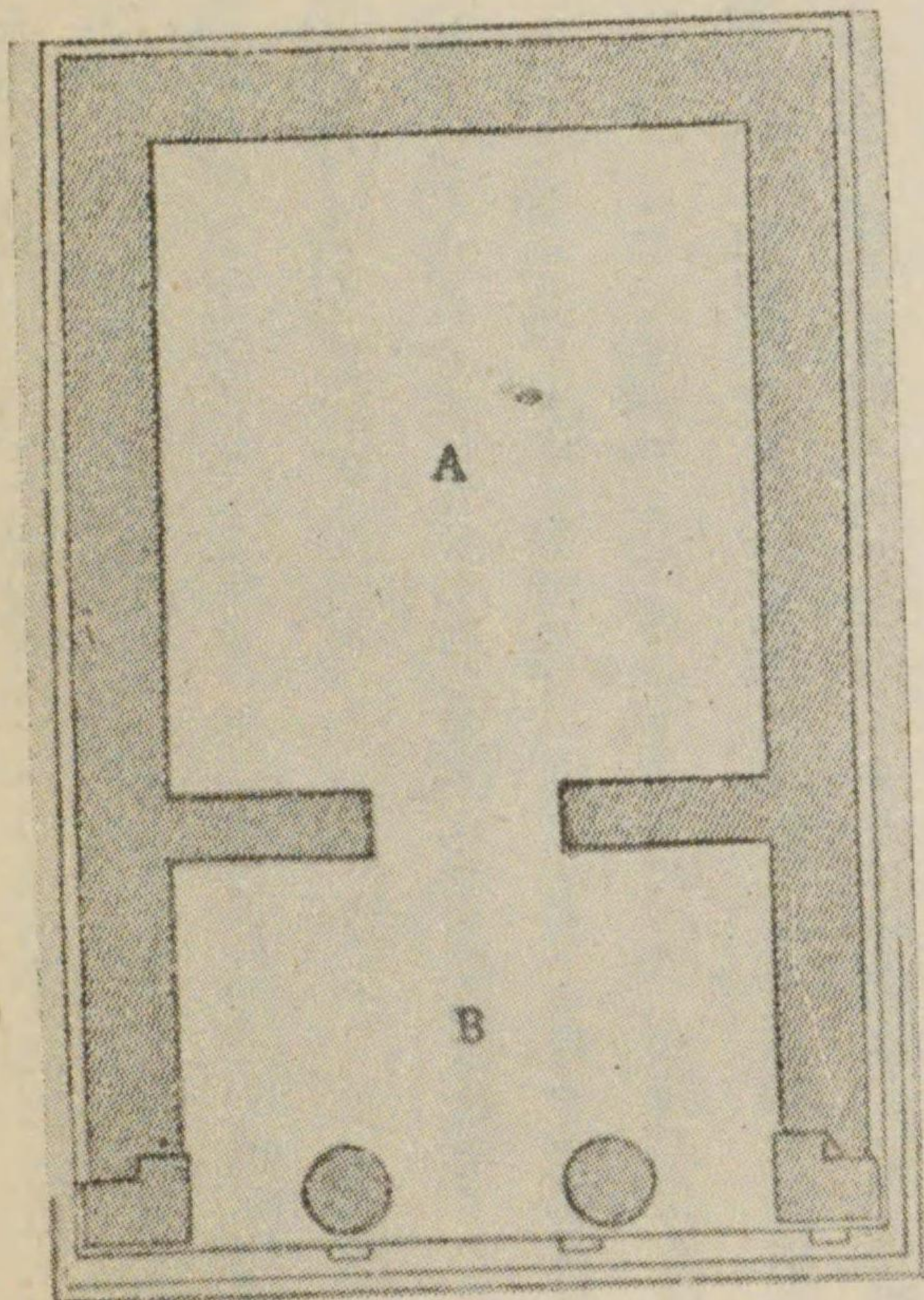
第二五節 部分的説明 圓柱の上には軒縁 Architrave がある。長き矩形の石にして、圓柱と圓柱との上に置かれ、建築の上部を支持する。それは通常平面の儘である。軒縁の上には神殿を全周する三豎筋繪様 Triglypho と、メトープ Metope とがある。何れも其の特色を備へてゐる。三豎筋繪様とは、三個の深き平行せる溝を有せる平板である。それがその名の由て來る所以である。兩側面にあるものは、建築全體に跨り天井と屋根を支持せる梁 Beam の兩端を蔽うてゐる。メトープ「中間にある」は、二個の三豎筋繪様の中間に在るを以て、斯く稱へらる。これは三豎筋繪様と同様の石板にして、全然平面の儘か或は單純なる繪畫か、若くは普通多くの場合には浮彫の裝飾を附する。浮彫は石の全面を背景として、浮出し彫刻の人物を配置す。低彫 Low relief は浮出し少く、高彫 High relief は浮出し顯著である。三豎筋繪様とメトープにてドーリア式長押 Frieze を作る。長押の上に蛇腹 Cornice (註)がある。イオニア式長押は、建築の周圍全體に續く浮彫の縁である。イオニア式神殿にてはこれが三豎筋繪様とメトープとの代用となる。然し柱廊 Colonnade を以て圍まれし建築にありては、イオニア式長押は圓柱の後にある神殿の壁に置かれる。切妻 Pediment は

破風 Gable である。これは通常高彫若くは全部浮出しの人物を以て裝飾されて居る。

(註)

ドーリア式の長押、蛇腹、軒縁を以てエンテブレチユア(長押 Entablature)を作る。フリーズ(Frieze 長押)に形容詞を附せずして用ゐたる場合には、イオニア式の長押を意味する。

第二七節建築 最古の單純なる建築は、矩形の一室(セラ Cella)に、一個の扉を附したものであつた。側面の壁は前方に延び、扉の前面と前房を作る(註)。兩壁の中間に二個或は二個以上の圓柱を置くこと圖に示す如し。セラは神像を置くところである。神殿は本來禮拜の場所でなく、神の住所であつた。犠牲に使用する道具と神



A 干の貯藏室を背後に附加することがある。吾人の現在研究しつつある時代の後期に、神殿は周圍に圓柱を列立し、これによつて一層美化された。B 斯くの如き柱廊をペリスタイル Peristyle といふ。

最初の神殿は木造であつた。後に

は石灰石を使用した。この場合には石を白漆喰にて塗り、これに繪畫を描いた。紀元前第六世紀の後半に至り、希臘人は大理石を使用し始めた。此の時代の最もよく保存された神殿は南伊太利の希臘植民地ポシドニア Posidonia の神殿である。これは簡素・莊重なるドーリア式圓柱を備へし堂々たる建築である。

(註) 此の種の前方に伸びし壁の末端にある方形の柱は、ラテン名にてアンタ *antae* と稱せられる。由つて斯の神殿をアンタの神殿 *Temple in antis* と稱す。若し前房が更に後部にもあれば、この建築はアンタの二つある神殿 *a double temple in antis* である。

第二七節 彫刻 主なる彫刻に二種ある——上述せし浮彫と彫像とである。初期の浮彫の一例として、紀元前六〇〇年頃シシリーのセリヌス *Selinus* にある神殿のメトープを擧げることが出来る。このメトープの一には、ペルセウスがメツサの首を斷つところがある。彼の背後には保護の女神アテナが立つて居る。此は極めて粗笨なる作品である。頭・腕・足は餘りに大きく、身體は曲り、眼は凝視し、顔面は表情を缺ぐ。他の一例はスバルタ人と其の妻の墓石の浮彫〔原著にはその「寫眞版を掲ぐ」である。此等の作品は其の時代のものとしては賞讃に價すべきも、後代に見る如き完全を缺いてゐる。同時に當時の彫像も亦蕪雜なるものであつた。其の一例はデロスにて發見された婦人の像である。これは「長き扁平なる大理石塊」にて、兩端は幾分丸くなり、腕は側面に垂れ、頭部も毛髪も粗野な作風を示してゐる。而も此の時代には著しき進境が認められる。吾人は其の例として此等の初期の人物と、武士アリスチオン *Aristion* の墓石の浮彫と、アクロポリスに於て發見された婦人像の一事を比較すれば足る。兩者共にアテネの僭主時代に製作せられたるものである。特に後者は人體に就ての知識の進みしこと、身體及び衣服彫刻の技術の著しく進歩せしことを示す。此等の二作品は明かに希臘の天才を示してゐる。

〔譯者註〕 原著には本節に作品の寫眞を掲記せるも、これを轉載する能はず、總て省略した、請ふ諒せよ。

第二八節 宗教思想の進歩・神託と占ト 希臘人がかくの如き藝術上の進歩を遂げし一大動機は宗教であつた。神とは完全なる人體を備へし男女の偉大なるものなりとの信仰と、神は適當なる禮拜を行ふものに保護を與ふとの信仰とは、建築家・彫刻家に刺戟を與へた。希臘精神は未知の世界を探り、神の性質と神と人類との關係を知り、且つ神と密接なる接觸を試みんとするに至つた。

されば此の時代には、ヘラスの至るところに先づ多くの神託所が作られた。デルフキのアポロの神託については、既に前章(註二)にこれを述べた。而も希臘人は遙々とこの地に旅行せずして、神意を探知する必要を感じた。時としては鳥の飛翔に神意の表現を見た。然し彼等の最も便宜とする占トは、バビロニアのそれであつた——犠牲に供したる動物の内臓を檢查することである(註三)。この習慣は此の時代に、吾人の窺知し得ざる經路を取つてバビロニアより傳はつた。今後希臘人は戰爭

その他の重要な計畫をなす前に、この方法により前途を卜つた。

(註一) 第二三節

(註二) 第三節、これより以前にエトラスカ人は同じ方法を用ゐてゐたが、これは別個の發達をなした。

第三五八節

第二七九節 オルフエウスとエレウシスの祕法 希臘人は神意を知る方法を知つてゐたが、而も彼等には尙ほ強い二個の欲望があつた。即ち(一)神と個人的關係をもつこと、(二)未來生活の幸福を求めることである。この欲望は外國の宗教——オルフエウスの祕法によつて充たされた。この祕法はトラキアの神祕的豫言者にして兼ねて音楽者なるオルフエウス Orpheus より傳へられたもので、葡萄と葡萄酒とを象徴とし、自然の生命の神ディオニソス Dionysus 崇拜を中心としてゐる。オルフエウスの祭司はヘラスを縦横行脚して改宗者を作り彼等に祕法の手ほどきをした。祕法の主なるものは、夜間山頂にて啓示される。入門者は松明を振り、笛・鐘の音に和して亂舞する。斯く狂氣の如くなりし彼等は、自ら神なりと想像して幸福なる未來生活の豫想をする。祕法の手ほどきを受けし後、彼等は禁欲の生活を營み、肉食を斷ち自ら宗教的清淨を維持せねばならなかつた。斯くして彼等は未來の無限なる幸福のために準備をした。

其の他の祕法は多く外國に起源を發するものであるが、アツチカのエレウシス Eleusis に於て發

達した。これは地神 Earth-mother デメター Demeter 崇拜と關係がある。ヘーヅは彼女の姉ペルセフォネ Persephoney を無理に地下の暗黒に伴ひ去つた。母は悲しみの餘り、全地に沍寒と不作とを與へた。彼女は其の娘を求めて漂浪し、エレウシスに來り國王の家庭に迎へられた。此處で娘は彼女に還されたが、然し一年の四個月——冬季だけは、ヘーヅの王妃として同棲する約束をした。これは本來夏と冬との變化を示す自然神話である。然しこの時代には、この物語は死と復活とを象徴するものと解釋された。ディオニソス崇拜は、オルフエウスの祕法と結びつき、その特色と共に愈々行はるゝに至つた。エレウシスの大祝祭は、毎年九月に開かれる。すべてのアテネ人——長官と祭司とは式服を著け市民は晴衣を纏ひ、アテネよりエレウシスに至る聖路をば行列をなして進んだ。こゝで彼等は公式の祝祭を設け、農業の女神・文明の創始者デメターを祀り、祕法の修驗者は密かに神祕的儀式に参加する。その儀式のうちには受難劇も行はれ、デメターが娘をヘーヅに奪はれし悲哀と、これを恢復したる歡喜とを演出する。信者はこれを以て死の悲哀と、死後の世界に於ける復活の歡喜とであると思つた。すべての希臘人は、男女・奴隸・自由民たるを問はず、平等に祕法の傳授を受くる権利があつた。

第二八〇節 知識の進展・文字の使用 オルフエウスの祭司は其の信仰を熱心に弘めし結果、紀元前

第六世紀には全く希臘人の精神を把握するに至つた。斯くの如き事情は希臘人をして明かに政治・

社會・藝術・科學等、既に彼等が着手せし諸問題を解決する適性を缺くに至らしめた。幸にして彼等の神祕的宗教に對する熱心は、知識の進展によつて償はれた。彼等は文字を使用し知識を集積するに至つた。

希臘人は叙事詩時代の初期に、早くもフェニキアの音標文字を採用し、同時に幾分これに改善を加へしことは上述せし如くである(註)。紀元前約七〇〇年頃、彼等はこれを用ゐて毎年の長官の名簿を記録し、間もなく法律其の他の文書にこれを使用するに至つた。されば吾人は希臘の歴史時代はこの時期に始まると言ひ得る。第七世紀には作詩の發表あり、第六世紀に至れば更に多くの詩がある。文書は別としてそれ以外の散文は、この時期に特記すべきものはない。

(註) 第五節

第八節 ヘシオド・個人詩の端緒 此の時期の最初の文學者は、ボエオチアの叙事詩人ヘシオド Hesiod(前約700)である。彼は『テオゴニー』Theogonyを著し、平易なる文章を以て神々の系圖と世界の創造(註一)とを記した。更に彼の叙事詩『勞働と日』Works and Daysは農業に關する有用なる知識を農夫に與へてゐる。それは勤儉を奨励し道德的教訓に富んでゐる。ホーマーは其の詠する一切の事物を理想化せんとするに對し、ヘシオドの目的は單純なる眞理を談ずるにある。ホーマーは遠き過去の英雄を讚美し、ヘシオドは日常生活の人々を説いてゐる。

初期の叙事詩は其の著者に就て殆んど語るところがない。然しやがて詩人が自由に自己の思想感情を表現すべき時が來た。個人詩は斯くして勃興した。其の隆昌時代はヘシオドの時代より、波斯大戦争の終りまでである(前七〇〇—四七九)。

悲歌 Elegyは個人詩の最初の形式である。それはイオニアに勃興し、本來軍國制的のものであつた。最もよく知られた軍國詩人の一人は、第二メッセニア戦争(註二)と關聯して述べしスパルタのチルテウスであつた。ソロンは民衆に對し彼の政見を發表する手段に悲歌を用ゐた。悲歌の外チルテウス及びソロンは各種の詩を作つた。

(註一) 第二〇六節 (註二) 第二四三節

第九節 叙情詩 個人詩最高の形式は、立琴 Lyreの伴奏歌即ち叙情詩 Lyric poetryである。叙情詩人は歌詞と共に作曲もした。此の詩の主なる形式は二つあつた。即ち民謠 Balladと合唱歌 Choral odeとである。民謠の發祥地はレスボス(註一)である。レスボス詩人の代表者は偉大なるアルケウス Alcaeusとサツフォ Sapphoとである。共に紀元前第六世紀の初期に屬する。アルケウスは『火の如きエオリアの貴族』にして、戦争・冒險・黨争・戀愛詩・飲酒歌・讚美歌を作り、多藝多才の詩人であつた。『董の冠を戴き、純情にしてしなやかなる微笑を湛ふるサツフォ』と友人アルケウスが言ひし彼女は、其の天才に於て彼と匹敵した。古代人に取つてはホーマーが唯一の『詩人』たりし如

く彼女は又た唯一の『女詩人』であつた。又時として世人は彼女を『藝術の第十神』The tenth Muse と稱した。

民謡は個人の唄ふ單純なる詩歌である。然し合唱歌は公衆的であり、訓練せる合唱隊によつて舞踊と音楽とに合せて歌ふものである。最も有名なる合唱歌の作者——恐らく世界最大の純眞なる叙情詩人——は、ポエオチアのピンダール(前五三—四八)であつた。彼は祭司の家庭に生れ、幼時より神話及び宗教的訓育のうちに養はれ、従つて彼の詩は此等の資料より成つてゐる。現存せるものには、國民競技の優勝者の榮譽を讚美せしものがある。合唱歌は普通優勝者の家庭若くはその出身都市の歴史と關係ある神話を述べ、其の高貴なる門地、その富・正義其の他の徳を頌してゐる。此等の詩は翻譯にては容易に理解し難きも、これが研究は充分に其の努力を償うて餘りがある。其の文體は大膽・奔放、且つ生命の躍動に充ちて居る。其の詩句は寶石の如く燦然として輝き、徹頭徹尾莊重を極めて居る。

上記の外、希臘の各地方には有名なる多くの詩人があつた。然し彼等の著作は、或は全く湮滅に歸し、或は僅かに斷片を残すに過ぎぬ。アルケウスすら唯其の斷片を残すのみである。吾人はサッフォの詩二篇と其の斷片とを有してゐる。ピンダールは此の時代のすべての詩人中最も幸運なるものである、彼の傑作は今日に傳はつて居る。

(註) 第九二節

第二三節 科學の發端・哲學

詩人は思想家であつた。彼等は何れも文明の進歩と共に、日々複雑となる人生問題に夫々獨自の解決を試みた。而も彼等は事物の原因を常に超自然に求めた。例へば四季の循環は、デメター及びペルゼフォン Persephone (註) の物語を以つてこれを説明した。然しソロンの時代に至り若干の知識ある希臘人は、事物の説明を自然の原因に求めた。彼等は科學者であつた。希臘科學の創立者はターレス Thales であつた。彼は當時ヘレネスの商工業・知的生活の中心たりしミレトスに生れ、埃及を訪れて科學的知識を齎したと言はれて居る。彼は數學者にして天文學に通じ、日蝕を豫言することが出來た。彼が星を眺めつ、井戸に墜落せし物語は、いかに哲學者の非實際的なるかを證する逸話である。吾人は哲學なる文字を希臘人に使用する場合に、彼等の科學並に更に抽象的なる宇宙の本質及び原因等の大問題に就ての思索をも其中に含ませてゐる。ターレスは水を根本の物質とし、一切萬事水より成ると考へた。これは確かに誤謬である。然し彼が事物の原因を超自然より自然に求めた一事は、彼を希臘哲學の創始者たらしむるものである。

彼より以後に多くの哲學者が出現した。特に注意すべきはピタゴラス Pythagoras である。彼は數學を力説した。多くの彼の門下生 Pythagoreans は祕密結社を作り、禁欲生活を送り、又たオルフェウスの信仰を採り入れた。ピタゴラスの思想は、若し適當なる統制を以てするなれば、彼の

派は神祕的幸福を認容するにあつたかと思はれる。ヘラスの知的覺醒は、一般に神祕主義の發達を妨げ、人類に關係ある一切の問題を明確に思索する道に進んで行つた。

(註) 第二五節

第二四節 ヘラスの統一

此の時期に至り、希臘人は先づ民族としての統一を意識するに至つた。こは商業と旅行とにより、單一の國語と宗教とにより、デルフキの國民的神祕を有すること、及び國民的大競技に参加することにより、又た國民文學の發達によつて到達したる事實である。この統一感は更に彼等が『野蠻人』と稱する外國人との戰鬪により緊張した。元來此の『野蠻人』なる言葉は、その言語を理解し難き人民を意味した。然し希臘人が他國民よりも自己の優越せることを發見するや、彼等はこの言葉に現在の英語の有つ意味を附するに至つた。されば此の時代に希臘人は、其の精神と其の同情とに於て一體となり、共通のヘレネスを以て自ら稱するに至つた。

第二章 リヂア人と波斯人の亞細亞希臘征服(前五六〇—四五〇)

第二八節 イオニア人の特質

アテネ人はラセデモン人と同じく、政治と戰術とに達成したけれども、文明の玄妙なる要素に於ては小亞細亞の希臘人よりも遙か劣つてゐた。エオリスとイオニアとは、希臘最初の大詩人の故國であつた。最古の地理學者・歴史家・哲學者はイオニア人であつた。この同一民族は又た有用なる發明を試みた。即ちイオニア人は初めて貨幣を鑄造し、彼等の船舶は地中海を埃及よりマツサリアまで往復した。彼等は五百年間(前一〇〇〇—四五〇)ヘレネス文明の旗旗を高く掲げたのであつた。

イオニア人は斯く驚嘆すべき多くの卓越せる性質を備へたるに拘はらず、政治的能力を缺いで居た。彼等は社會的に協同一致すること殆んど稀にして、有力なる國家を結成することを考へなかつた。彼等は其の都市の完全なる獨立を好み、夏季の娛樂として隣國と戰を交ふることを特權としてゐた。而も彼等は商業國民として長く軍務に服するを好まず、彼等の性格は又た彼等の政治的失敗であつた。されば彼等が、一個の完全なる支配意思に、盲目的に服従する亞細亞帝國の人民に比して劣れるは怪むに足らぬ。

第二六節 リヂア王クロエス(前五六〇—四五〇)

亞細亞の希臘人は近隣に強大なる國家の存せざる間は自由であつた。然るに亞細亞内地にありしリヂアは漸次強大となり、紀元前五六〇年クロエスの王位に即くや(註二)、希臘人の價値を認めこれを臣下に加へんと欲するに至つた。而も彼等が一度これに反抗するに及び、武力を以て容易に彼等を征服するを得た。然し彼は勃興しつゝ、ある波斯の勢力に對抗する爲め、希臘人の善意と援助とを必要とせし結果、彼等に善政を施して好遇し、或は高貴なる贈物を彼等の神々特にデルフキのアポロ(註三)に獻け、彼等の心服を贏ち得た。クロエスの治

世にリヂアは富と権力との絶頂に達し、その寶庫はリヂアの諸川と其の征服都市より貢獻せる砂金を以て充滿した。最も富める彼は自ら世界の最も幸福なるものと考へ、その帝國はハリス Halys 河以西の全小亞細亞を掩有してゐた。而も、そはやがて更に廣大なる波斯帝國の一部となり、幸福と自信せし國王は、幽囚のうちに一生を終るべき運命にあつた。

(註一) 第三節 (註二) 第二三節

第二七節 波斯王キルスと希臘人との關係(前四五六—四五九)

曩きに、波斯王キルスがメディア帝國を征服し、次でクロエスを敗り彼を捕虜とせしことを述べた(註一)。クロエスの恩寵に浴し且つ戰爭に當り彼を援助せしイオニア人は、キルスに對しクロエスと同様の條件にて降服するを求めた。然るにキルスは怒つてこれを拒絶し、尙ほ彼等の送りし使者に笛手と魚との物語を告げた。曰く、「昔一人の笛手があつた。一日海岸を歩くうち魚を見つけた。彼は魚が陸に上り來るものと思つて笛を吹き始めた。然し彼は終に其の無益なるを知つて網を取り出し、一網打盡して數匹の魚を陸に引き上げた。魚は啼泣して躍り始めた。然し笛手は言つた、「躍るのは止めて呉れ、私が笛を吹いた時お前たちは躍らなかつたではないか」と。』イオニア人はキルスが有利なる條件を與へざるを見、都市の周圍に城壁を築き會議を開きて防禦の方法を講じた。彼等は先づラセデモンの援助を求めた。彼等の代表者はスパルタに達し、出來る限り多數の聽衆を惹きつけるため、其の一人は紫色の外衣をつけた。

た。彼は長廣舌を揮つてラセデモン人の援助を求めたが、それは失敗に終つた。スパルタ人は長談義も紫の外衣も好まず、且つ當時彼等はキヌリア Cynuria の所有(註二)をアルゴスと争つてゐた。然し彼等は亞細亞にある同族に同情を表し、キルスに對しヘレネスの都市に害を加ふれば災厄彼の身に及ばんと警告した。然し彼がこの警告を軍使より受けし時、彼は左右にありし希臘人に對し、斯くの如き通牒を敢て送りしラセデモン人とは何人ぞ、其の數幾許ぞと訊ねた。彼は彼等の答を聞きたる後、スパルタの軍使に向ひ、「予は未だ嘗て都市の中央に坐し、互に欺き又た偽るものを恐れしことなし。予の生くる限り、スパルタ人はイオニア人とは關係なく、必ずや後世に語り傳ふべき苦痛を滿喫するに至るべし」と。キルスの言葉は、すべての希臘人に對する非難であつた。彼等は波斯人の全く知らざる市場取引の習慣ありしが故である。波斯人は市場にて賣買せず、全國を通じて一個の市場をも有してゐなかつた(註三)

キルスは小亞細亞の希臘人征服の軍を残し、東方に歸還した。希臘都市はその自由を擁護するために結束する能はず、漸次波斯軍に降つた。

(註一) 第五章波斯史、第三—六九節を参照せよ。

(註二) 第一四節 (註三) ヘロドタス第一篇一五三 Herodotus. i. 153.

第二八節 波斯王カムビセス(前四五元—四五三)とダリウス(前五三二—四八五)

波斯人の壓制はリヂア人よりも苛酷であ

第一五章 リヂア人と波斯人の亞細亞希臘征服

つた。蓋し波斯王は希臘都市を僭主の統治に置き、彼等を通じて新附國民の服従を期待し、尙は彼等は朝貢の外に波斯軍隊にも勤務しなければならなかつた。斯くしてキルスの嗣子にして後繼者なるカムビセスは、彼等に埃及征服(註二)の援助を求めた。次いで國王ダリウスはスキチア征服の爲め大軍(註三)を率ゐて歐羅巴侵入を計畫せし時、希臘都市の僭主等に對し、六百艘の船舶と乗組員との提供を命じた。彼は希臘人技師の建設せし船橋を通過してボスフロラスを渡り、同時に僭主等は其の艦隊を率ゐてダニューブ河を溯り、船橋を架してダリウスの通行を容易ならしめた。そはスキチア人が定住せず、ダニューブ河及び黒海の北部を漂浪せし民族なりしが故である。希臘人に取て斯くの如き強制的勞働は苦痛であつた。歐羅巴に在る同族が自由の世界に生活せるに反し、斯く波斯人の奴隸たることは彼等の耻辱とせしところである。僭主のうちには彼等の意嚮を察し、其の監視下にある橋架を破壊し、ダリウスの歸路を斷たんとまで提案した。其時アテネの植民地ケルソネス Chersones の僭主ミルチアデス Miltiades はこの計畫に賛成した。然るにミレトスの専制君主ヒステウス Histiaeus は僭主等に對し、若し彼等が波斯王の援助を失へば、人民は彼等を放逐すべしと説き、彼等を語らひこの計畫に反對するに至つた。ダリウスの遠征はトラキア及びマケドニアを波斯帝國に併合し、テッサリーの國境に及んだ。

(註一) 第六四節

(註二) ヘロドタスの計算(第四篇八七) Herodotus, iv, 87 に「よれば七十萬と言ふ——」は疑もなく誇張の言である。遠征の理由については第六五節を見よ。

第二八節 **イオニアの叛亂** (前四九) 其の端緒 國王はヒステウスの忠誠を嘉し、彼をスーサ(註)に招きこゝに其の餘生を送らしめた。宮廷の生活は野心ある希臘人に取つて亡命に異ならざる苦痛であつた。されば彼は歸國を欲し密使を當時ミレトスの僭主なる義子アリスタゴラス Aristagoras に送り叛亂をすゝめた。アリスタゴラスは敢て義父の勸説を必要とせず、既にその手段を考慮しつゝあつた。彼は曩きに波斯人に對し、ナクソス Naxos の征服を約してその援助を得た。而も彼の計畫は失敗に歸し、將に違約の故を以て罰せられんとしてゐた。由つて彼は近く勃發せんとする叛亂を指導する決心をなし、先づ第一歩として僭主政治を廢し、ミレトスに民主政治を興へた。次いで彼は附近の僭主を仆し、數週ならずして全イオニアを擧げてダリウスに叛抗すること、なつた。

(註) 第六節註三

第二九節 **アリスタゴラスとスパルタ及びアテネ** (前四九) アリスタゴラスは同盟國を求むるためにその冬を過した。彼は先づスパルタに行き、國王クレオメネスに語りて曰く、「イオニア人の同胞が自由を失ひて奴隸たることは、實に吾等すべてに取りて耻辱であり又最も悲慘なる事である、

第一章 リチア人と波斯人の亞細亞希臘征服

特にヘラスの覇者たる卿等に取つては、他國民よりも更に痛恨のことであらう。されば予は卿等に求む。ヘラスの神々に誓つて同族たるイオニア人を奴隸より救ひ出すことを。而もこれは容易に實行し得る。蓋し彼等外國人は戦闘に勇敢ならず、これに反して卿等の勇氣は最高潮に達してゐる。彼等は弓矢と短劍とを以て戦ひ、その戰場に赴くや袴を着け帽子を冠る。斯くして彼等は容易に征服せられ得る。更に大陸に占據せる彼等は、世界の他の國民よりも巨富を有す。先づ金、次で銀・青銅・刺繡せる上衣・牛馬・奴隸すべて卿等これを欲せば、思ふが儘に所有するを得ん〔註〕。

アリスタゴラスは更に進んで銅版上に刻寫せる地圖を示し、亞細亞國民の位置を指摘した。これスバルタ人の始めて見しものである。彼はラセデモン人に波斯帝國の容易に征服せられ得ることを説明せんと試みた。『イオニアの海岸より波斯の首府まで旅程幾許ぞ』とクレオメネスは訊ねた。『三個月を要す』とアリスタゴラスは不注意にも答へた。スバルタ王は突如これを遮つて曰く、『ミレトスの客人よ、日没前にスバルタを去れ。卿が海を距て、三個月を要する旅行に、ラセデモン人を伴はんとする言葉は我等の耳に快感を與へぬ』と。アリスタゴラスは更に巧言種々彼を味方にせんと試みたが、時に王の娘當時八九才のゴルゴ Gorgo の阻むところとなつた。曰く『父よ、この外國人を却け給へ、然らざれば彼は卿を害すべし』と。

よりてアリスタゴラスはアテネに赴き、ここに彼は容易に其の使命を達成するを得た。アテネ人とイオニア人とは親近なる血族であり、且つ密接なる商業關係にあつた。而して最近サルヂスの事はアテネ人に對し、若し彼等が破滅を免れんと欲するなれば、ヒツピアスを僭主として歸國せしめよと命じた。彼等はこれを拒絶した。其の結果彼等は波斯と戦争状態に入りしものと感じた。されば彼等はイオニア人を助くるため二十隻の船艦を派し、隣國エレトリアは五隻を送つた。

〔註〕ヘロドタス第五篇四九。Herodotus, v, 49 此の演述は事實を忠實に要約せしものである。唯波斯人は決して斯く臆病にあらず。第六節。

第二節 叛亂の鎮定 (前四九)

同盟軍は小亞細亞に於ける波斯の最も重要な都市サルヂスを陥れこれを焼いた。然るにイオニアへの歸途、波斯人はエフェサス附近に彼等を攻めこれを敗つた。こ

の敗北これによりアテネ人は全く失望して本國に歸り、爾來何等の援助を與へなかつた。サルヂスの燒燬に刺戟されし他の亞細亞希臘人は、奮つてこの叛亂に参加した。同時にダリウスも亦これが鎮壓に懸命となり、特にアテネとエレトリアとの行爲に憤激した。決戦はミレトスの沖ラーデ Iade にて行はれた (註四)。希臘人は三五三隻の軍船を有し、波斯軍に仕へしフェニキア人は六百隻を率ゐて居た。若し希臘人にして眞精神を發揮したならば、勝利は彼等に歸せしに相違ない。然るに彼等は結合力を缺き、敵の間策に乗ぜられた。戦闘の開始後間もなく多くの船艦は欺かれて去り、數隻は止まつて勇敢に戦ひしも終に敗北した。協同一致の抵抗は終を告げた。個々の國家は

相次いで征服され、或は攻撃を避けんが爲め進んで降服した。四年の包圍の後ミレトスは陥落(註)し戦争は終熄を告げた。波斯人は掠奪を行ひ、神殿と共に都市を焚き、人民を捕虜として伴ひ去つた。斯くしてヘラスの最善都市、歐羅巴文明の建設に多大の貢献をなせしミレトスは存在を失つた。其の後この地は再び希臘人の來住を見たが、昔の榮華を恢復する由もなかつた。

ダリウスの歐羅巴遠征(註)は、イオニア人に倣つて叛亂せしトラキアの征服となり、イオニア叛亂の鎮定後、波斯人は直ちにトラキアに向つた。フェニキアの艦隊がケルソネス Chersones に近づくを見て、統治者ミルチアデスは大船 Triremes (註)に財寶を載せ逸早くも逃走した。フェニキア人は急にこれを追求したが、彼は安全にアテネに到着した。

(註一) 第二八節

(註二) この船の詳細に就ては第二〇〇節註参照。

第一五節 アテネに及ぼせし戦争の影響 ミルチアデスは其の本國都市がイオニアに於ける最近の事件の爲め沸騰せるを見た。ヒツピアスの近親ヒツバルカスの率るし有力なる一派は、亡命せる僭主を召喚してダリウスと平和條約を締結せんとし、必要に應じては波斯國王に降伏の象徴として「土と水」を送るを辭せざる有様であつた。僭主派に反對する共和黨はクリステネスの政體を維持し、波斯に對して國體擁護の爲め一戰を辭せざる準備をした。彼等は其の首領にして驚くべき精力と數智しを備へしテミストクレス Themistocles を紀元前四九二年のアルゴンの海戦に導き出した。アテネ人は其の艦船を防備なきファレルム Phalerum 灣に碇泊させて居た。然るにテミストクレスは其の在職期間の一切を擧げて、ピレウス Piraeus に三重の港を完成するに努め海上の軍備を整へた。彼は波斯戦争の終に避くべからざるを信じ、アテネは海軍根據地と有力なる海軍を有せざるべからずと考へた。蓋しアテネは陸上に於て波斯陸軍と戦ふのみならず、海上に於てもフェニキア、亞細亞希臘聯合艦隊と戦ふ必要があつた。

第二九節 ヘラスの戦備(約前四九三)

ヘラスは來るべき波斯戦争に、甚しく不利の地位に立たねばならなかつた。そはヘラス全土が協同一致の行動をなす能はざりし故である。多くの國家のうちには波斯に味方する有力なる徒黨もあつて、彼等の多數は恐怖の餘り直ちに屈服した。アテネと商業的競争者たるエギナは、「土と水」を波斯王に送り、スパルタを好まざるアルゴスは波斯の主張に味方した。ペロポネサス同盟のみは統一を保つた。この同盟は大多數のペロポネサス國家の外にアテネをも含み、其の後數年間に中央希臘及び附近の島嶼にある若干の小國家をも(註)加ふることとなつた。而も同盟軍はその國土と戦士の數と富とに於て、其の最大の場合を想像するも、波斯帝國に比して膏壤の差があつた。ダリウスは大軍を希臘に送り、唯一戰により一切の抵抗を粉碎せねばならぬと考へ、多數の希臘人も亦同様に考へた。然し戦争は多數人の想像せし如くに、均衡の取れぬも

のではなかつた。波斯人は本國を遠く離れて戦ふの不利があつた。更にヘレネスの武具と軍事組織とは、遙かに波斯人に優つてゐた。若し夫れ都市國家の制度は、其の最善の場合に最も強大なる抵抗力を有することも亦事實である。帝國は一戦にして崩壊し得べけんも、小都市國家の同盟は希臘の如き一國の獨立を賭する場合には、殆んど征服し難きものである。

(註) 第二節
概要

(一)小亞細亞のイオニア人は世界未曾有の文明を創造した。(二)而も彼等は政治的の統一を缺ぎし、リヂア王クロエネスの支配を受け、其の優遇に浴した。(三)其の後間もなく波斯王キルスは、クロエネスを征服しリヂアを併合した。(四)イオニア人は降伏を肯ぜず、由て波斯人は彼等を征服した。(五)波斯王はイオニア都市の僭主政治に味方し、軍務と正規の租税とを彼等に課した。(六)ダリウスの歐羅巴遠征は、トラキアとマケドニアとを加へた。(七)亞細亞の希臘人は叛亂を起し、アテネ及びエレトリアの援助を受けた。(八)希臘人のサルヂスを燒毀するや、ダリウスは其の帝國に叛亂を煽動する歐羅巴希臘人の刑罰を必要とするに至つた。(九)希臘人はラーデ沖の海戦に敗れた。(一〇)ミレトスは包圍の後終に陥り、破壊された。(一一)アテネは必然來るべき波斯の侵入に對する準備をはじめた。(一二)而も尙ほ歐羅巴希臘人は、一般的の防備問題を考慮するに至らなかつた。

第二章 波斯及びカルタゴ戦争 (紀元前四九一—四四九)

第一款 第一回及び第二回の遠征

第二節 戦争の原因 簡単に戦争原因を述べれば、(一)波斯王は初期のアッシリア王(註)の如く、征服せる都市の掠奪と、被征服國民に課する歳貢とにより、利するところ甚だ大なるものがあった。(二)さればイオニアの屈服後、波斯人が附近の島嶼及び希臘半島の他のヘレネス國家の征服を考ふるに至りしは自然である。(三)而もイオニアが叛亂を起し、アテネ及びエレトリアの援助を受くるに及び、ダリウスはエーゲア海の彼方にある干涉的なる同族を征服するにあらざれば、長く亞細亞國民を服従せしめ得ざることを悟つた。(四)サルヂスの燒燬に激怒せしダリウスは、アテネ及びエレトリアを主なる責任者と做しこれが復讐を決心した。(五)此等の動機に加ふるに、希臘人の臣下としての價値を認めしことである。ダリウスは彼等が船舶を建造し、或はこれが乗組員となり、又た彼のために勤勞を嫌はざること尙ほイオニア人の如く、彼等のうちより建築家・畫家・彫刻家を得て首都を美化せんと期待したのである(註)。

(註一) 第三節 (註二) 第二節第六節參照

第二節 第一回遠征(前) 第一回の遠征軍は、ダリウスの養子マルドニウス Mardonius に率

第一六章 波斯及びカルタゴ戦争

るられトラキアに進んだ。糧食は主に海岸に沿うて随従する艦隊より供給を受けたが、マウント・アトス Mount Athos を廻航する際、艦隊は破壊覆没し、同時に軍隊は土人の慘殺するところとなつた。マルドニウスは希臘半島の征服を豫期せしに、僅かにトラキアを恢復しマセドンの降伏を得たに過ぎぬ。彼の失敗は波斯宮廷に於ける彼の名聲を失墜せしめた。

ダリウスは更に次の遠征隊を準備し、他方尚ほ獨立せる希臘都市に軍使を派し、「土と水」を求めた。ダリウスは進んで降伏するものをも攻撃する必要なしと考へた。而もアテネは王の軍使を溝に投げ入れ、スパルタは其の一人を井戸に投げ、勝手に土と水を持ち歸れと言つた。此等の行爲は、軍使を神聖不可侵とする國際法の違犯であつた。斯る暴行を敢てせしアテネ及びスパルタ人は、波斯王が決してこれを寛容するものにあらずと信じ、國家存亡の戦争の避くべからざるを考へてゐたに相違ない。

第二九節 第二回遠征の開始 (前)

マルドニウスの失敗後、希臘征服の成否はダリウスに取つて名譽の問題であつた。彼は前回の不幸なる經驗に徴し、陸路は餘りに遠く且つ困難なるを悟り、數月を必要とする陸上の行軍に比すれば、艦隊を以て直接エーゲア海を横斷すれば數日にして足りる。由て彼は第二回の遠征には海路を取ることとした。紀元前四九〇年の夏、六百隻より成る波斯艦隊は、可なりの時を準備に費したる後西方に向つて海上を進み、行く行く途中の島嶼の集積を避けた。

デア人ダチス Datis 及びダリウスの同族アルタフェルネス Artaphernes 此れが指揮に任じ、イオニアの叛亂を助けしアテネとエレクトリアとを膺懲し、出來得る限り廣大なる土地を征服するを目的とした。

先づ波斯軍はエレクトリアを包圍した。この都市は勇敢に防禦を試みしも、六日の後二名の市民によりて裏切られた。悲報を齎したエレクトリアの避難者は、反抗に燃ゆるアテネを見た。其の重甲歩兵は武器(註一)に習熟し、且つアテネは幸にして其の年の將軍のうちにミルチアデスを有して居た。彼はケルソネスの統治者として其の技量を現はし、波斯人の戦術を知悉してゐた。彼と他の將軍とは敵のアツチカに近づくと聞きて全軍を集め、且つ走者フキヂツピダス Phidippides をスパルタに派して援助を請はしめた。彼は百五十哩を一日にて突破し、スパルタの官憲に向つて言く、「ラセデモンの人よ、アテネ人は卿等の急援を求む、希臘最古の國家をして、野蠻人の蹂躪に委ぬる勿らんことを。卿等見よ、エレクトリアは既に拿捕せられんぬ。希臘は聲名ある都市の喪失によつて弱國となつた」(註二)。ラセデモン人はアテネの援助を希望した。然し出發には數日を待たねばならなかつた。満月前の戦争は法の禁するところであつた。

(註) 第二九節 (註二) ヘロドタス第六篇一〇六 Herodotus, vi, 106

第二一〇節 マラトンの役 (前) エレクトリアを掠奪せし波斯人は、老齡のヒツピアス(註一)を嚮導と